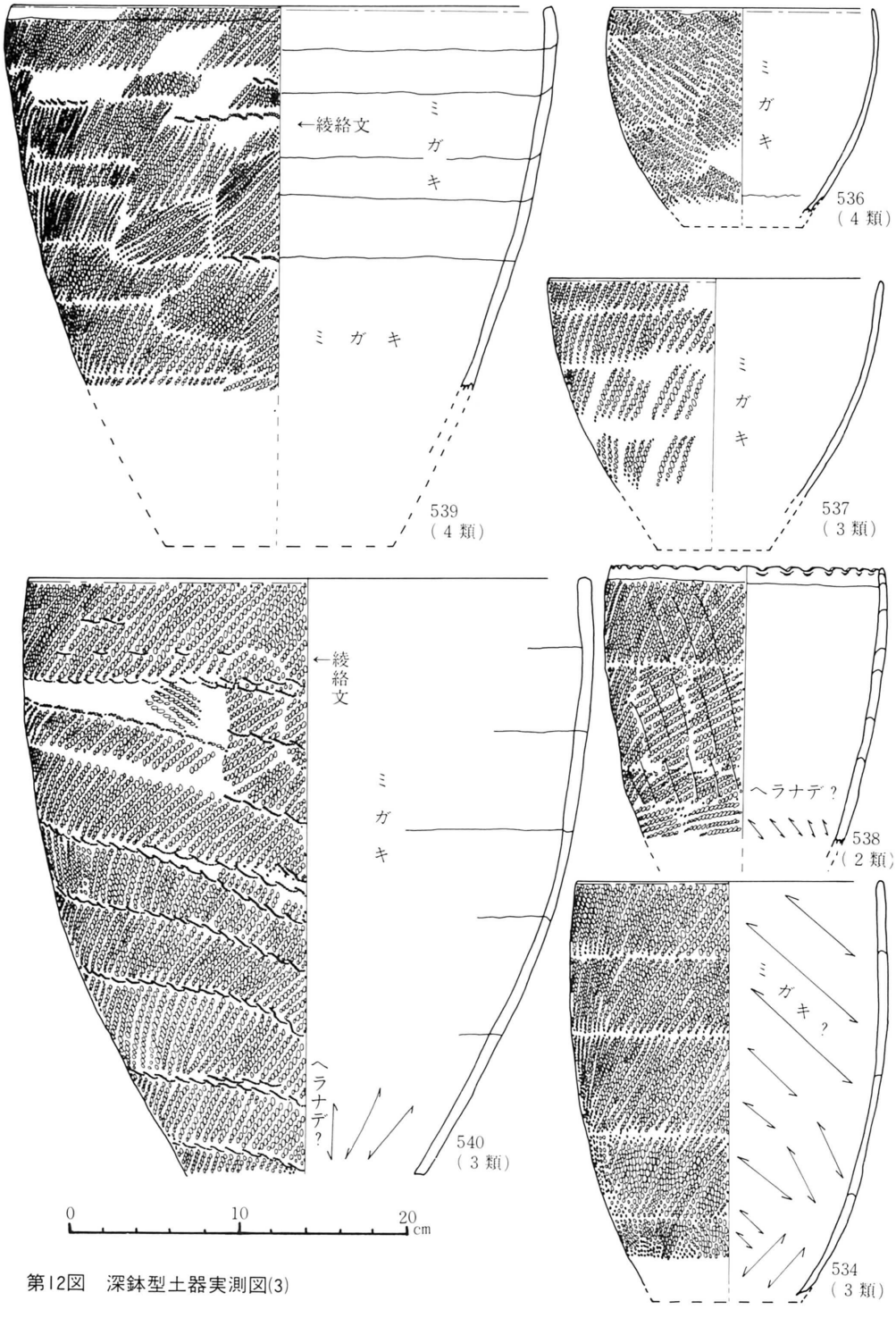


第12図　深鉢型土器実測図(3)

ⓑ **甕形土器**（第13～16図、図版19・20）　やや高めの器高をもち、内湾気味に推移してきた体部がその上端部近くで外反気味に転ずるものである。したがって体部と口縁部に分化したものである。カーヴの転換部は肩部的なものとなる。最大径は肩部やや下位の体部上半部にある。口縁部形状・施文の異同により細分出来る。体部縄文は口縁部の異同に対応しての変化が見られる。

(1) **甕形土器第1類**（第13図 543、図版19）　口縁部・肩部他に文様帯をもつ。口唇には少なくとも2個一対の小波状乃至小突起をもつ。文様帯の上下限は沈線であり、その間に太腿骨文(?)のみ施文されるもの、上位に羊歯状文の簡略化されたもの、下位にK字文の変種文をもつ二段構成のものの二種がある。後者の口縁外面には縄文が施文される。また後者は体・肩・頸・口縁部に分化している器形をもち、その施文の入念さともあわせて若干の疑問があるが、一応ここに含めておく。体部には横位回転による帯状斜縄文が付され、後者には綾絡文も併用される。またその下半部は無文化・研磨される。極めて入念なつくりである。

以上のものの体部内外両面に煤様のものが付着しており、煮沸その他に用いられたことは明らかである。

(2) **同第2類**（第13図65他、図版19）　平縁をもち、口縁部無文のものである。最大径が口縁にあるものと、体部上半の肩部直下近くにあるもの、の二種があるが、一括してある。口縁部は内外ともに入念にヘラミガキないしナデを施こされる。内面の屈曲部は稜をなす。器形に大中小の三種ある。小型のものほどつくりは雑である。うち65の内面には漆その他の樹脂状の付着物が見られる。小形のものも一応この類に含めた。体部には斜縄文・羽状縄文が付される。大略整然と施文されるが、入念に横位回転されるものとそうでないものの両者が存在する。内面にはヘラミガキ・ナデ調整痕が顕著で平滑である。成形状況は深鉢のそれに似る。補修孔をもつものも少なくない。

これにも器内外両面に煤様の炭化物が付着している。

(3) **同第3類**（第13・14図 212・541 他、図版19）　ほぼ直上し、小波状をなす口縁をもつ。肩部の張り出しはもっとも強い。器形には大・中の二種がある。小波状化は圧力による。

口縁部は研磨され、無文である。体部には帯状の斜縄文が入念に付される。その殆どの例に綾絡文が伴なう。これは一特徴とされてよい。

いずれにも非常に厚く膜状の炭化物様の付着物が見られ、煮沸用に用いられたであろうことは明らかである。

(4) **同第4類**　小波状口縁を有し、肩部以上の口縁部にも縄文が付されるものである。保存状態が悪く不明な点が多いが一応独立させた。

(5) **同第5類**（第13・14図 213・222 他、図版19）　小波状化され無文化された口縁をもつ。小波状が第3類とは異なり、やや斜位になりかけている。あるいは、単なる圧力により形成されるのではなく、いわば彫刻的に凹みをつくり出されているものである。大小の別がある。

体部縄文施文は若干不整な感がある。その他の項目は他に通ずる。

(6) **同第6類**（第14・15図 219他、図版19）　口縁部・体部境界に沈線をもつ。波状口縁の形状は第5類に似る。小波状化の技法がいっそう入念になったといえる。口縁内部の沈線の有無により2種に分かちうる。6－aは無いもの・6－bは有するものである。なお沈線まではいかない段程度のもの、複数沈線をもつものも、その口縁部形状の類似性からここに含めたものもある。器に大小がある。縄文の種類・原体回転方向は他に似る。

(7) **同第7類**（第16図 230、図版20）　口縁部に三沈線をもち、口唇部に凹みを有する波状口縁をなす。口縁内部にも凹みがあり、沈線を意識していると思われる。

(8) **同第8類**（第16図 231、図版20）　器形は第7類に似るが、口唇部に斜位刻み目と口縁下端に刺突文帯をもつものを独立させた。類例は少ない。

(9) **同第9類**（第16図 214他、図版20）　口縁端部外面に斜位刻み目、口縁部上下限にそれぞれ沈線1をもつものである。口縁に直立・内傾の印象を与えるものもある。口縁のつくりはさらに入念である。体部縄文の種別・回転方向などは他に似る。口縁内面の沈線乃至段の有無により二種に分かれる。2－a類はもたず、2－b類はもつ。ただし、両者ともに外面は全く同一であり、この差は本質的とは考えられない。

(10) **同第10類**（第15・16図 225他、図版20）　斜位刻み目風の口唇と、複数沈線文をもつ口縁をもつものである。2個一対の中突起をもつものも含めた。沈線の施文方法に、入念なものと粗なものの二種があるが、後者も大略同一部位で息つぎをしているらしい。口縁内部の沈線の状況は第9類他に同様である。

(11) **同第11類**（第16図 243）　口縁が外反せず内湾気味に直上する1例のみである。一応独

立させた。

⑿ **同第12類**（第16図 242） 口縁部文様帯をもつもので、そこに工字文風の浮彫文が付される小型品である。器内外面ともに入念に研磨され光択がある。これには煤様のものの付着は見られない。

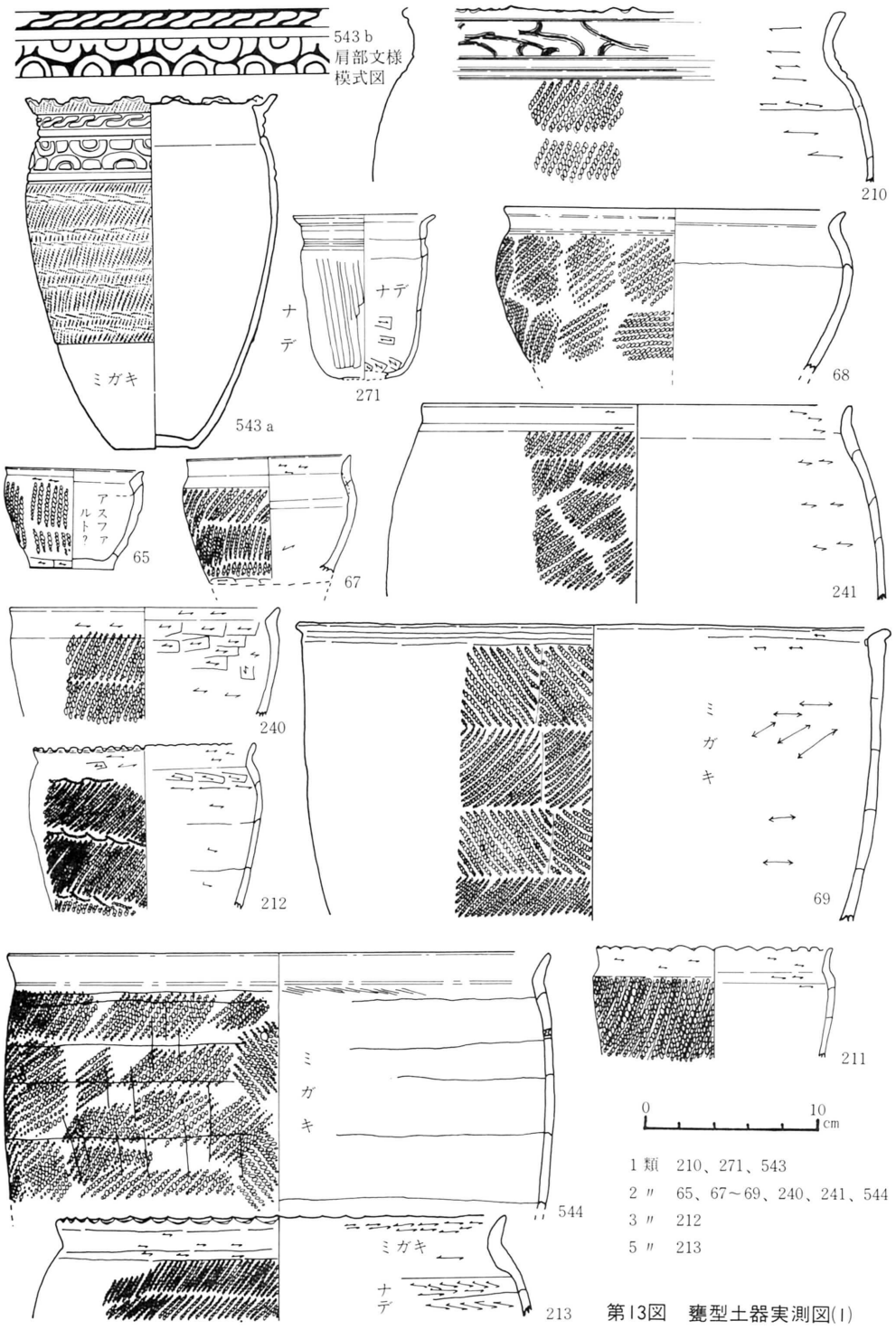
甕形土器の種類は以上のとおりである。それぞれの時期は以下のようになると思われる。第１～３類は晩期前半期、とりわけ大洞 B−C 式～C_1式期に相当しよう。第１類の口縁部文様のモチーフは大洞 B−C 式の他の器種のそれに共通するものであり、前半期の比較的古い部分に位置づけられよう。２・３類は大洞 B−C 式・C_1式の両者のいずれかを明確に出来ない。

第４～12類は晩期後半（大洞C_2～Ａ式）のものに相当しよう。12類はＡ式と断定しうるが、それ以外は大半がC_2式か、その新しい部分であろう。

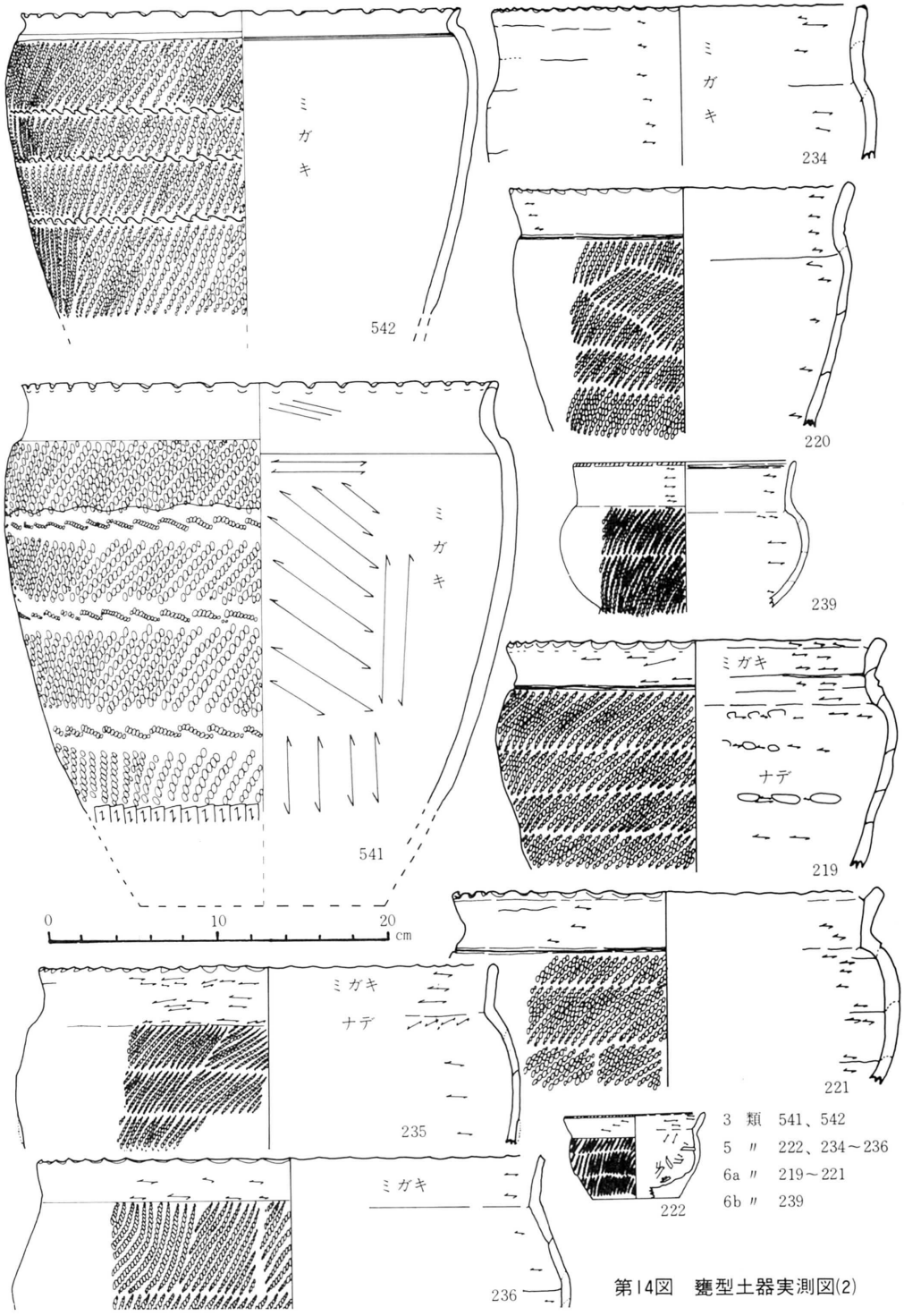
晩期前後半という粗い二大別ではあるが、甕形土器の相違が比較的明らかになったといえる。前半は比較的単純であるに比し、後半は複雑化する。煮沸用具としての深鉢型のあり方ともあわせ考えると、深鉢型は後半には若干少ない感があった。その代替としての甕形土器の複雑な存在ということになるであろう。[註)]

〔註〕水沢市里槍（さとやり）遺跡の甕形は、大略10類の範ちゅうに納まるものである。ちなみに深鉢型をみると、３・４類相当のものである。北上市九年橋（くねんばし）遺跡の甕形もほぼ10類に類似し、深鉢型も３・４類に類似している。いずれも深鉢の量が少ない傾向をもつ。以上の二遺跡は大洞C_2式主体である。したがって晩期後半に煮沸容器に変化が生じつつあった可能性は大である。

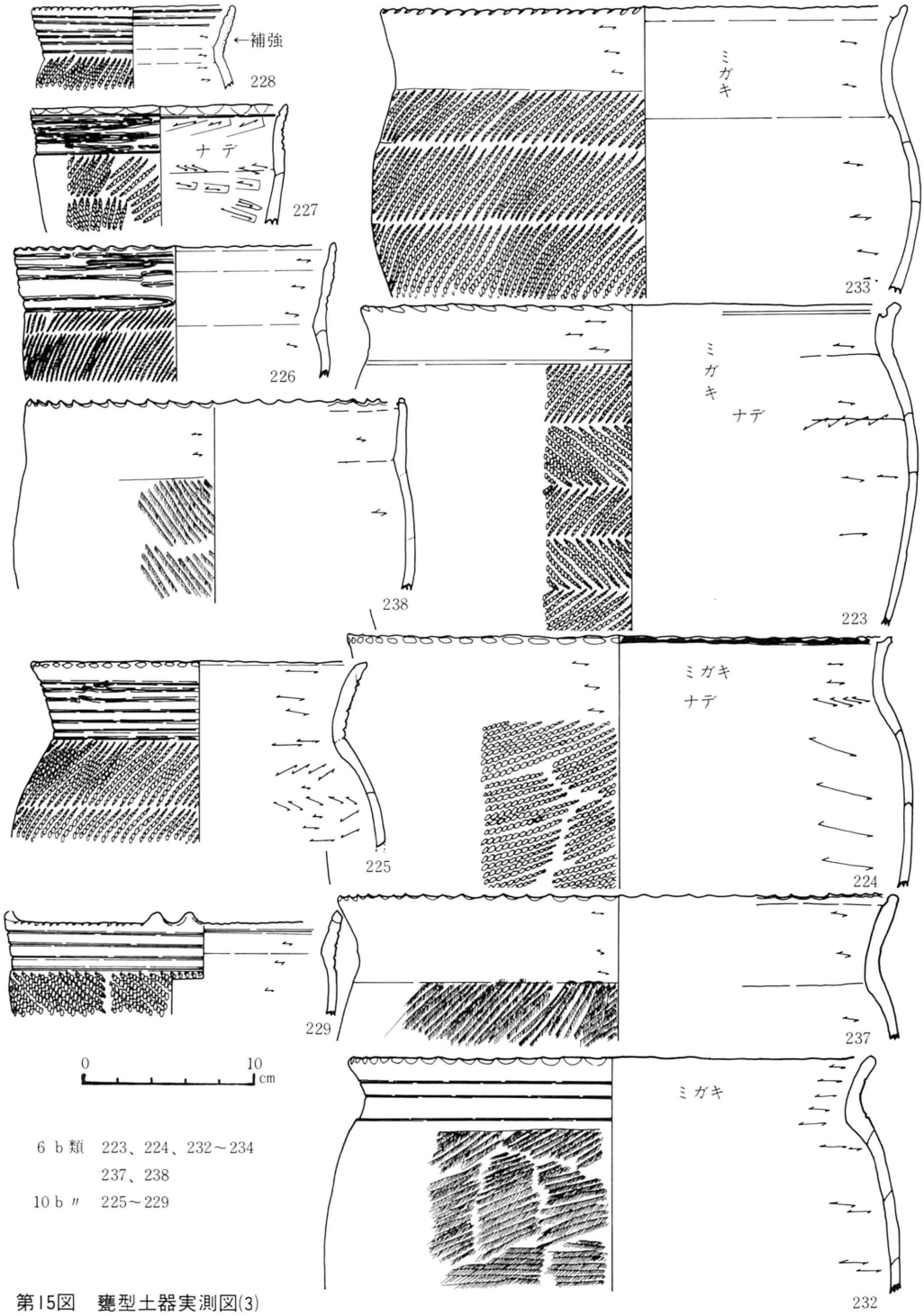
・東北大学小林正史氏の教示による
・九年橋遺跡第三次調査報告書　北上市教育委員会　昭和52年
　同　第四次　〃　〃　昭和53年



第13図　甕型土器実測図(1)

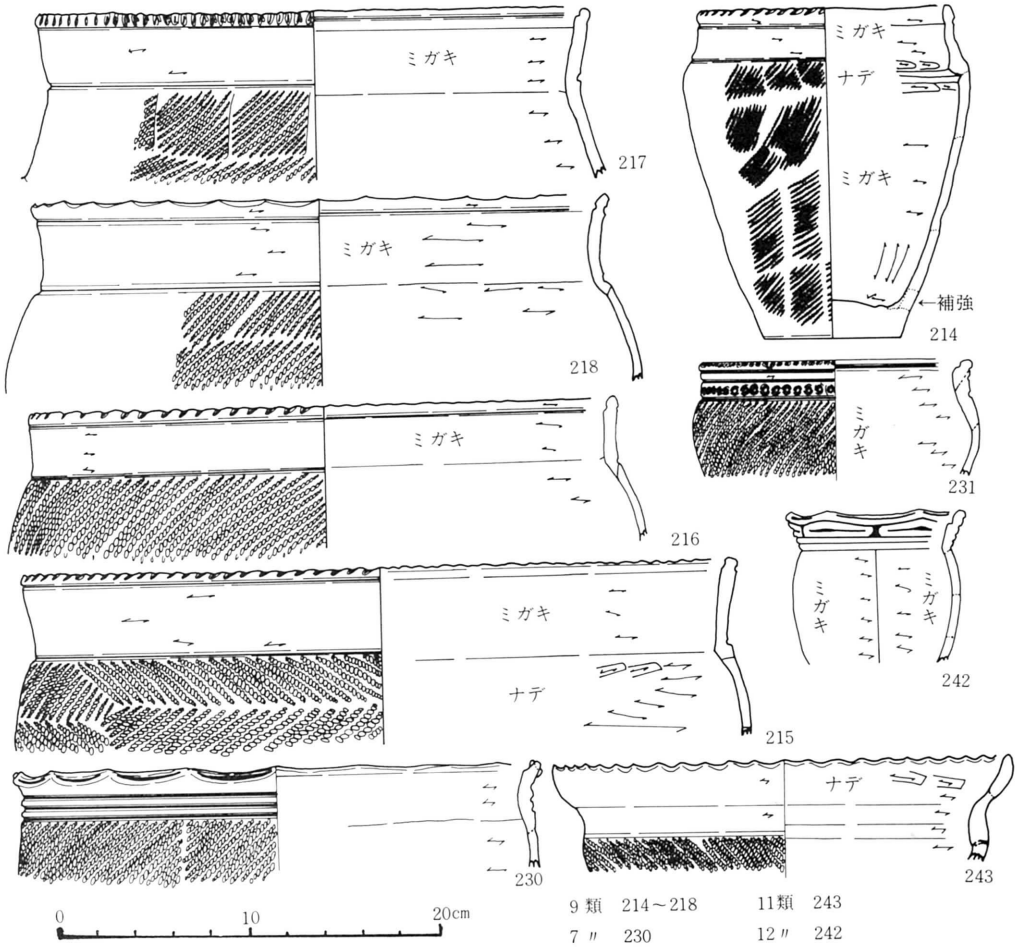


第14図　甕型土器実測図(2)



6 b 類　223、224、232～234
　　237、238
10 b 〃　225～229

第15図　甕型土器実測図(3)



9類　214～218　　11類　243
7〃　230　　12〃　242
8〃　231

第16図　甕型土器実測図(4)

ⓒ **鉢型土器**　深鉢型としたものほど器高の高くない、所謂浅鉢型に近いものすべてを鉢型として一括した。施文その他で細文出来る。

(1) **鉢型土器第1類**（第17図 511・512 第29図、図版20）　後期末（宮戸Ⅲb式）～晩期初（大洞B式）相当のものを集めた。前者の器種は不明であるが、後者には直口、屈曲あるもの、甕形に近いもの、皿に近い浅いもの等々があるらしい。復元しえた2例からみると、数個一対からなる波状口縁、口縁・体部の分化した器体をもつ。文様帯は口縁部と体部上半に設けられる。口縁部には三叉文の変種、下端には瘤状貼付文と短沈線文の組みあわせ、体部上半に沈線か、口縁と同じ三叉文の変種文が付される。体下半は斜縄文で、下端に沈線がある。底部は無文・研磨される。

(2) **同第2類**（第17図 108他、第29・30図、図版20）　大洞 B－C 式に相当するものである。

体部上半～口縁部にかけて文様帯をもつものであり、文様帯の上下限を刻み目帯で画す。器形には種々ある。器形と施文の関係は、口縁・体部の分化の不鮮明なものは体上半に１段、分化したものは口縁部と体部上半の両者に付される。刻み目帯に付加されるモチーフにも数種ある。(a)刻み目帯乃至シュリッツ、(b)C字文、(c)沈線、(d)K字文、(e)羊歯状文等である。(e)には未端の噛みあう右上がりのものと(516)、噛みあわない左上がりのもの（97）等があり、さらにシュリッツ併用もある。

(3) 同第３類（第18・19図 272他、第30・31図、図版21） 大洞C_1式相当と思われるものである。小さめの底部から体部が内湾気味に立ち上がり、端部がほぼ直上するものである。平縁がほとんどである。(a)は口縁に併行して刻み目帯をもち体部文様帯の上限を示す。刻み目には等間隔のものと一定の間隔毎に巾広部分を設けるものの二種がある。後者は羊歯状文の名残りであろう（その半截形)。体部全面に主要モチーフが展開される。それは太腿骨文とその変形文、入組文風のやや複雑なもの、その簡略化されたものなどである。太腿骨文に三叉文の変形文を加えたり、一端を尖らせたりするものもある。下限は平行沈線である。それ以下は無文化・研磨されるものと、縄文施文のものがある。平底であろうが、底部中央が周縁より若干高くなっているものが多く不安定である。

(b)は口頸的な無文の直立部分を有する器形の異なるものである（第19図８)。台は付かないのでここに含めた。口唇上に彫刻的な２個一対中突起と小波状がつくり出される。文様帯は体部上半に設けられ、太腿骨文を簡略化・形式化した半円形文と三角形文を施こす。体下半以下については(a)に同じである。

以上の第３類はすべて赤色塗彩が施こされ、もっとも精製の度合の強いものである。なお用いられている縄文はすべて所謂充塡縄文である。

(4) 同第４類（第19・20図81他、第31図６、図版22） 器内外両面ともに施文されないものである。

（４－ａ類） 平底のものである。成形・調整に精粗の二種がある。４－ａ－１とした粗製品は所謂褶珍土器的な小型品が多い。したがって狭義の実用品か否かは不明である。４－ａ－２は精製品で、器面はミガキにより平滑で光沢があり、多くのものにはさらに赤色塗彩も施こされる。補修孔を有するものもある（第19図 109)。

以上の器形や底部形状は変化に富むが、繁雑になるので一括した。

（４－ｂ類） 丸底のものである。器面調整は殆どすべてが入念にミガキ調整され、精製品に近い。半球状のものと、口縁部が分化し広口壺的なものの両者がある。また体部に縄文をもつ１例も便宜上ここに加えた（第20図)。以上は晩期前半のものであろう。

(5) 同第５類（第20図98他、図版22） 器外面に１～３本の沈線をめぐらし、その他は無文

・研磨する。口縁直下と、体下端近くに施こされる。口縁内部に沈線・段を付すものもある。器形に数種あるが一括してある。底部は揚げ底風になるらしい。漆様の塗料被膜の見られるものもある。なお内面のミガキの方位には放射状と横位の両者がある。これも晩期前半であろう。

(6) 同第6類（第20図64他、第31図7、図版22）　体部外面に縄文のみを付すもの。精粗の別があるが一括してある。精粗は縄文原体の回転方向により明白に区別しうる。口唇直下から施文されるが、体下端近くは無文部として残される。無文部はヘラミガキや削りが施こされる。若干揚げ底風になるらしい。同様に晩期前半であろう。

(7) 同第7類（第20・21図 113他、第31・32図、図版22）　口唇上に小波状乃至それに加えて2個一対の小突起をつくり出したもので、口縁に沿って平行沈線2～3本をもつ。体部以下に帯状の斜・羽状縄文をもつ。器に大小の別があるが一括してある。沈線は体下端近くにも付されるらしい。底部は揚げ底風であるらしい。口縁端部内側が顕著に稜をなすものが多く特徴的である。口唇のつくりに数種ある。(a)平縁乃至小突起をもつもの、(b_1)口唇部が外傾し刻み目の付くもの、(b_2)やや大きめの小波状とされ刺突文が加えられ、また体部縄文に綾絡文を伴なうもの、(b_3)小波状のものである。大小にかかわらず器内外両面に煤様のものの膜状付着が見られ特徴的である。晩期前半と思われる。

(8) 同第8類（第21・22図 127他、第32図4他、図版22）　第7類の大型品に類似するが、沈線がそれよりやや太目で、器形も大型化するものをまとめた。単なる平行沈線のみをめぐらす（8－a）と、波状部と連結したり、三叉文風のモチーフをもつもの（8－b）の二種がある。小波状と中突起の両者で口唇上が飾られる。単節縄文と左撚り原体が多いが、稀に無節、左撚りのものもある。内外両面に厚く煤が付着している。これも晩期前半であろうが第22図122は比較的古く位置づけられよう。

(9) 同第9類（第22・23図 102他、第32・33図、図版22・23）　第7・8類より小型品が多く、中・小型品からなる。外傾気味に立ち上がってきた体部が端部近くで急激に内傾し、稜をなすもの。文様帯はこの屈曲部から端部にかけて設定され、体部全面は縄文が施文されるのみである。屈曲度のやや弱い（9－a）と強い（9－b）に大別され、さらにモチーフにより細別しうる。9－aはK字文の面影を残した、あるいはやや直線化した羊歯状文などからなる。前者は右上がりのものが多い。上下限は沈線乃至刻み目帯で画される。体部は斜縄文が入念に付され、綾絡文を伴なうものもある。左撚り原体が多い。体下端に沈線をもち、それ以下は研磨され無文化される。若干揚げ底風になるが、底中央が周縁より高く不安定なものもある。

9－bは上面観を意識している。二個一対の小突起とその間の小波状、突起へ連結する沈線・刺突文が口縁部をめぐる。その下位の屈曲部に羊歯状文系統と思われる細かい刻み目帯が付される。一定間隔毎に巾広部分をもつb－1と、等間隔に終始するb－2とがある。肩部に瘤

状突起からなる装飾を加えるものもある。体部以下はaに似る。

以上の9類にも内外両面に煤様の付着が顕著に見られる。晩期前半の大洞C_1式と思われる。

⑽ **同第10類**（第23・24図76他、第33・34図、図版23）　体端部に屈曲部をもたず、内湾気味に直上するもので、口縁部文様帯に真正の羊歯状文をもつものである。口唇は単純な小波状か、2個一対の小波状とされる。いずれの口縁端部内側も稜をもち特徴的である。羊歯状文に数種ある。(a)末端の噛みあうやや大ぶりの曲線的なもの。右上がりで、下限には2沈線を伴なう。口唇部関連の沈線を内側にももつものがある。体部縄文を縦位回転で付したものもある。

(b)やや大型で、若干不整な感のある、噛みあわない右下がりのもの。(c)もっとも平均的・基本的なものである。体下端にも二沈線をもち、それ以下を無文にする。揚げ底風の底部をもつ。帯状斜縄文や羽状縄文をもつ。補修孔をもつものもある。(d)羊歯状文に刻み目帯が併用されるもの。末端の噛みあわない右下がりのきゅうくつな感じのものと、末端が噛みあう右上がりで、やや流動的なものの二種がある。下限は沈線である。体部には羽状縄文が圧倒的に多い。綾絡文・異条縄文を示すものもある。体下端の2沈線、それ以下の無文部は他に同様である。

以上の10類にもきわめて顕著な煤状炭化物の付着が見られる。晩期前半とりわけ大洞B−C式に相当するものと考える。

⑾ **同第11類**（第24図73他、第34図）　口縁部文様帯に羊歯状文以外のK字文・刻み目帯等をもつものを集めた。K字文類似のものは、口唇上の小突起他も文様の一部として用いている。下限は沈線であり、それ以下の体部には羽状縄文他が付される。大洞B−C式と思われる。

以上にも器内外両面に煤様のものが膜状に付着している。したがって第7・8・9・10・11類は晩期前半の煮沸乃至火にかけられる機能を有する可能性をもつこととなる。

⑿ **同第12類**（第24・25図、第34図、図版23・24）　小さめの底部から外傾気味の体部がのび、そのまま端部にいたるもの。2個一対、その三対1セット、等からなる小突起口唇(a)と、所謂平縁・刻み目による小波状口縁(b)の大別二種がある。いずれも体部上半に文様帯をもち、(a)は平行沈線、(b)も同様かシュリッツ様のものからなる。(a)は研磨・無文化されるが、(b)は他に縄文も加えられる。なおとくに(a)には塗料の付着が見られる。晩期後半とりわけ大洞C_2式相当と考えられる。

⒀ **同第13類**（第25・26図、第34・35図、図版24）　体部上端近くに屈曲部をもち、口縁・体部の分化が見られるものである。口縁部が直上するもの(a)、内傾し端部がさらに外傾するもの(b)の二種がある。(a)・(b)ともに屈曲部以上に文様帯が限定される。(a)は平行沈線のみが施文され、平縁乃至刻みによる小波状口縁をなす。底径は小さく、体下端部に沈線が配される。口縁内側に沈線乃至段が付される。(b)はさらに細分され、平行沈線のみのもの（b−1）と、連続刺突文帯も伴なうもの（b−2）がある。b−1は斜位の刻みによる小波状あるいはそれに

中突起を併用するもの、さらに通常の小波状口縁をなすものなどがある。b－2は口縁端部外面に凹凸を付した小波状口縁をもつ。連続刺突は楔形をなし、3ケ一対の若干太目のものが一定の間隔で付され、その間を細かい刺突文でうづめる。これは、羊歯状系統の変形文と見ることが出来る。体部は羽状縄文が目立つ。以上の(a)・(b)には煤様の付着物が見られる。いずれも晩期後半、とりわけ大洞C_2式相当と考えられる。

⑭ **同第14類**（第26図 167他、第35図、図版24） 器形は大略第13－b類に似るが、波状突起をもつものを別に扱かった。頸相当部が直立する(a)と、内傾する(b)とがある。口唇上には2個一対の中突起と刻み目、稀に沈線（凹み）が付される。口縁内部に沈線がめぐる。頸相当部文様帯は平行沈線、工字文（沈線のみと、刺突文併用の二種）が付される。体部には斜縄文・羽状縄文が付されたり、無文化されたりする。大型品が多い。少なくともbには煤様の付着物が見られる。晩期後半とりわけ大洞C_2式相当と思われる。

⑮ **同第15類**（第26・27図 162他、第35・36図、図版24） 所謂四脚土器と思われ、体部上半に工字文を有するものを集めた。器形は第14類に似る。平縁と、大波状突起とその両側に2個一対の中突起を有するものなどがある。なお突起もモチーフの構成要素化されているものがある。頸相当部と体部上半に文様帯がある。前者には平行沈線・刻み目を伴なう工字文・突起に連絡する工字文の祖型文などが付され、後者には工字文が1～2段付される。工字文のモチーフには2種ある。また工字文の地文に縄文をもつものもある。下限は平行沈線文である。体下半は無文・研磨され、底・脚部にいたる。赤色塗彩例が多い。Slip風の剝落部も見られ、つくり全体が入念である。大略晩期後半に、とりわけ大洞C_2式の新しい部分に相当しよう。

⑯ **同第16類**（第27・28図 110他、第36図、図版24・25） 所謂π字型工字文乃至変型工字文を有するものを一括した。器形・施文の異同により細分出来る。(a)体部上端（口縁）に施文し、それ以下は無文化乃至斜縄文が付される。平縁と2個一対の中突起をもつものがある。口縁内部に沈線がめぐる。なお体中央で屈曲する丸底風のものがあり、それのみは屈曲部にも倒立位のπ字型工字文がつく。煤様のものの付着する例もある。(b)は平縁をもつ内外入念研磨のものであり、赤色塗彩例が多い。(c)大突起4とその間に2個一対の中突起を配す口縁をもつ。体部上半に平行・斜行沈線を用いた工字文の祖型文的なものを施こす。かなり粗な施文と胎土・焼成である。これにも煤様の付着物がある。(d)変形工字文の類似文をもつものである。器に大小あるが一括した。大型品のみに煤様の付着物がある。小型品は平縁の波状乃至中突起をもつものが多いが、大型品にはボタン状の貼付を施こした大突起4とその間に中突起をもつものがある。文様帯は体部上半に限定される。a～cは大洞A式に、dは大洞A′式にそれぞれ近いと考えておく。

鉢型土器の概要は大略以上のとおりである。所謂精粗ではなく用途を考慮して大別すると、

煤様の付着物をもつものと、否のものの二群を認定しえた。また晩期前半のものと後半のそれという時期も同様に認定しえた。なお、第2・9・10・11・14類には台付型を含んでいる可能性もある。接合資料を得られなかったことから鉢型に含めたが、上述の可能性と既述の類の多くに煤様の付着物が多いことの間には関係があるかもしれね。勿論、台をもたないことの明らかな第9類の一部のように、器形と付着に相関関係を想定すべきものもあるが、一応ふれておく。

なお既述の各類を精製・半精製・粗製土器に区分すると次のようになる。

1　類　精　製
2　類　〃
3 a 類　〃
3 b 類　〃
} 字義どおりの精製土器である。顔料の塗彩が見られる。

4 a 類　精製と半精製の混在、両者を区分すべきかもしれない。

4 b 類　〃　前者が若干多いと思われ。やはり区別すべきかもしれない。

5　類　精製、これもかなり入念である。朱彩等がある。

6　類　半精製と粗製が混在する。

7～11類　半精製、煤様の付着物あり。

12 a 類　半精製

12 b 類　精製、5類的な入念さである。朱彩等がある。

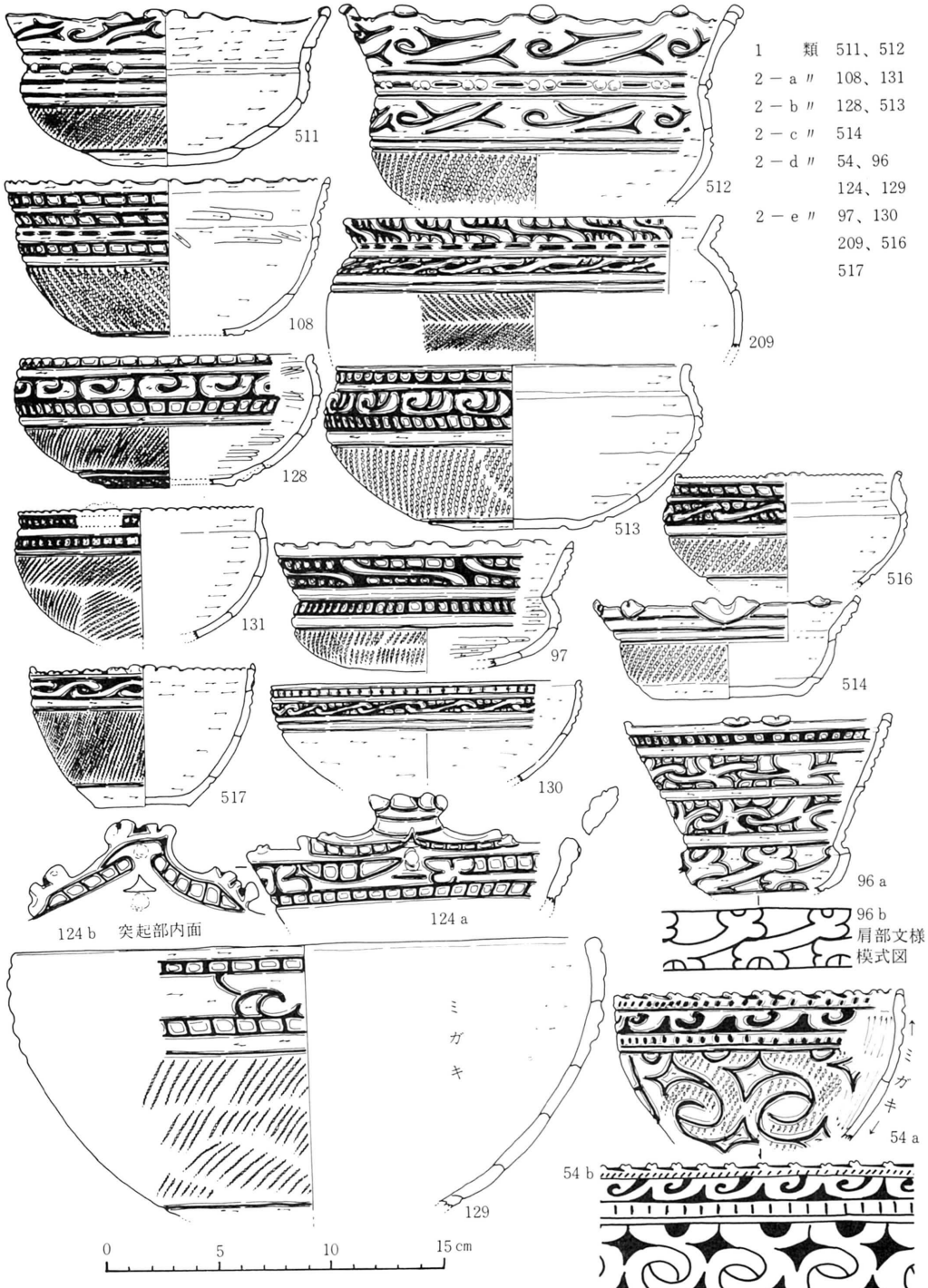
13・14類　半精製、煤様の付着物あり。

15　類　精製

16 a ・16 b 類　精製

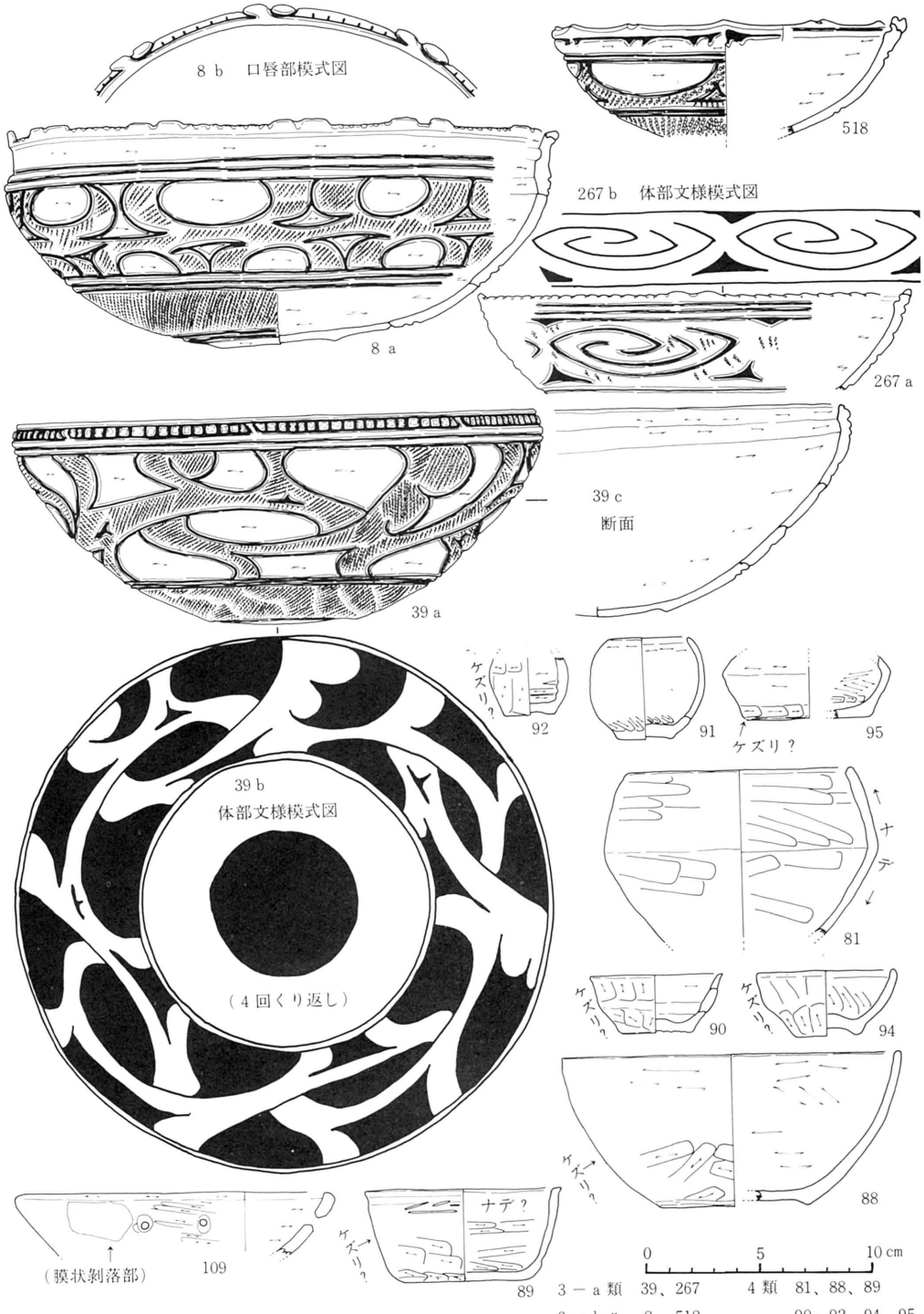
16 c ・16 d 類　半精製乃至かなり粗製的。煤様の付着物あり。

これを見ると、精製土器には煤様のものの付着例が少ないこと、半精製乃至粗製にそれが多いという顕著な区別を指摘できる。したがって既述の土器の三大別は、その用途をある程度反映したものと見ることができる。



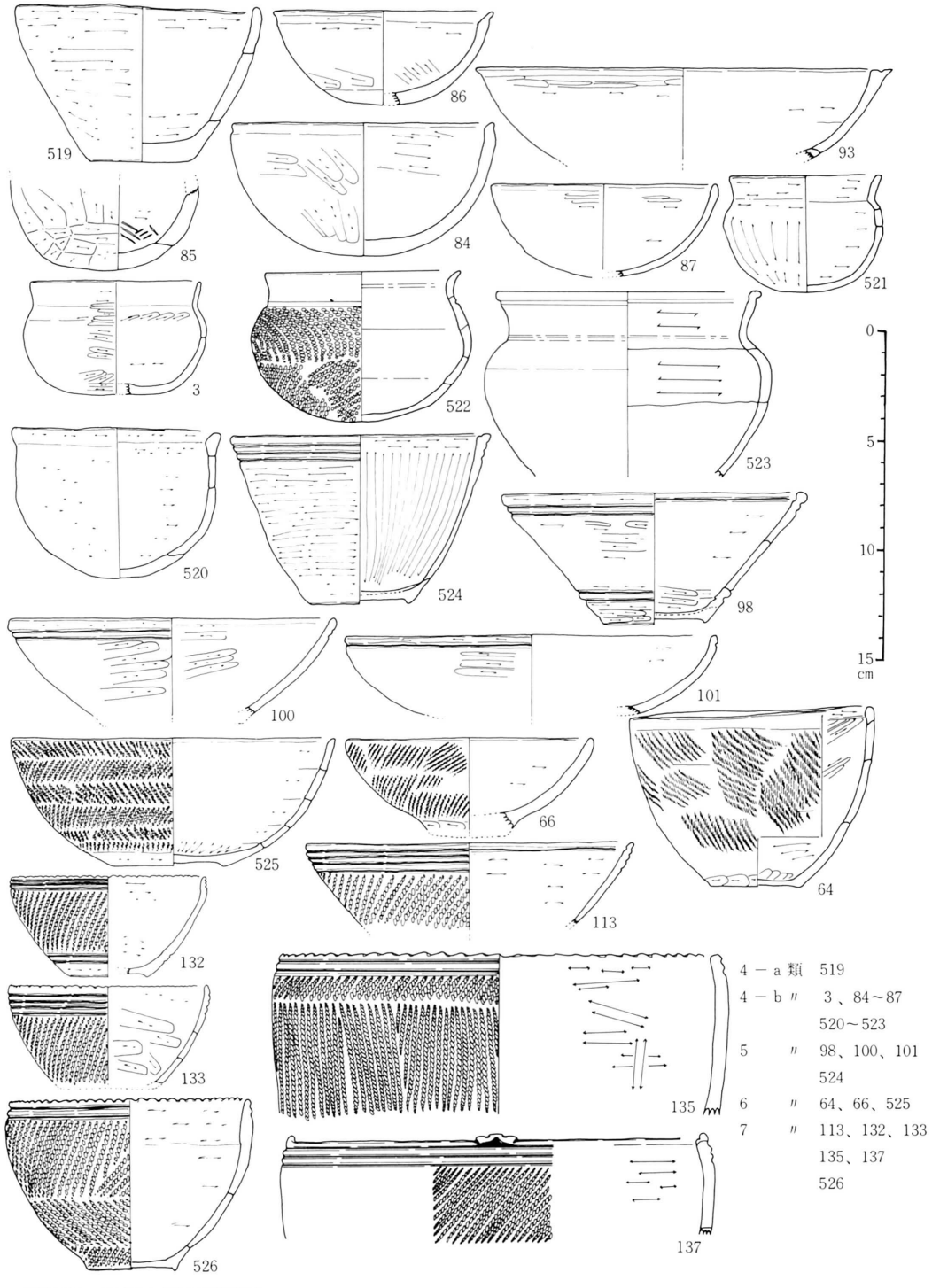
第17図　鉢型土器実測図(1)

第18図　鉢型土器実測図(2)



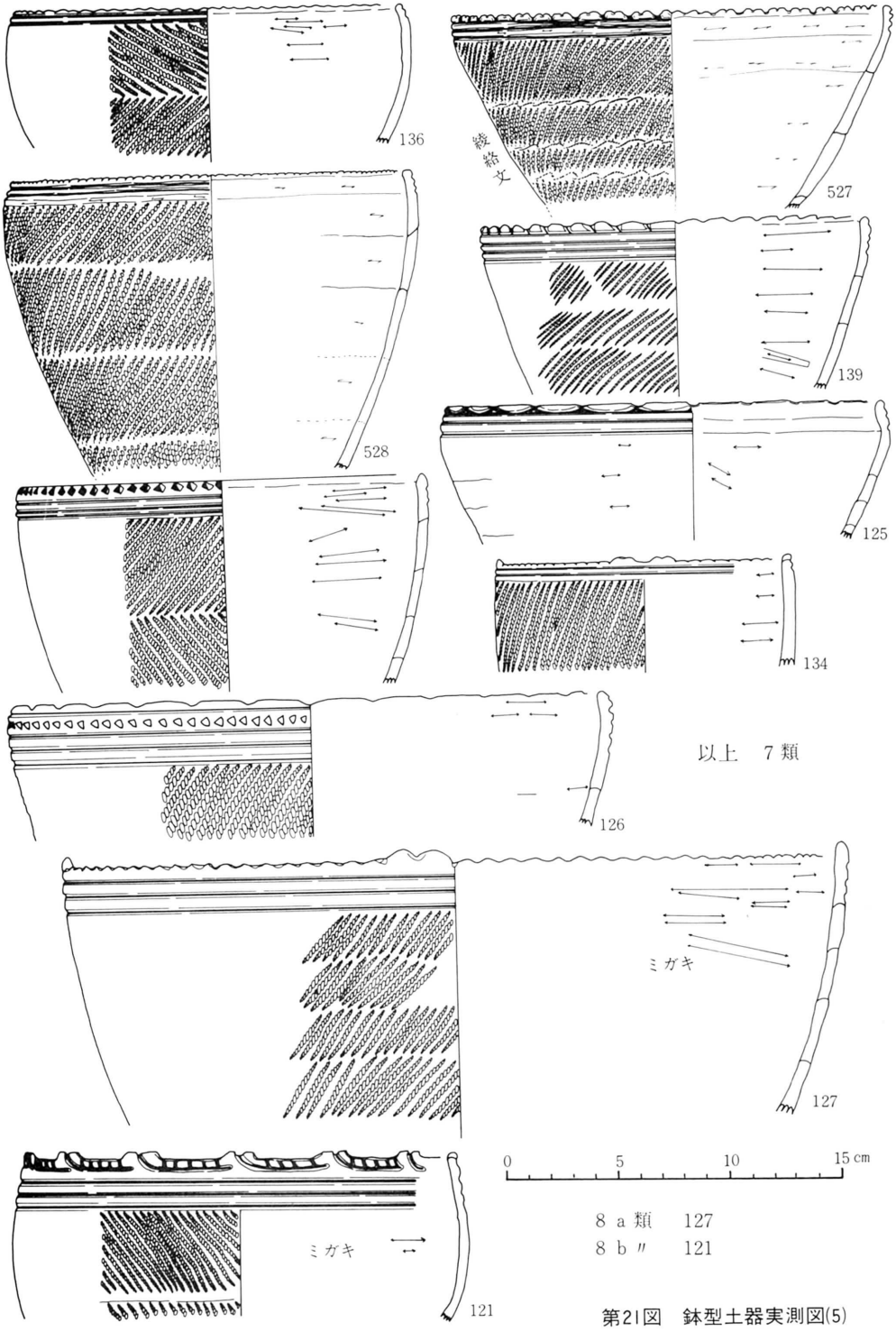
3－a類　39、267　　4類　81、88、89
3－b〃　8、518　　90～92、94、95
109

第19図　鉢型土器実測図(3)



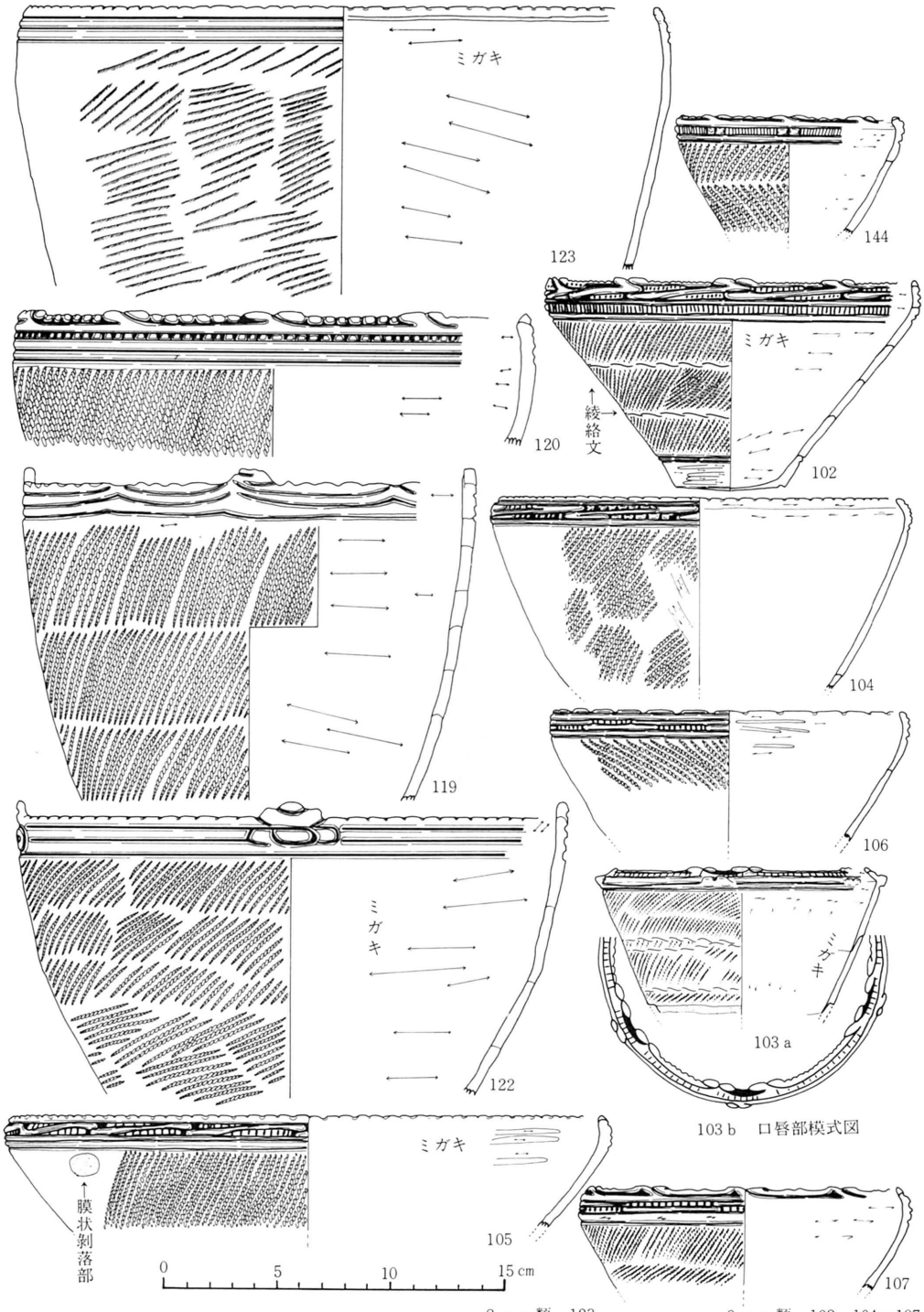
4 − a 類　519
4 − b 〃　3、84～87
520～523
5　〃　98、100、101
524
6　〃　64、66、525
7　〃　113、132、133
135、137
526

第20図　鉢型土器実測図(4)



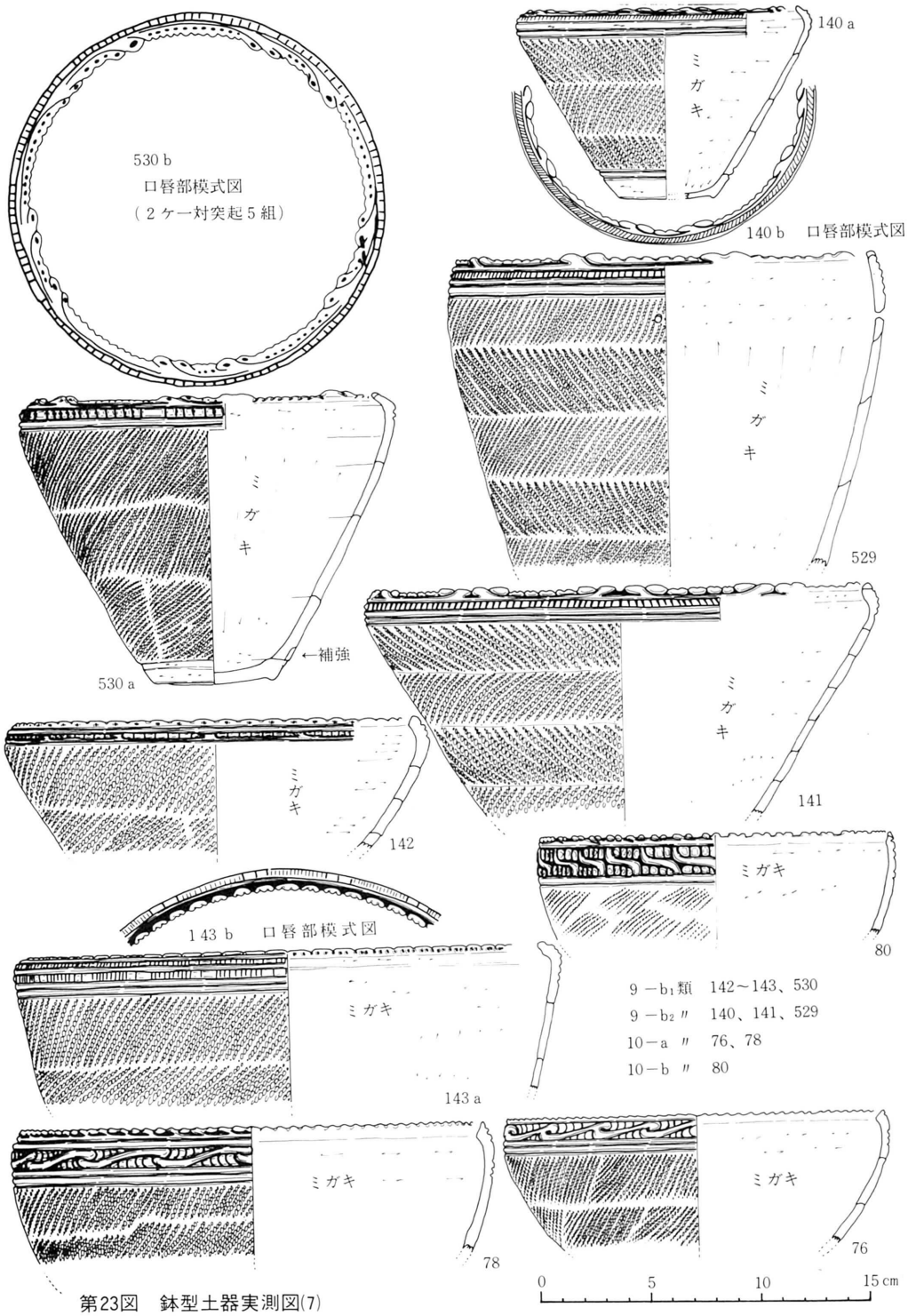
8 a 類　127
8 b 〃　121

第21図　鉢型土器実測図(5)

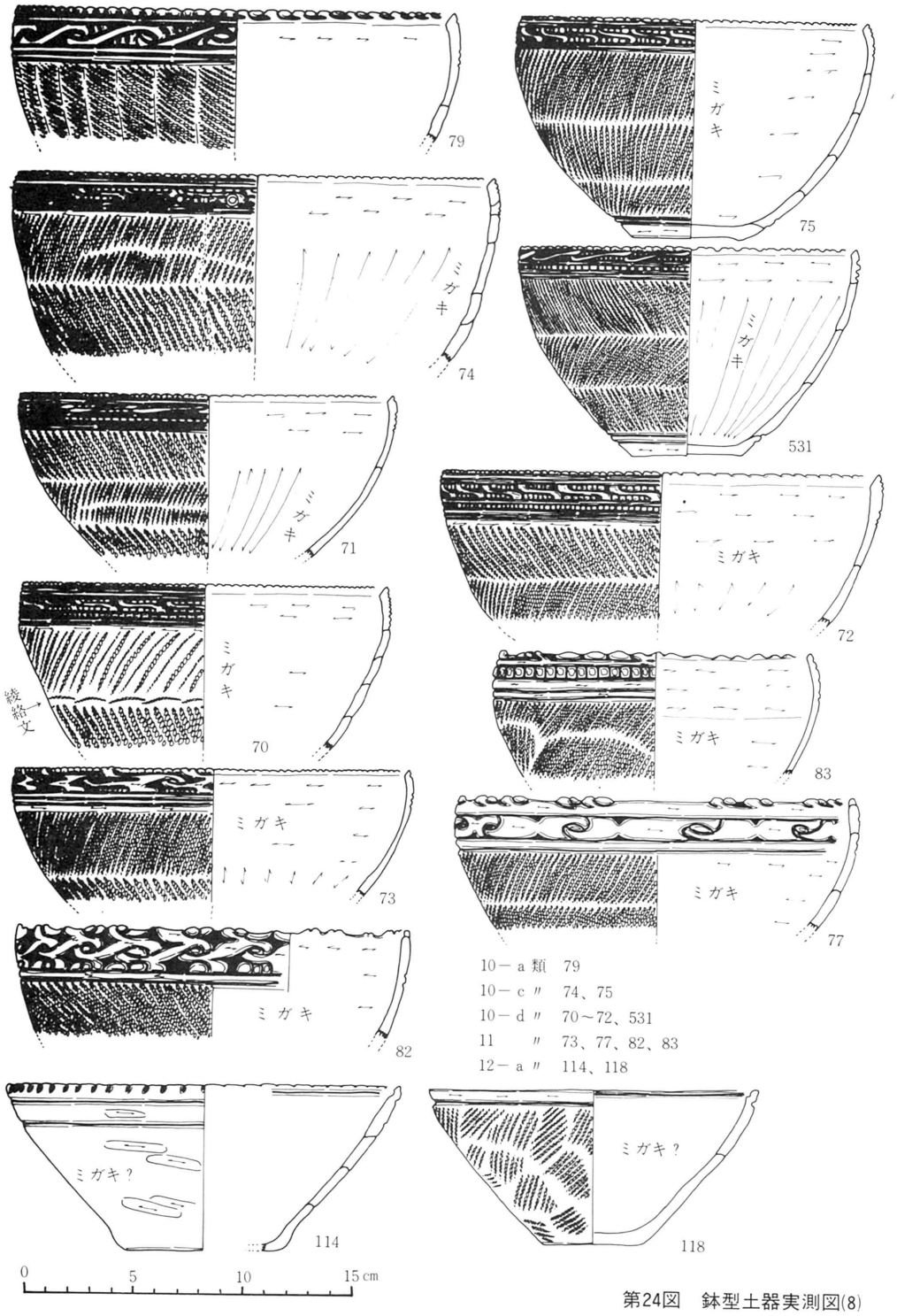


8 － a 類　123
8 － b 〃　119、120、122
9 － a 類　102、104～107
9 － b_1 〃　103

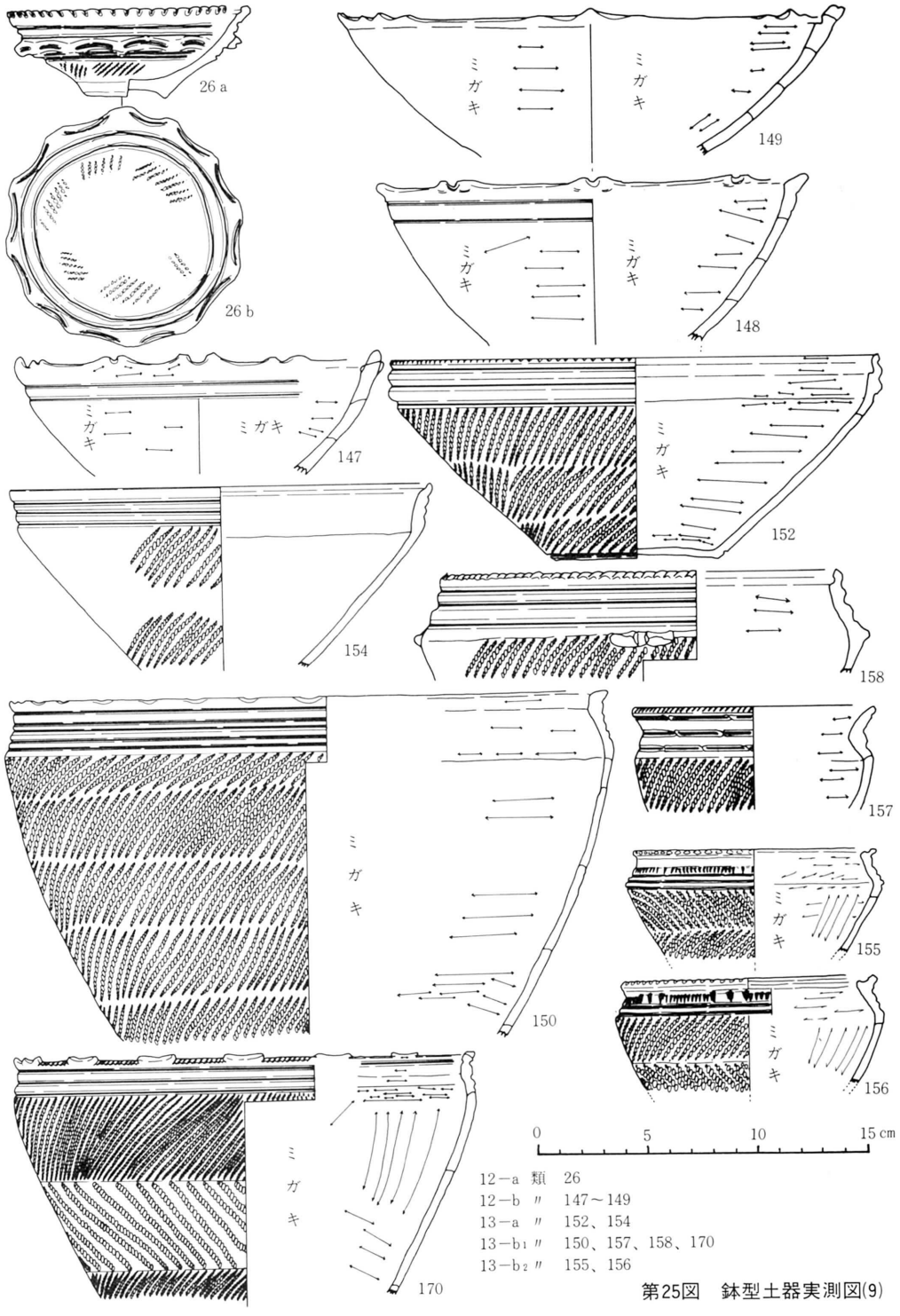
第22図　鉢型土器実測図(6)



第23図　鉢型土器実測図(7)

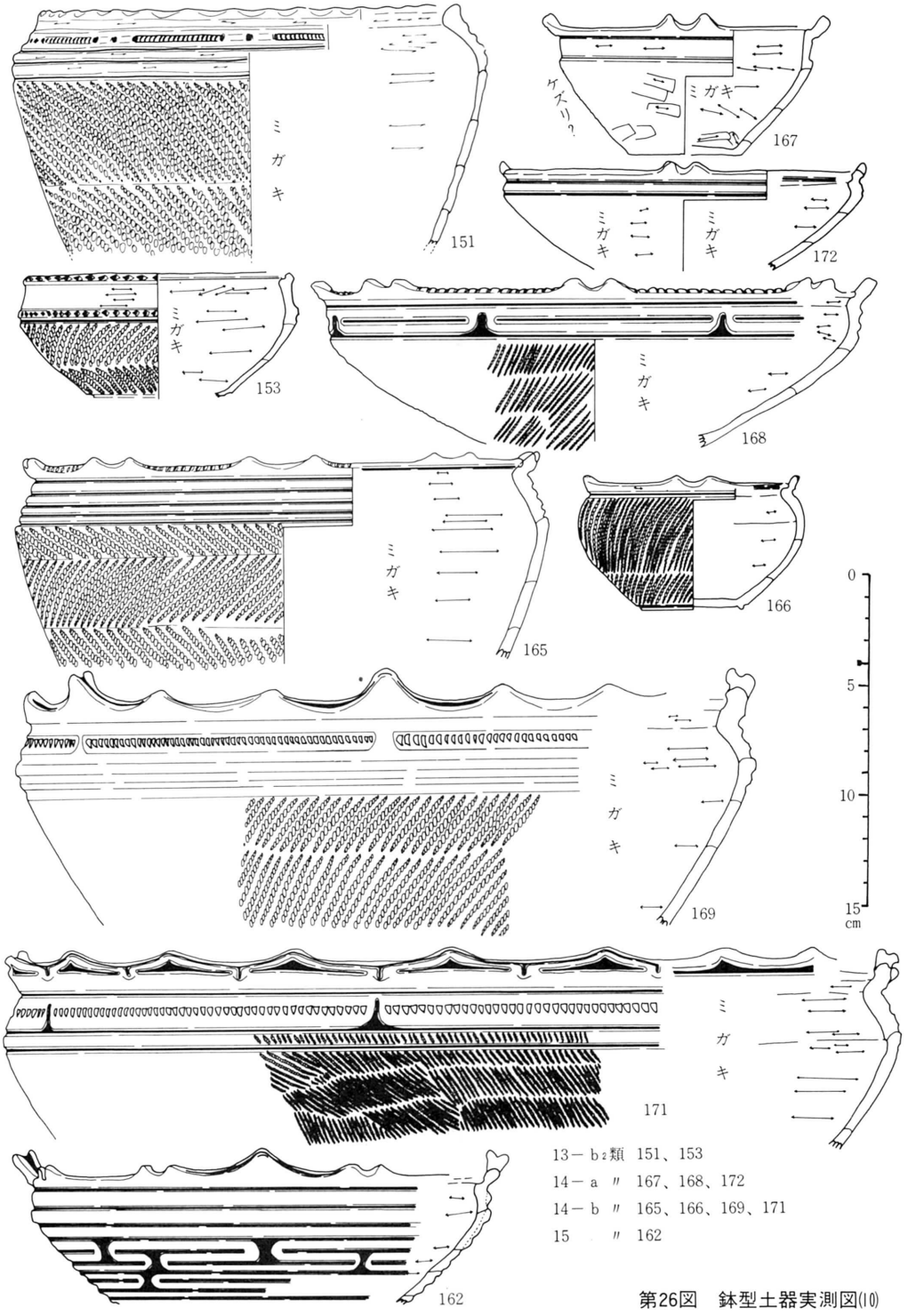


第24図　鉢型土器実測図(8)



12－a 類　26
12－b 〃　147～149
13－a 〃　152、154
13－b1 〃　150、157、158、170
13－b2 〃　155、156

第25図　鉢型土器実測図(9)

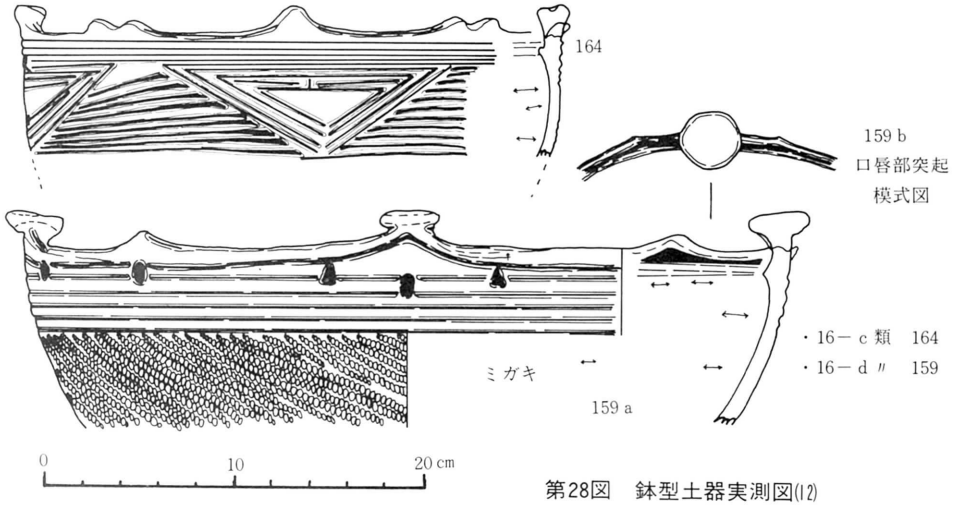


13－b₂類　151、153
14－a　〃　167、168、172
14－b　〃　165、166、169、171
15　　〃　162

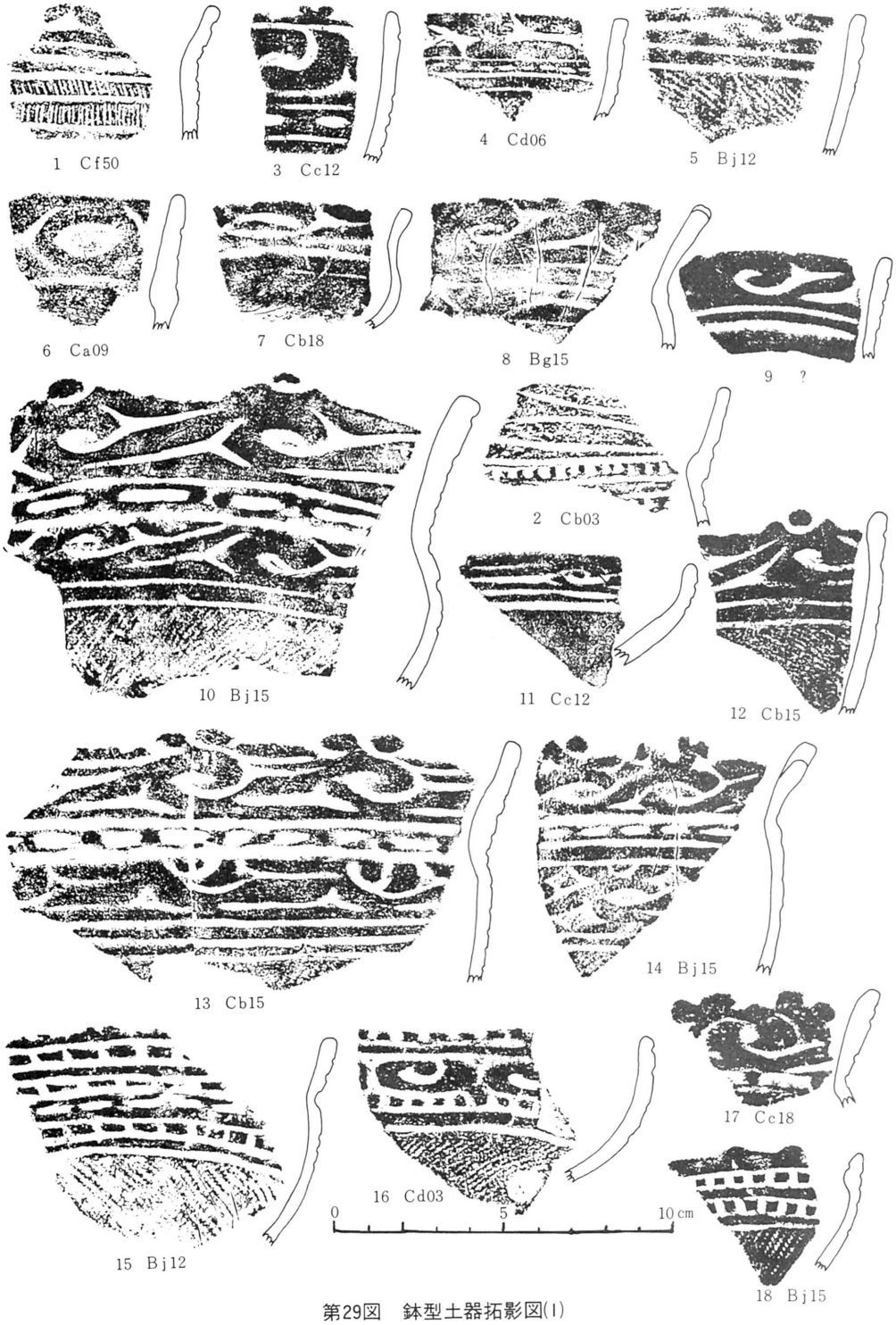
第26図　鉢型土器実測図(10)

161
31
160
（6回くり返し）
ミガキ
163
110
111
112
ミガキ
ミガキ
117
ミガキ
ミガキ
116
ミガキ
ミガキ
115
0 5 10 15 cm
208
15　類　31、160、161　　16－d類　208
16－a〃　110～112、163
16－b〃　115～117

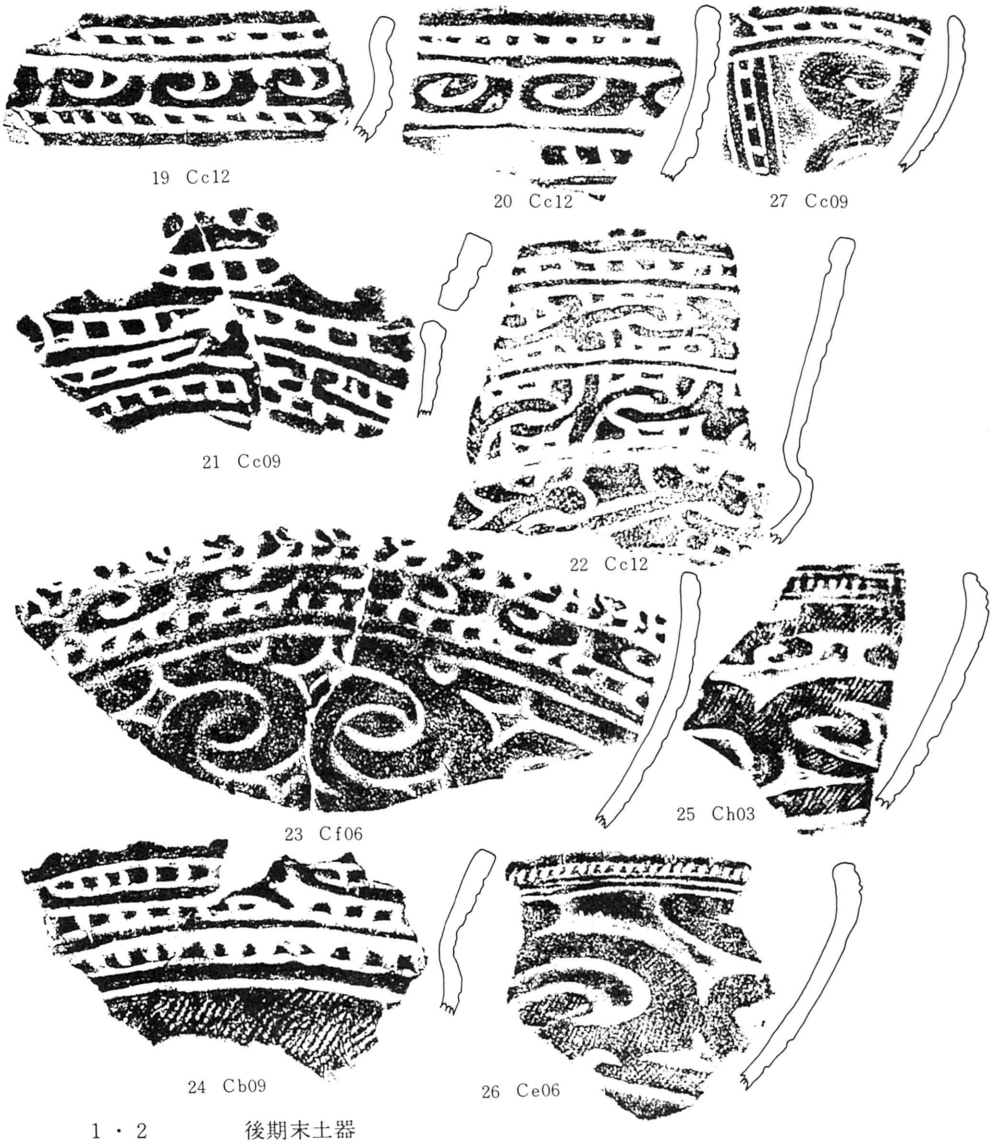
第27図　鉢型土器実測図(11)



第28図　鉢型土器実測図(12)

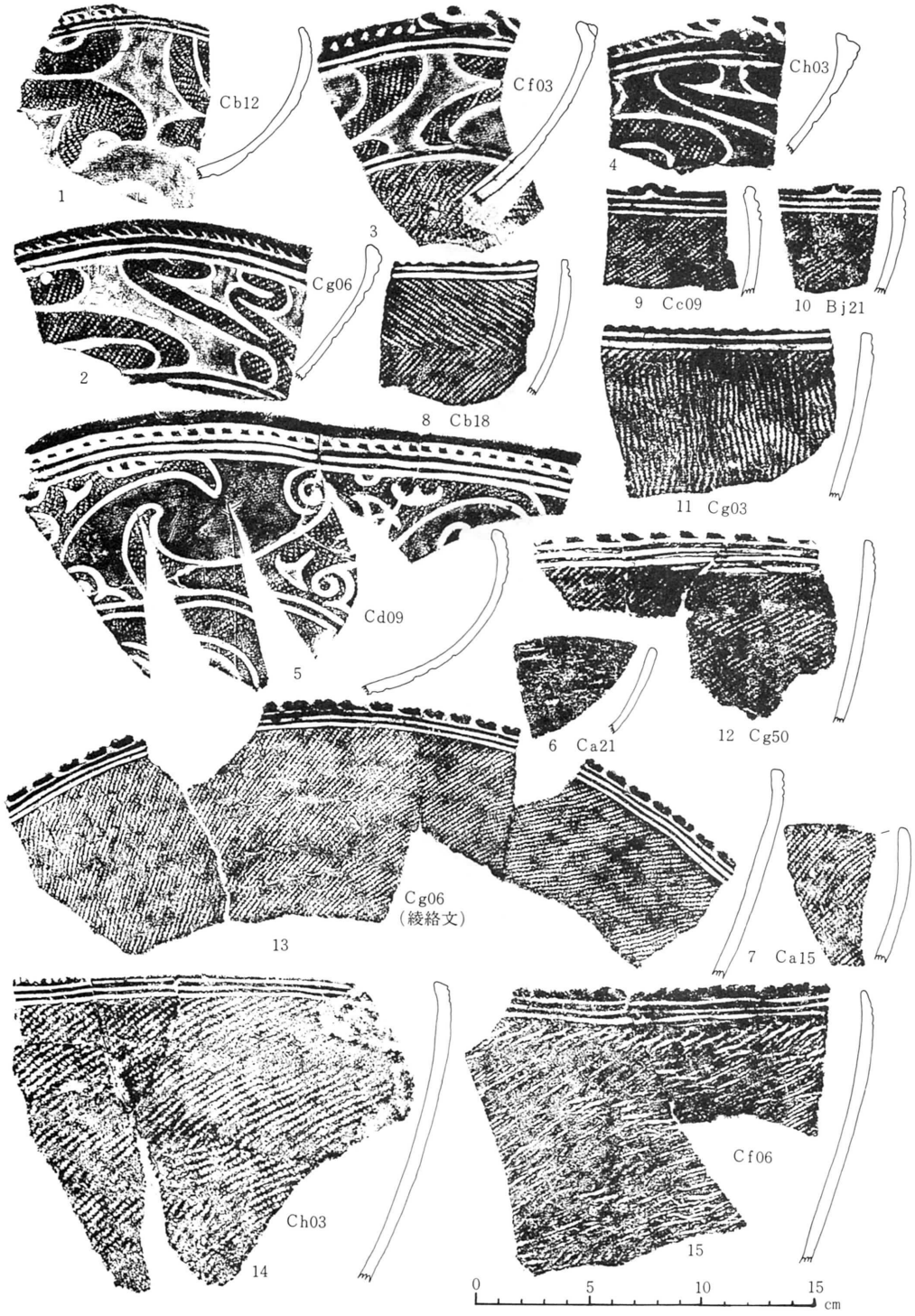


第29図　鉢型土器拓影図(I)



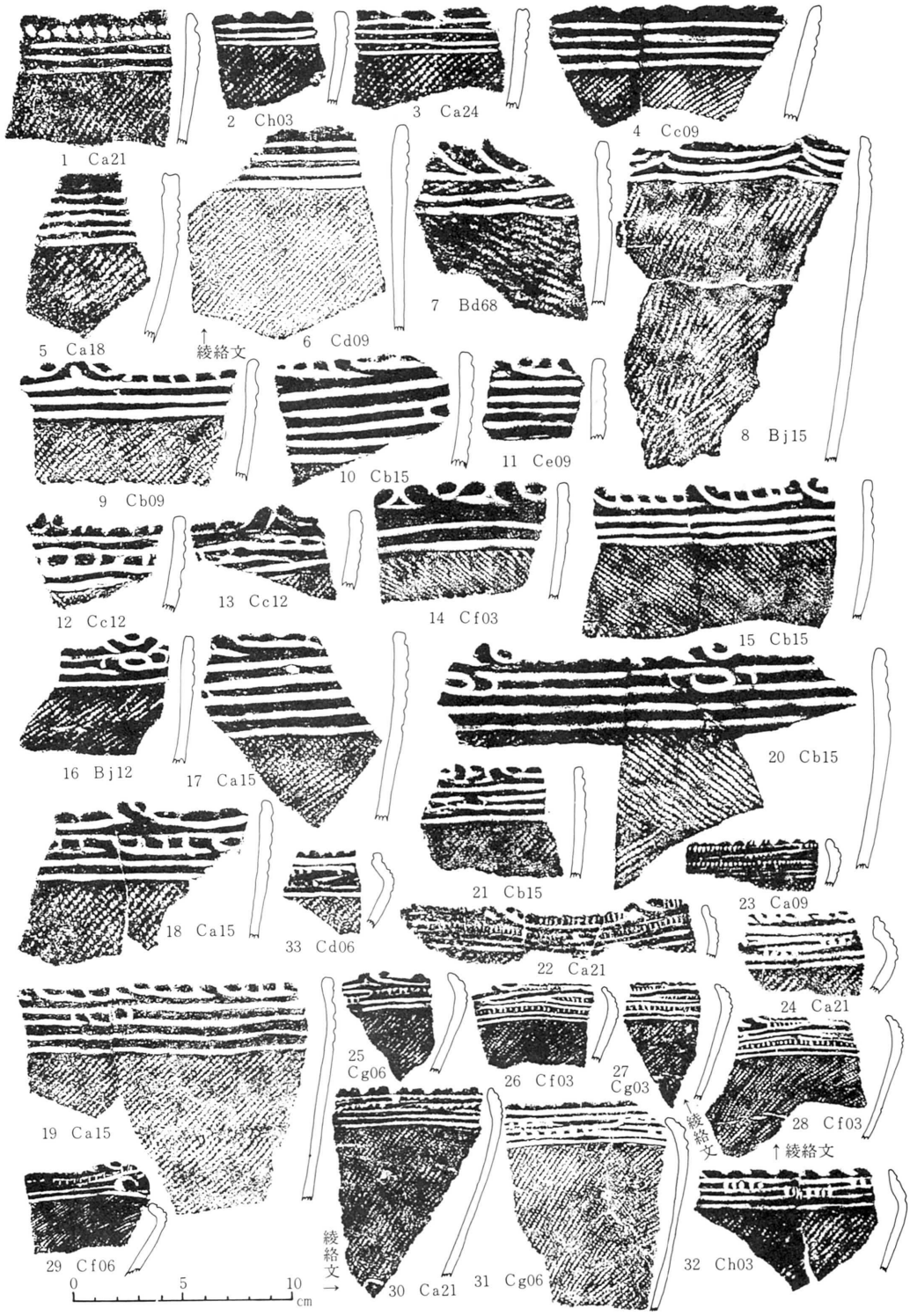
1・2	後期末土器
3～14・17	1　類
15・18	2－a 〃
16・19・20	2－b 〃
21～23	2－d 〃
24	2－e 〃
25・26	3　〃

第30図　鉢型土器拓影図(2)



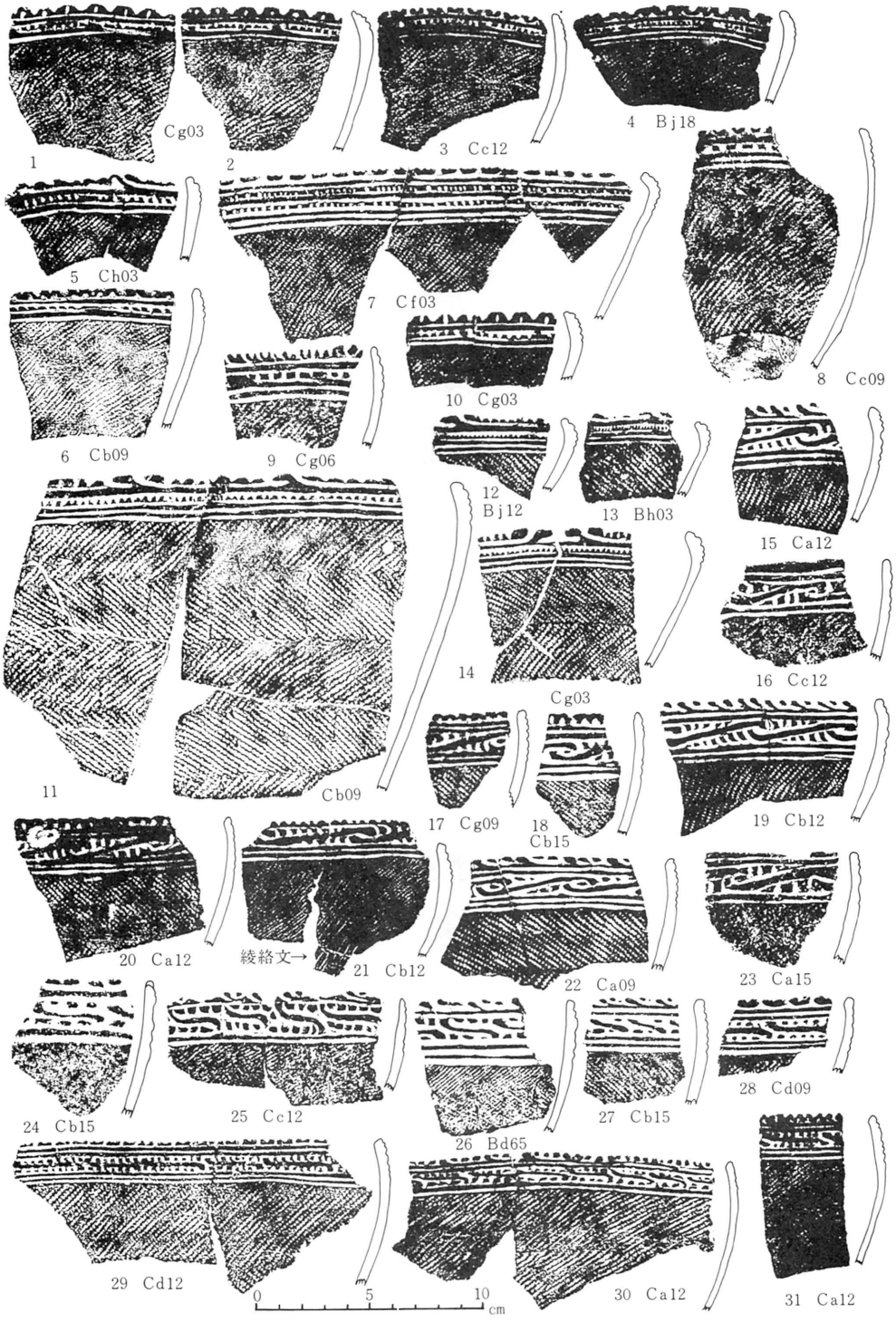
1～5　3類　　7　　6類
6　　4〃　　8～15　7〃

第31図　鉢型土器拓影図(3)



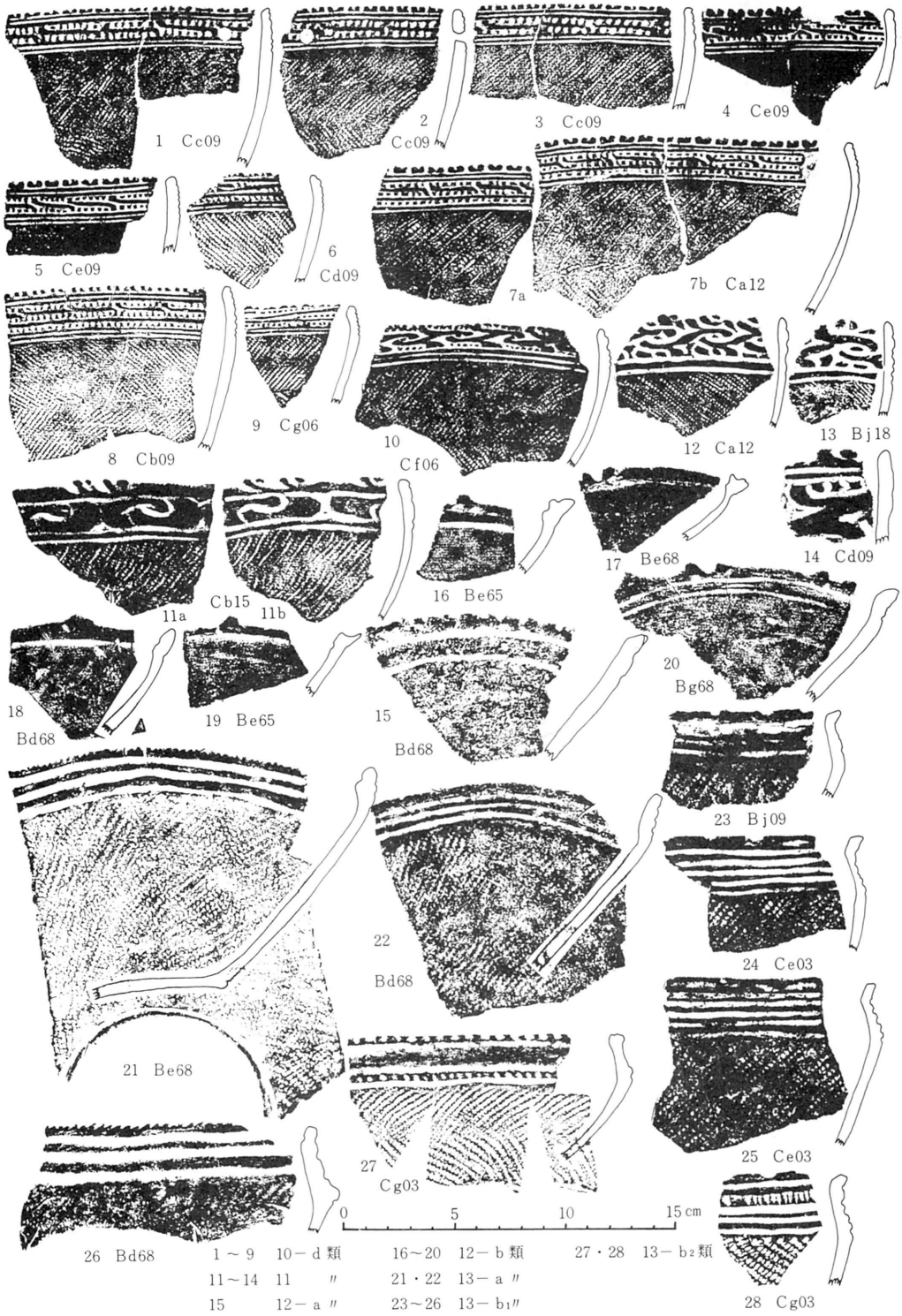
1～3　7類　　4～21　8類　　22～33　9－a類

第32図　鉢型土器拓影図(4)

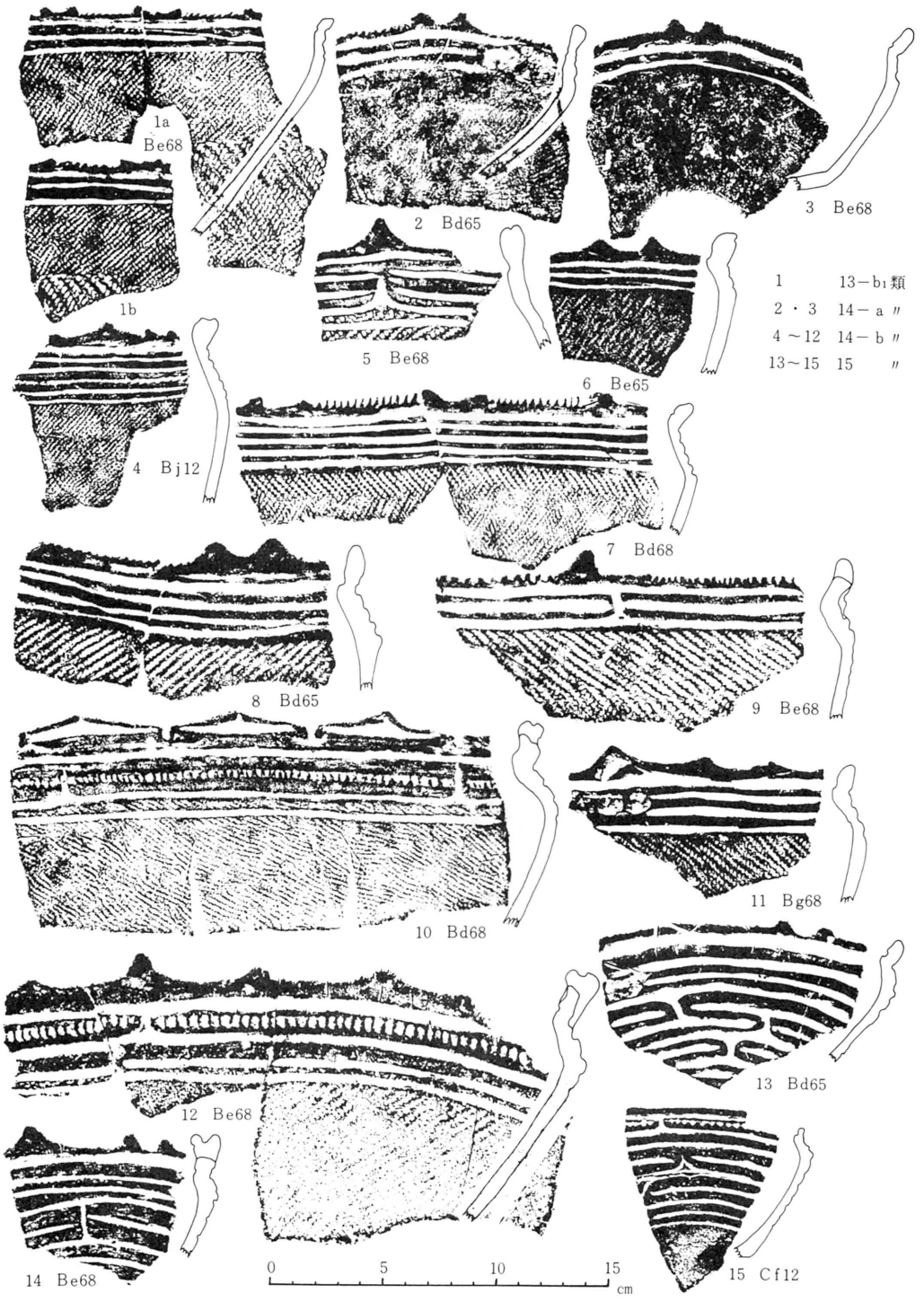


1～10　9－b_1類　11～14　9－b_2類　15～23　10－a類　24～27　10－b類　28～31　10－c類

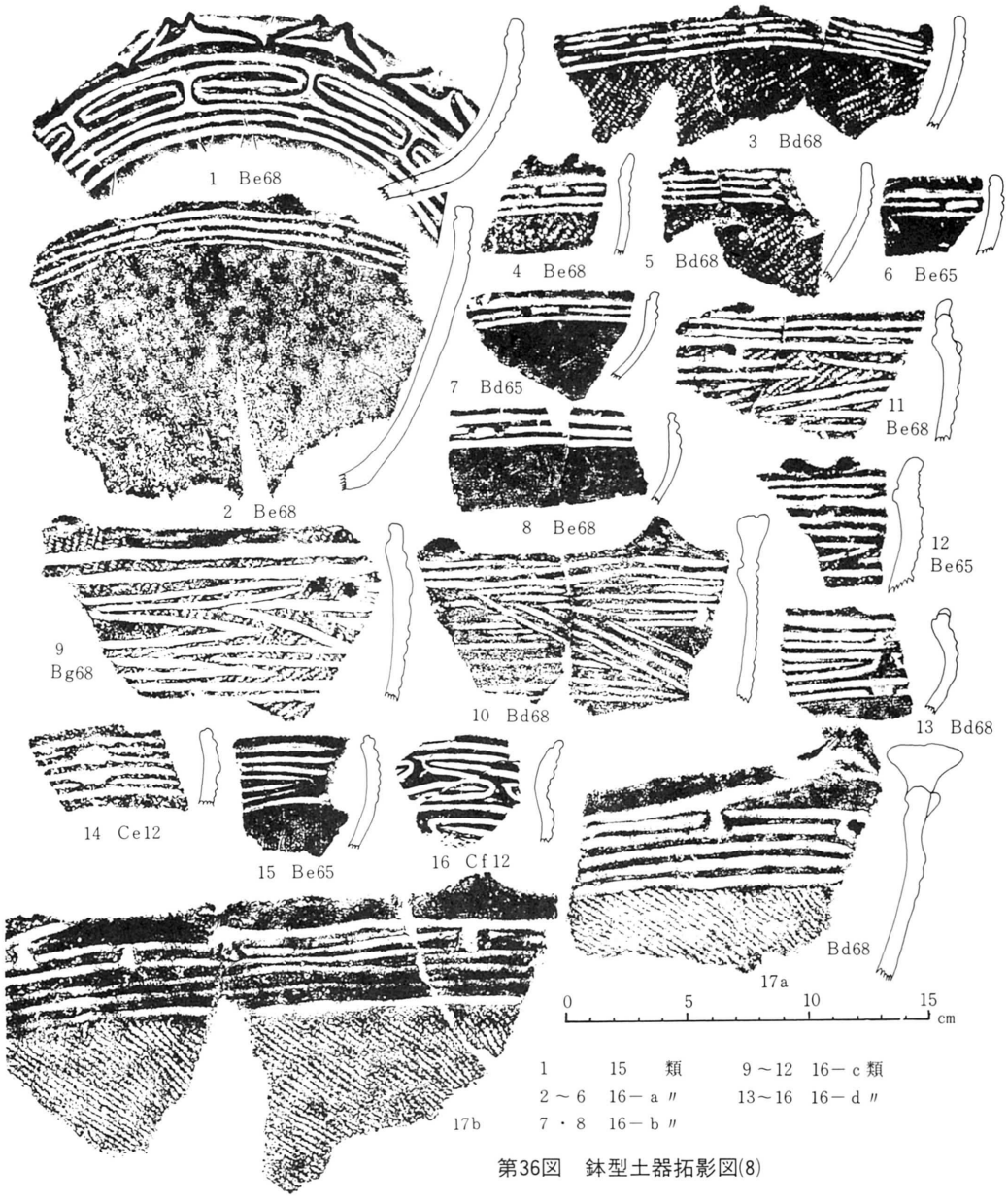
第33図　鉢型土器拓影図(5)



第34図　鉢型土器拓影図(6)



第35図　鉢型土器拓影図(7)



第36図　鉢型土器拓影図(8)

ⓓ　**台付鉢型土器**　所謂脚の付くもののうち、高坏型としたものほどの脚高をもたないものを台付鉢型として一括した。主に施文の異同により分類出来る。

(1)　**台付鉢型土器第1類**（第37図 509他、図版25）　体部(鉢部)が縄文施文か、無文化され、台部は無文化される、調整その他が粗なものである。実用に供しうる通常の大きさのもの(a)と、所謂褶珍土器的なもの(b)の二種がある。前者の器内外面には煤様の付着物が見られる。台は概ね細めのものが多いが、器高の低く、径の大なものもある。鉢部底面と一体的に残存する資料

が多く、そのような成形技法にあったとみるべきであろうか。(a)・(b)ともに晩期前半のものを主としよう。

(2) 同第2類（第38図）　小破片であり不明な点が多い二資料を仮にここに含めた。両者ともに体部上端近くが急激に屈曲し内傾する。そこに羊歯状文・連続刺突文を付す。後者の体部上半には太腿文類似文が付される。両例ともに入念なつくりである。器面に煤が付着する。大洞 B−C 式乃至C_1式相当のものと思われ、晩期前半のものであろう。

(3) 同第3類（第38・39図、第42図、図版25）　体端部近くが屈曲外反し、短かい口縁部をもつもの。屈曲部直下が最大径部位をなし、その上半が肩部的になる。したがって体・肩・口縁の各部に分化した器形となる。口唇は小波状、それと2個一対の小突起からなる。突起間は沈線で連結され、それに直交する刻みを施こして小波状化しているとも見える。羊歯状の半截形に近い。これが口縁部文様帯をなす。なお口縁下半部には刻み目帯も併用される。肩部文様帯は各種の羊歯状文からなる。末端の噛みあう右上がり・平行線化し噛みあわない形式的なもの・半截的なもの・K字文的なものなどである。体部文様帯は上半に展開する。モチーフは太腿骨文であり、真正のもの、端部の尖るものなどからなる。体下半には縄文が施文されるが、それ以下については資料が得られず不明であるが、台がつこう。

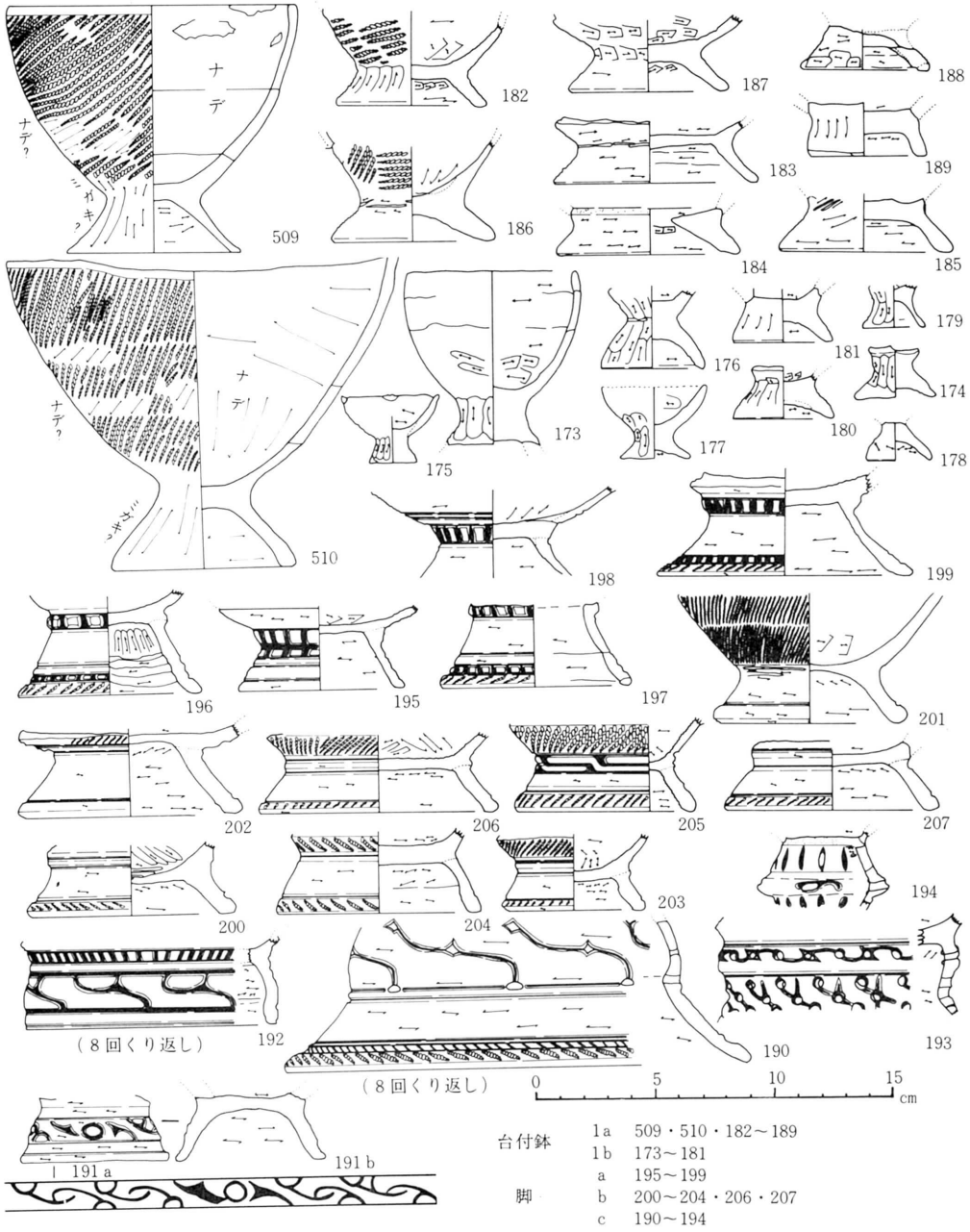
すべての資料に炭化物様のものの厚い被膜が付着し特徴的である。晩期前半とりわけ大洞C_1式相当と思われる。

(4) 同第4類（第39・40図、第42・43図、図版26）　体・肩・頸・口縁部に分化したものであり、無文の頸部が特徴的である。口唇は4ケの大突起とその間の中心に凹みある中突起からなる。中突起は沈線により隣接するものと連結され、上面観をも意識していたかの如くである。外反気味の頸部は研磨・無文化される。肩部文様帯は刻み目帯乃至形式化した半截羊歯状文の変種、平行線化した羊歯状からなり、また瘤状の貼付文が1個所につく。これと体部文様とが対応関係を示すものがあり、正面観を意図したものとも考えられる。体部上半の文様帯のモチーフは太腿骨文であるが、真正のもの・一端を尖らせたり台形・三角形を加えたもの・半円形と三角形に単純化したものなどの変種がある。下限は沈線で区切られる。体下半は縄文であり、台との境界にも沈線がめぐる、台は研摩され、無文である。器に大中小の三種があるが、ほとんどが共通性を有する。これも全資料に炭化物様の付着物が見られ、火にかけられた可能性が極めて高い。晩期前半、大洞C_1式に相当しよう。

(5) 同第5類（第40・41図、第43図、図版26）　口唇部に大突起1、2個一対の小突起を数個、それ以外に斜位刻みを施こすものである。口縁部は無文である。内傾する頸乃至肩部に工字文風の隆線文（相互の接触部は瘤状に盛り上がる）が付される。体部上半に主文様帯が展開する。モチーフは太腿文の変形文・工字文風のものの二種があるが、いずれも縄文を伴なう。

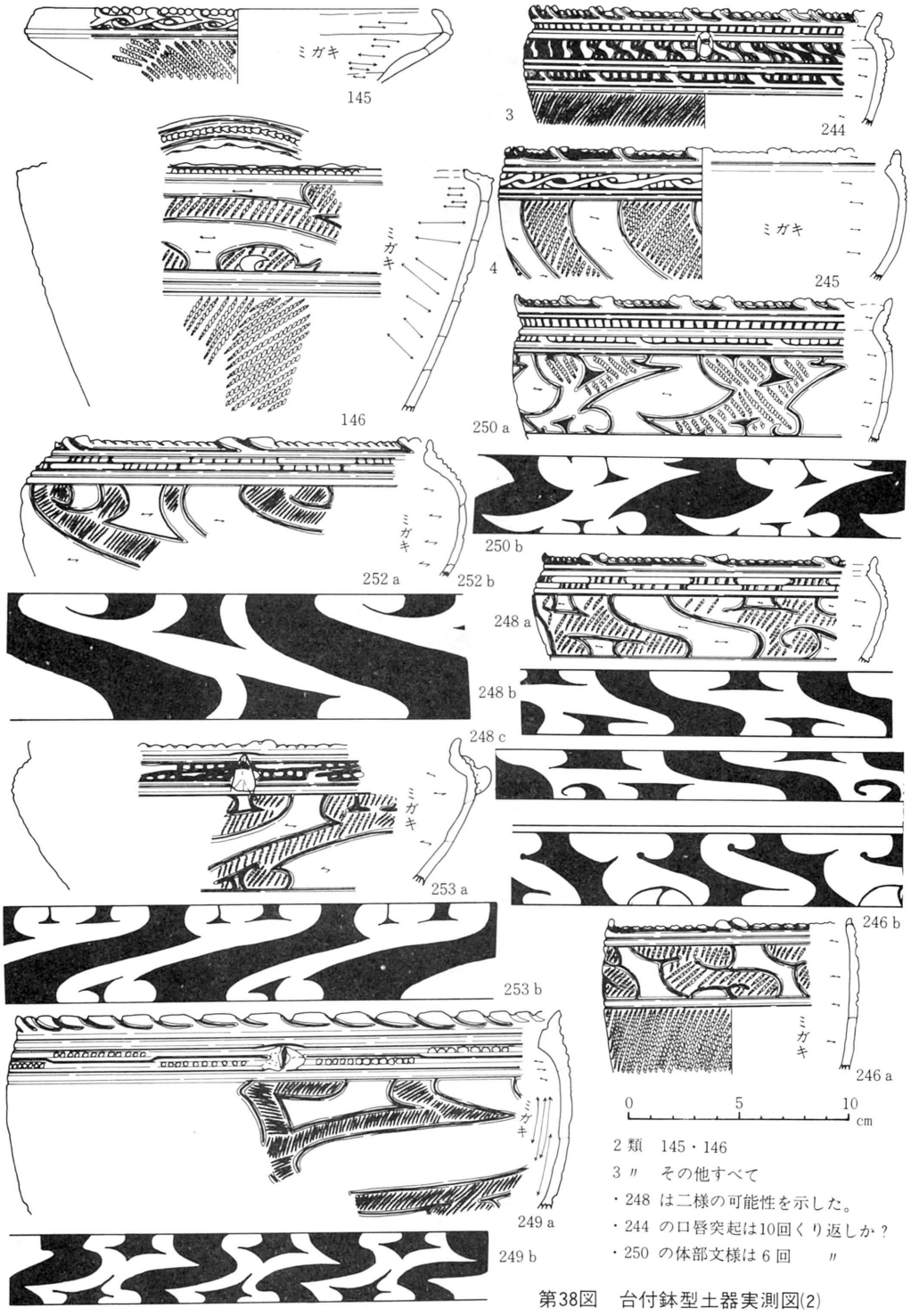
下限は沈線で区切られる。体下半は縄文が付され、下端部は研磨され無文化される。台は低く、外面周縁に縄文をもつものもある。

晩期後半の大洞C_2式に相当すると考えられる。以上２類以下は精製で煮沸用らしい。



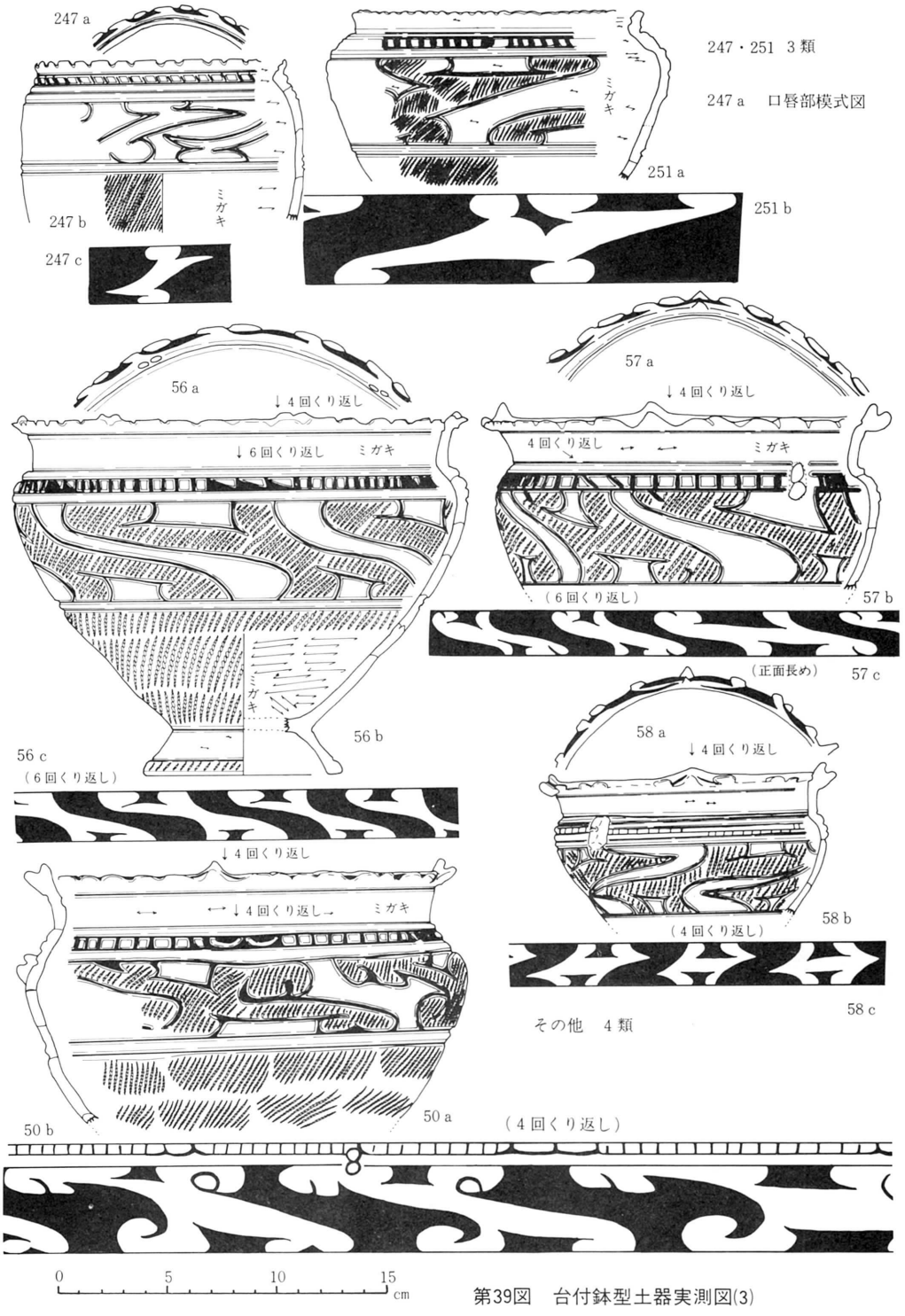
191 c　文様模式図

第37図　台付鉢Ｉ類・脚部実測図(1)

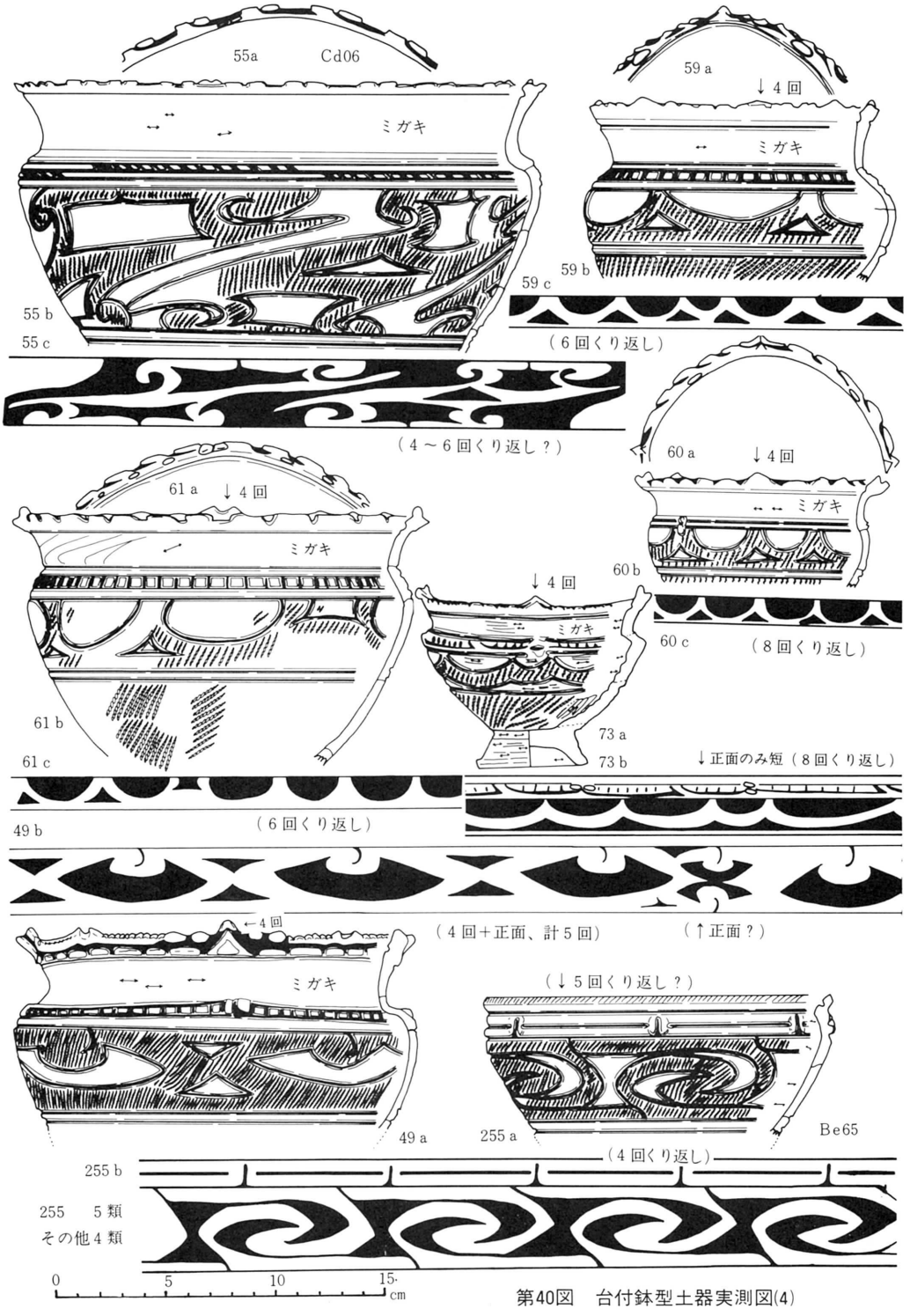


2 類　145・146
3 〃　その他すべて
・248 は二様の可能性を示した。
・244 の口唇突起は10回くり返しか？
・250 の体部文様は 6 回　〃

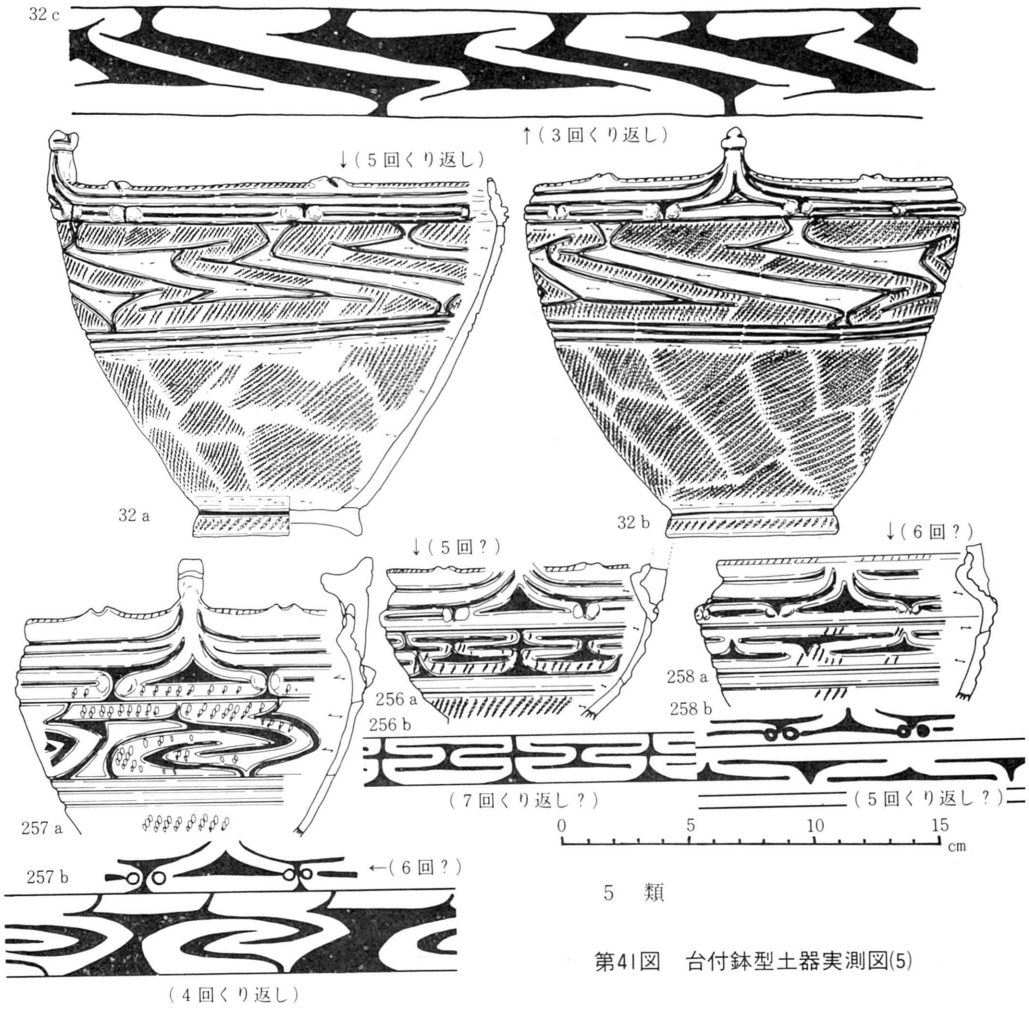
第38図　台付鉢型土器実測図(2)



第39図 台付鉢型土器実測図(3)

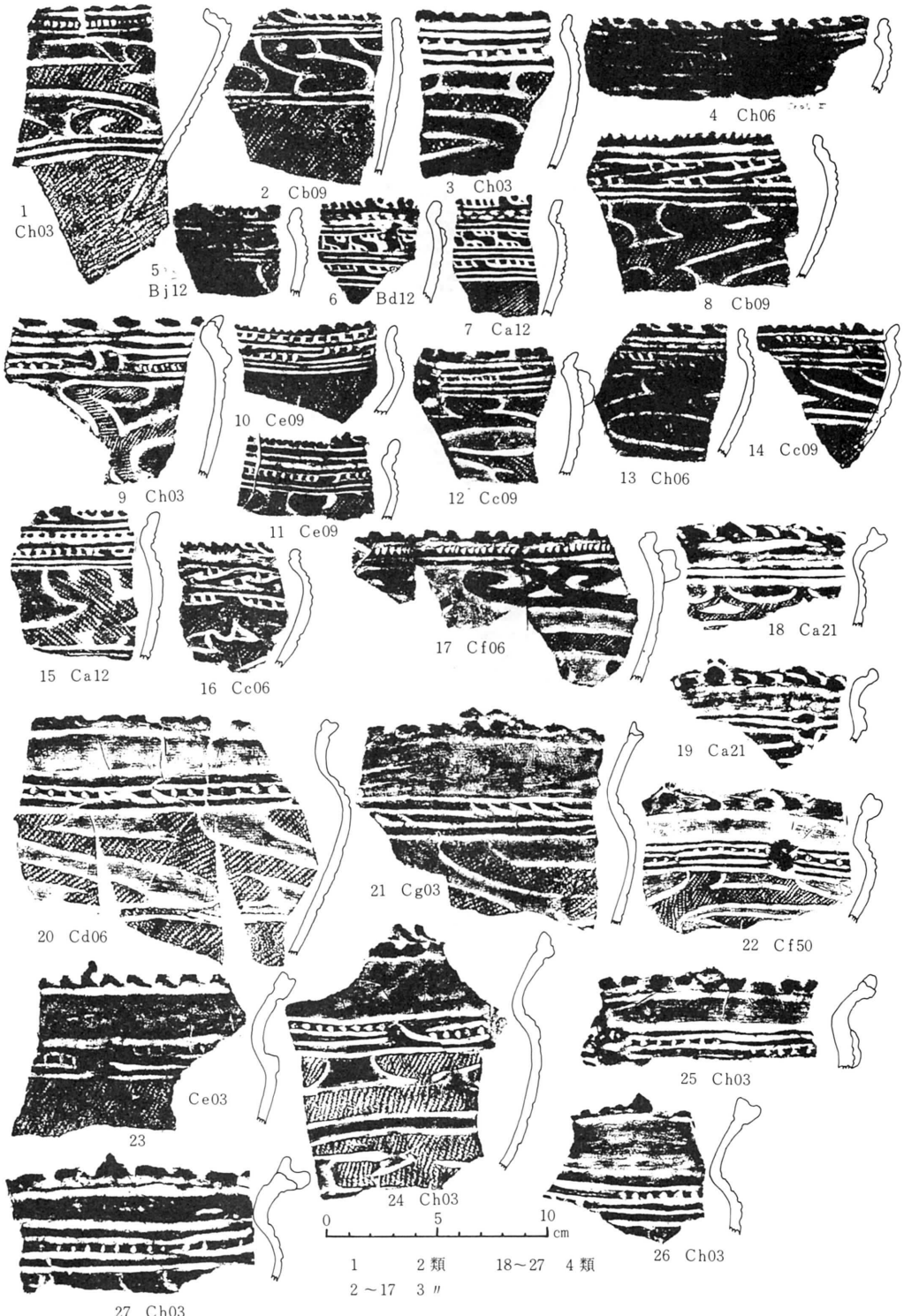


第40図　台付鉢型土器実測図(4)

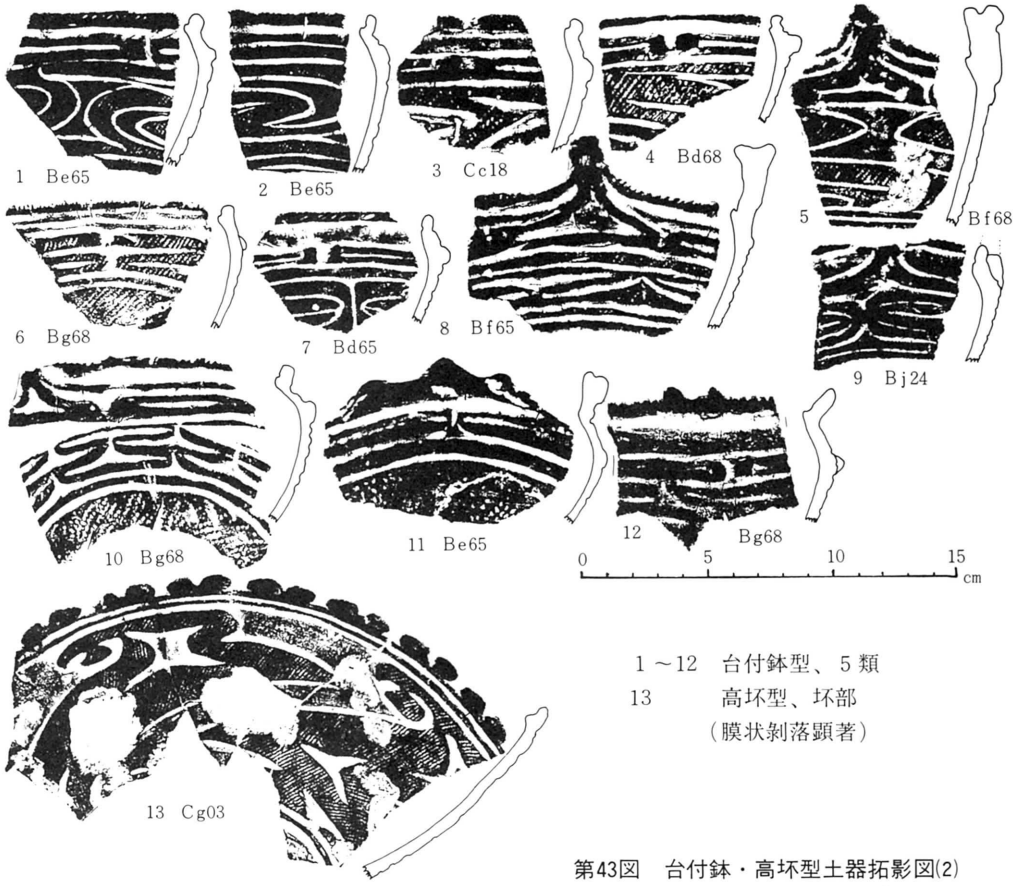


第41図　台付鉢型土器実測図(5)

以上のように、3類以下は、精製土器の仲間に加えうるもので、しかもその器面に煤様のものが付着することからすると、煮沸用途に用いられた可能性の強いものである。3・4類の胎土・施文・焼成は鉢型3類に比してもほとんど変りないものである。したがって鉢型の半精製の大部分と同様に、精製土器もまた煮沸用容器として位置づけられていたこととなる。台付鉢においては、それは大洞C1式期以降、極めて顕著になるといえる。



第42図　台付鉢型土器拓影図(1)



1～12　台付鉢型、5類
13　　高坏型、坏部
（膜状剝落顕著）

第43図　台付鉢・高坏型土器拓影図(2)

ⓔ **台乃至脚部**　脚乃至台部のみの資料である（第37図、図版31）

(1)　a　類　その上下限に刻み目帯、裾部に縄文をもつものである。鉢型第2あるいは9類の台である可能性がある。

(2)　b　類　裾が肥厚し、縄文などが付されるものである。台付鉢型第3乃至4類の台である可能性がある。

(3)　c　類　脚的な器高を有し、透しなどの装飾性の高いものである。三叉文風の沈線と穿孔を併用（穿孔は三叉文が相対した部分、三叉文の二叉の一方の延長線上に付される原則である）するモチーフは香炉型の透し部におけるそれと共通するものである。脚上半が一旦ふくれて、次に裾部にいたる形態などからしても、香炉型の脚部と見做して大過ないと思われる。

以上の3種は晩期前期、大洞B－C式相当のものが大部分であろう。

ⓕ **皿型土器**（第44～50図、図版26・27）　広義の鉢型土器のうち、口径に比し器高が極端に小さいものを一応こう名付けた。器形の特徴により細分出来る。

(1) 皿型土器第1類（37・44他、図版26・27）　体・底部の区別が明瞭なもので、体部上半が外反気味に開くものをまとめた。底部外面への施文の有無に異同があるが一括した。型態には大小がある。体上端部は2個一対の小突起乃至小波状口縁風に仕上げられる。それは器面の上面観を明らかに意識していた如くに、口唇上に入念に施こされる。隣接する小突起間を連結する刻み、彫りと突起それぞれに伴なうように配された三角形の彫り等の組みあわせにより印象的に仕上げられる、それらの彫りの内側に刻み目帯・隆帯が加えられる例もある。隆帯直下には沈線がめぐる。体部文様帯は体部全面乃至体部上半に展開され、その上下限は沈線によって区切られる。体部文様のモチーフには数種ある。(a)所謂太腿骨文のみのもの（44・38他）、(b)それに若干の付加文（三叉文の変種と思われる）が組みあわせになるもの（41）、(c)所謂x字状文に近い若干複雑なもの（37・42）等である。大半は体部全面に展開するが（34）のみは体上半に施こされ、体下半には上下限に沈線を伴なう帯状縄文が2段付される。底部は無文・研磨され若干揚げ底風になるもの（44・42他）と、入組文系統の施文の施こされるもの（34）の二種がある。内面には既述の口縁端部隆帯直下の沈線に加え、体・底境界部に若干の段をもつ。全面入念に研磨されるのみで、その他の施文等は見られない。成形は底部と体部（3～4段の接ぎ手）の接合によりなる。膜状剝落も顕著に見られ、slip風の使用があったと思われる。これは皿型土器の全体にいえる。縄文は所謂充塡縄文であり、左撚り原体が多い。朱彩も一般的である。

(2) 同第2類（第49図、図版27）　口唇上に連続する凹みをもち、体部が若干ふくらむものであり、揚げ底風で無文の底部をもつ。体部文様は1－cに同じである。

(3) 同第3類（第44・50図、図版27）　半欠品の一例のみではあるが区分した（45）。底部より体部よりゆるやかに移行するもので、器厚の浅いものである。皿の語義にもっとも近い。口唇上には2ケ一対の中突起が（おそらく）4個付され、その他は小波状化される。第1・2類ほど彫刻的ではない。体部文様は全面に施文され、それは三種のモチーフの組みあわせからなる。体部上端直下に、帯状のK字文の変形文が付される。これは注口土器第1・2類の肩部に見られるものと全く同一である。その下位にさらに細い帯状の刻み目帯がめぐる。これは体部下端にも見られ、この二本で体部の主文様帯の上・下限を画するものらしい。この種の刻み目帯の用い方は、注口土器など他器種にも見られるものである。体部はK文文と太腿骨文の中

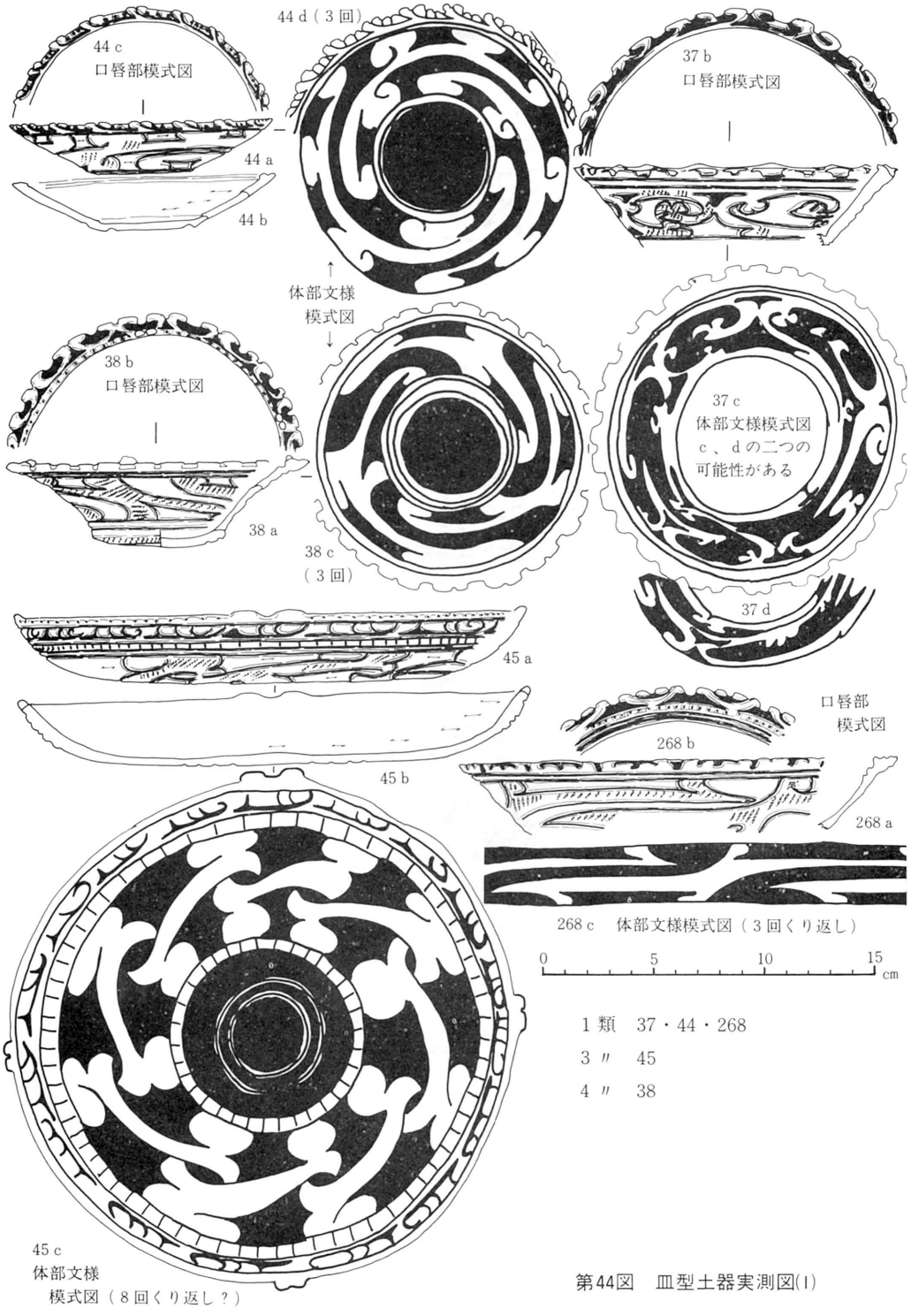
間的なモチーフでうめられる、それは８回くり返しの可能性がある。刻み目帯以下は底部と考えられ、それは二沈線と研磨部分からなり、段などは無い。内面には特記すべき事項は無いが、底面中央は若干盛り上がる。

(4) 同第４類（第47図35他、図版27）　極めて顕著に外反（所謂弓なり状）する体部上半をもち、体部上半から下半への移行がやや曲線的に推移し、底部外面に施文されるものを集めた。形態には大・小の別があり、もっとも変種に富む。口唇上のつくり出しは第１類にまったく同一である。体部文様帯は体部全面に展開される。上下限は沈線によるものと、刻み目帯をもつもの（47）の二種がある。体部文様のモチーフは、(a)所謂太腿骨文そのもの（38・44）、(b)それに三叉文の変形文が加えられるもの（35・43）、(c)太腿文の上・下端部を尖らせる、または隣接する太腿文の上下端を相互に接触させるもの（268・99）、ものの三種に細別出来る。基本的には太腿骨文として一括出末よう。底部外面も同様に太腿骨文系統の施文が行なわれる。ただし底部全面ではなく、その周縁部に限定され、底部中央は無文部として残される。太腿骨文は35の如く単純明快なものと、46・47のようにかなり押しつぶされた感のあるものの二類がありそうである。なお47のモチーフは４回くり返しで、突出部も４ケ所あり、46のそれは３回くり返しで、三叉文の変形文も加えている。なお７は帯状縄文のみに留めている。縄文施文方法・同原体・塗彩状況・slip使用状況等は他類に共通する点が多い。

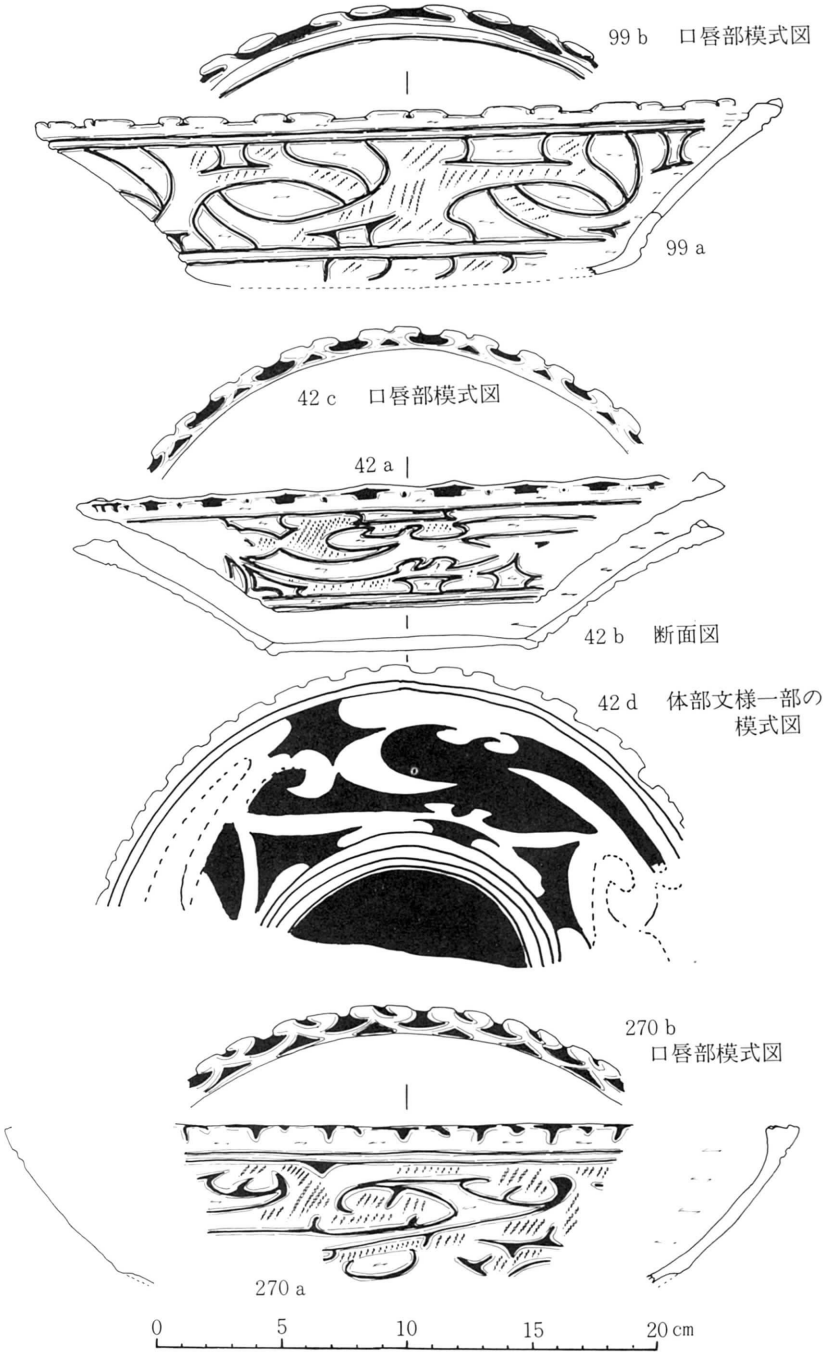
皿型土器の概略は以上のとおりである。第３類は大洞 B-C 式に、他は大洞C_1式にそれぞれ類似すると見ることが出来、大略縄文時代晩期前半に位置づけられよう。

なお口縁部破片のみを見れば、１類と４類を相互に区別することは極めて困難である。したがって実際上は両者を混同していることもあると思われる。また、２類とした体部上半が比較的急激に立ち上がるものは、後述の高坏型の坏部のそれに類似するものも含む。したがってこれも両者を混同している可能性がある。しかし、ここでは、その脚部などは不明であるので、一応既述のように区分しておく。

さらには、１・４類としたものは器高が比較的（２・３類などよりも）高くなり、通常晩期の皿といわれているものと若干器形が異なるが、一応ここに含めておいた。与えるべき適切な名称を知らない故である。

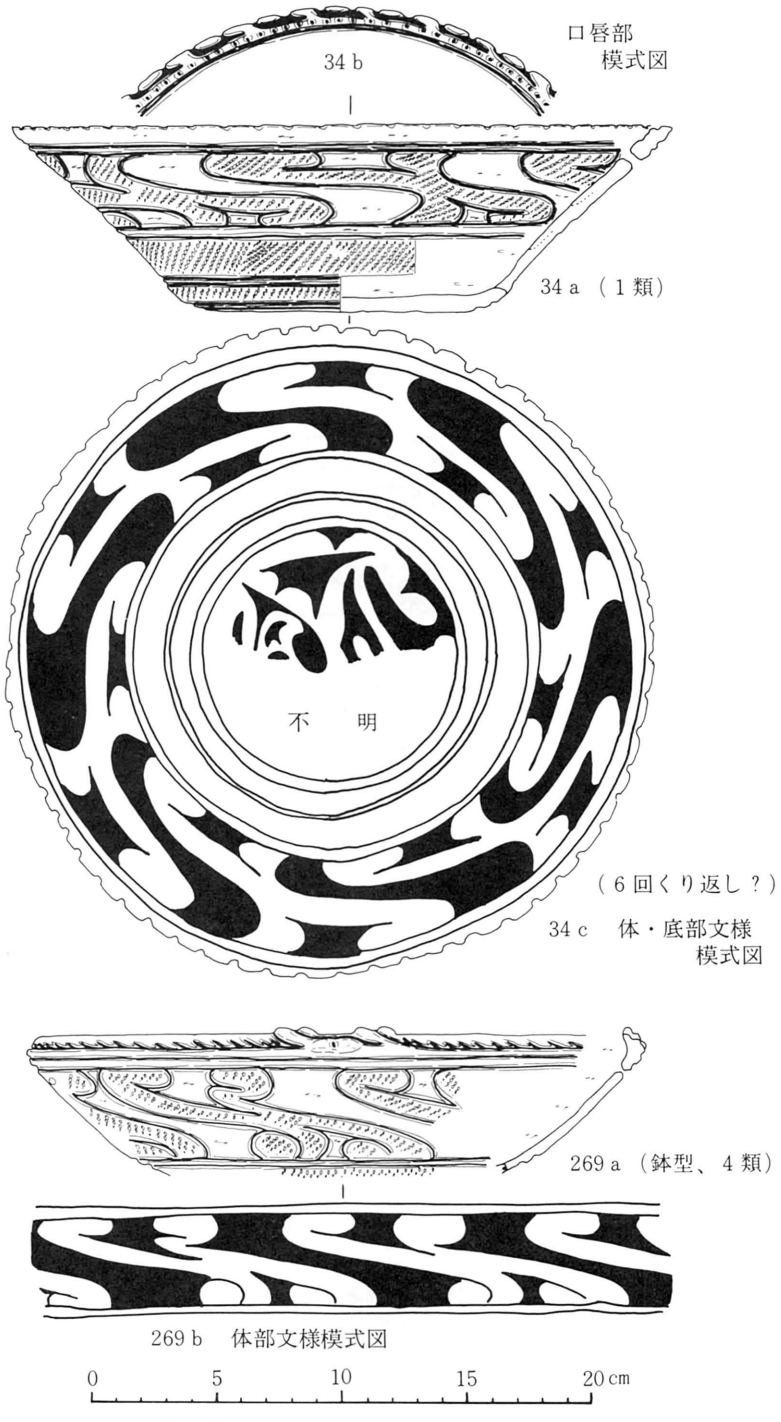


第44図　皿型土器実測図(1)

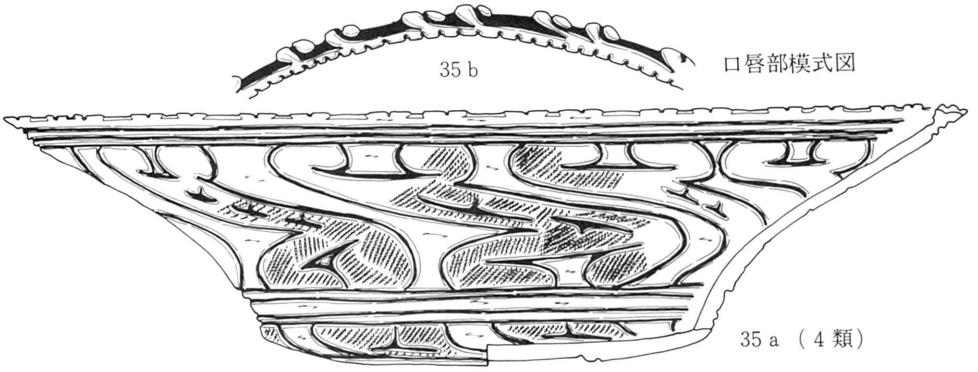


1 類　42、270　　4 類　99

第45図　皿型土器実測図(2)



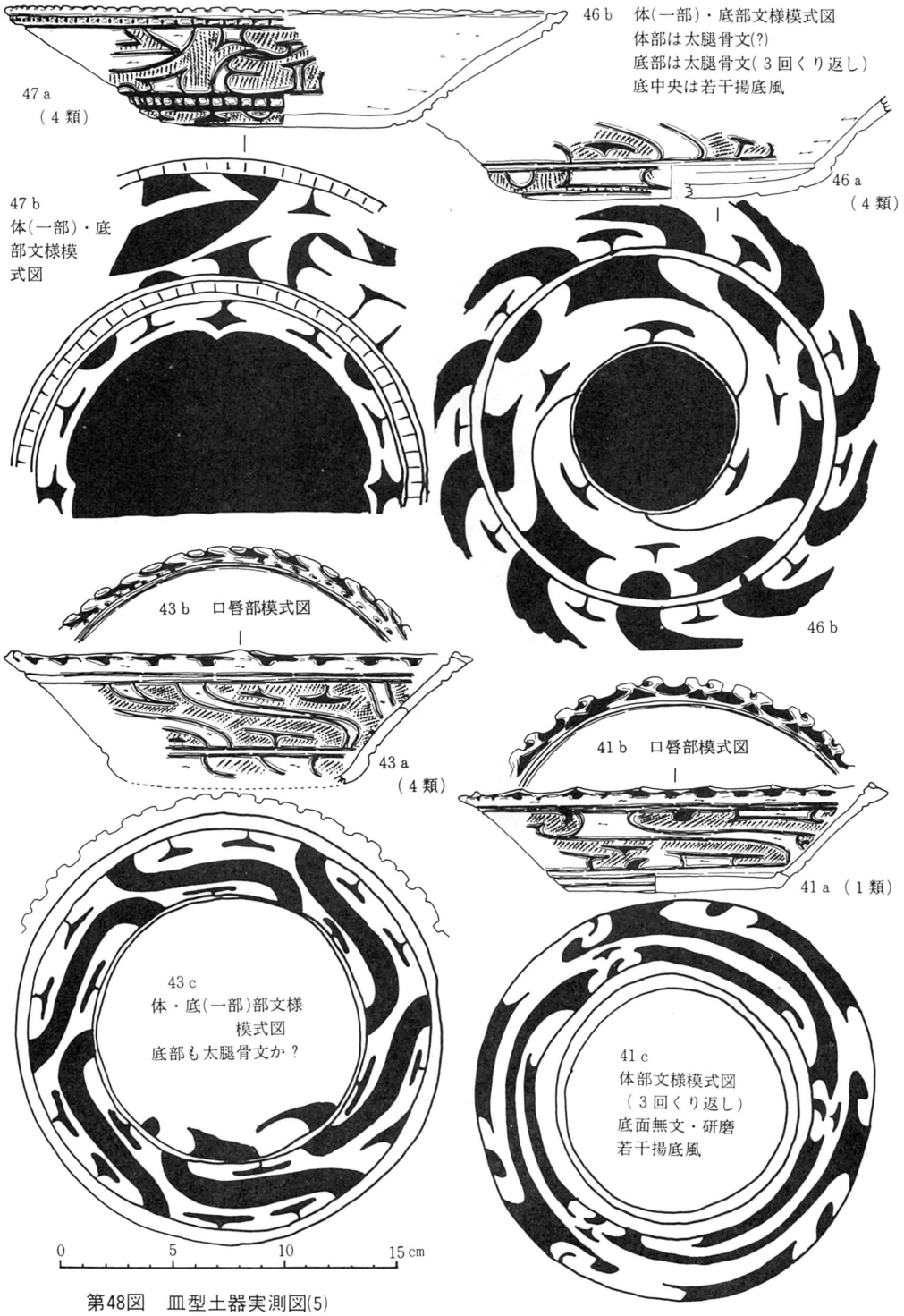
第46図　皿型
鉢〃　土器実測図(3)



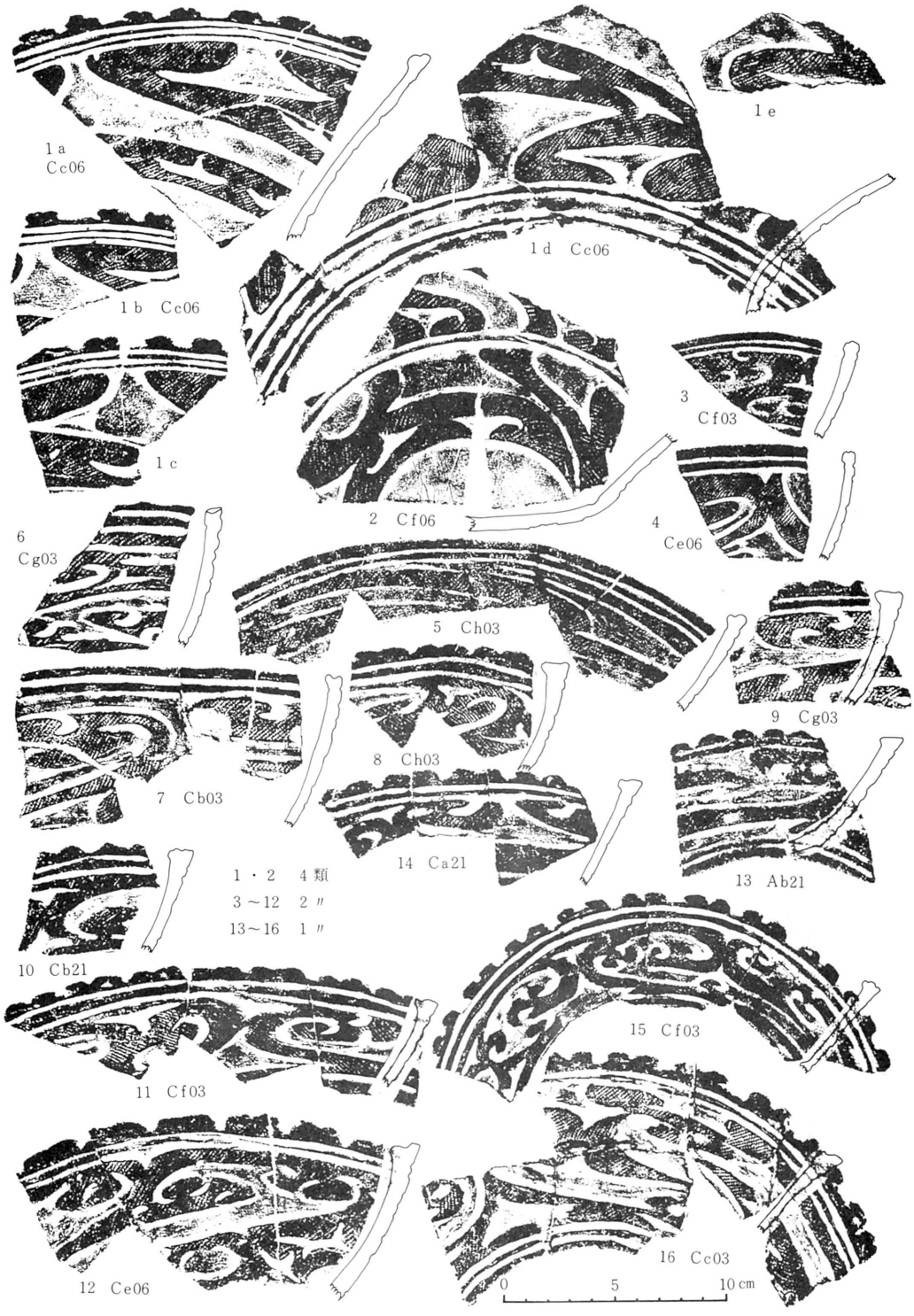
35 c　体・底部文様模式図（両者とも 6 回くり返し）

0　5　10　15　20 cm

第47図　皿型土器実測図(4)



第48図　皿型土器実測図(5)



第49図　皿型土器拓影図(1)

第50図　皿型土器拓影図(2)

ⓖ **高坏型土器**（第51図、第43図、図版28）　その名称に若干不適当なもののある可能性があるが、比較的高い脚部と、装飾度の高い鉢部をもち、その器面に煤様のものは皆無で、赤色塗彩の見られる精製品を一応こう呼んだ。形態・施文の異同により細分出来る。

(1) **高坏型土器第１類**（第51図、図版28）　比較的高く施文された脚部と、精製の鉢乃至皿型の一部類似の鉢部をもち、その体部全面に施文されるものである。体部上半が比較的急に立ち上がるものであるが、口唇のつくりに二種ある。

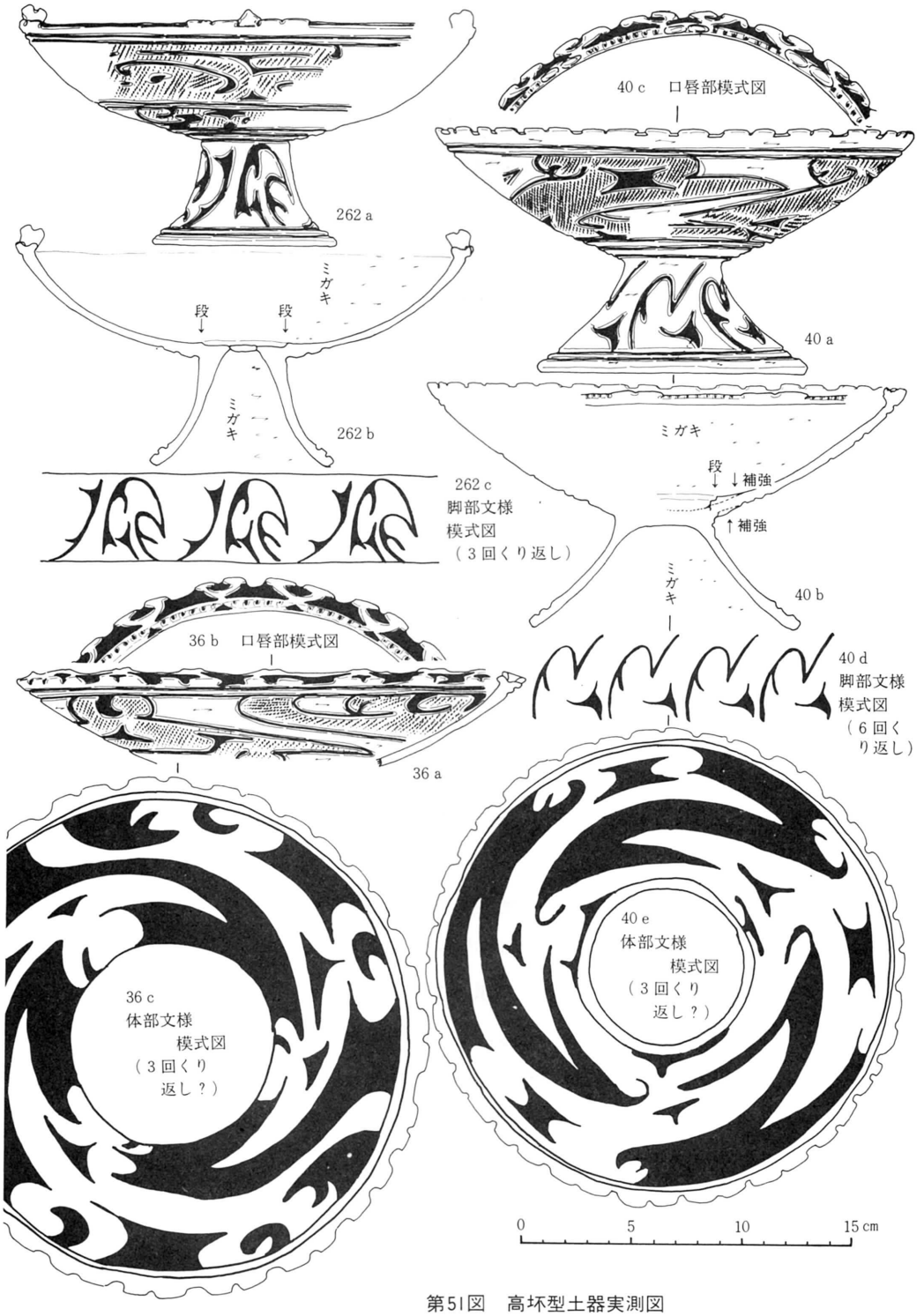
（**１－ａ類**、第51図36・40）　皿型土器のそれと同様の彫刻的なつくり出しをされているものである。上面観を意識したと思われる点も同様である。隆帯への刻み目・２個一対の瘤状の盛り上がりも見られる。体部文様帯の上下限は沈線を伴なう。体部文様のモチーフは太腿骨文の変種と思われる、その一端が尖るものであり、三叉文の変形文も加えられる。ただし隣接する一方のみが尖るもの（36）と、尖端部が相対するもの（40）の二種がある。脚部文様帯には縄文は使用されず、三叉文が陰刻される。三叉文は二種からなり、(a)屈曲した細長いもの、(b)圧縮された如くの三角形に近いものである。その組みあわせが６回くり返しでめぐる。上下限は沈線による、少なくとも鉢部と脚部は接合されているが、詳細不明である。内面に特記事項はないが、底部中央附近に段がつく。これは皿型土器第１類にも見られた。

（**１－ｂ類**、第51図 262）　口唇上に三個一対の中突起を４ケ所もち、その他は平縁にされ、沈線を配すものである。体部文様帯は二段からなる。上半と下半のそれぞれであるが、ｘ字状文風のものであるらしいが詳細不明である。脚部は上下限は沈線で区切られ、その間に三叉文が陰刻される。ただしこれはａ・ｂの他に構成要素ｃがさらに加わる。それは三叉文を２本結合したような両端が二又に分かれるものである。この３個一組が三回くりかえされる。鉢と脚部の接合状況は不明であるが、少なくとも底部中央には粘土充塡の痕跡がある。底部内面中央には先と同様に段をもつ。皿型の２類に似る。

(2) **同第２類**　比較的小型品であり、体部上半に顕著な文様帯をもたない。体部形態に二種ある。

（**２－ａ類**）　鉢体部がほぼ直線的に移行する。体部上端部に沈線により小波状他のモチーフが描かれる。それは、皿型口縁、香炉透し側縁などに見られるものに同じである。内面は直上し、そこに段乃至沈線が配される。体部下半は帯状縄文のみが付され、脚は無文である。

（**２－ｂ類**）　口頸乃至体部上半が直上し、下半乃至肩部との分化の明白なものである。これには、香炉型の可能性のあるものもあるが、一応ここに含めておく。



第51図　高坏型土器実測図

(3) 同第3類　脚部高が若干低いが、ここに含めた。全面に工字文と平行沈線文をもつものである。工字文は施文部位により異なる。口縁部とその直下は明らかな隆帯文的なものとして表現され、それに刻み目乃至刺突文が加えられる。降帯の出会う部分には瘤状の貼り付け文も加わり、上端におけるそれらによって2個一対の小突起をもつ口唇の如くに仕上られている。体部上半は所謂工字文が一段と、その半截形的なものが一段付される。下半は平行沈線文である。脚部には下半と同様のものが付され、また裾部は隆起する。

内面をみると、口縁端部は肥厚し段化し沈線が配され、底面に段がつく。膜状剝落が処々に見られ、これにもslip風の処理が行なわれていた可能性がある。

高坏形としたものの概略は以上のとおりである。第1類はa・bともに大洞C_1式に相当するものと思われる。脚部文様が明白な三叉文から構成されている点は若干問題となろうが、鉢部のそれは大洞C_1式のものであろう。なお所謂三叉文のモチーフは、晩期初頭に限定されないものであることは既に先学により述べられているが、ここでもその立場をとっている。三叉文モチーフのあり方については後述する。

第2類は完全資料を欠き詳細不明であるが、大洞B−C式に見られたモチーフが多いところから大略そのあたりと考えておく。以上のものは晩期前半のものということになる。

第3類は後半の大洞A式前後なることは明らかである。

ⓗ 壺形土器（第52〜56図、図版28・29）　所謂有頸の細口壺を中心に集めたが、一部に無頸広口壺を含めた。器形・文様等により10類型に細分出来る。以下細分タイプ別に説明する。

(1) 壺形土器第1類（第52・53図 545他、図版28）　所謂粗製のものである。ほぼ直立する頸部と、なで肩的な肩部をもつ卵形の体部を呈す。体部には大略横位回転で付された、やや乱れ気味の縄文（羽状縄文）が付される。口頸部は無文・研磨のものと、縄文施文のものの二者がある。この場合の回転方向は変化に富む。頸基部に沈線様のものをひき、頸部の下限を画す例もある。この類以外の壺形土器は「精製」のカテゴリーに含められるべきものと考える。縄文しかもたないものも、その原体回転や器面調整（研磨）が本類に比し、格段に入念だからである。(545) の体部外面下半には煤様のものが付着している。短絡するのは危険であるが、少なくとも〝粗製〟の壺型土器の中には、煮沸用に用いられるものも存在した可能性を示すものとはいえよう。

(2) 同第2類（第52・53図 549他、図版28）　既述のとおり、以下の類は所謂〝精製〟の仲

間である。第２類としたものは無文・研磨の口頸部が外反気味に内傾するものである。研磨は入念である。口頸端部は若干張り出し、内面には段もつく。平縁と三個一組の瘤状装飾をもつものの二種がある。頸基部に段があり、その境界は明らかである。体部には横位回転により施文された整然とした帯状の羽状縄文が付される。底部は通常の平底と思われる。

全形は肩の張る〝倒卵形〟に近いと思われる。頸基部で頸部と体部を接合する。全体的に大型品が多い感がある。

(3) 同第３類（第53・54図 561他、図版28）　若干短かめで無文の外反する口縁部を有し、肩下がりの体部をもつ。頸部と見なせる程の長さ（高さ）の無いものである。頸部と体部の境界には段をもつ。体部は無文・研磨のものと縄文施文の二種がある。縄文は横位回転による帯状の斜縄文が多い。単節が多いが、稀に無節のものも存在する。他器種におけると同様に綾絡文をもつ例も多い。第２類より小型のものも存在する。

(4) 同第４類（第54図 567他、図版29）　内傾する頸部と外反する口縁部をもつ。所謂広口壺的なものである。施文部位は肩部乃至体部上半に限定される。口縁部形状と施文モチーフには対応関係があり、それによると二大別出来る。

（**４ａ類**）　平縁と二個一対の小突起口縁をもち、所謂羊歯状文類似文（羊歯状文を半截したもの）を一段か、単に沈線のみを一条付す。それ以下の体部には縄文（横位回転の羽状縄文など）が施文される。口縁・頸部境界にも沈線をもつものもある（562・563）。

（**４ｂ類**）　二個一対の小突起乃至小波状口縁か、入組文を立体化した如き二個一対の瘤状突起を組みあわせた装飾部を有する口縁をもち、入組文風の文様をもつもの。それだけ器面の装飾が入念になったといえ、より精製品的性格が強いものといえる。口縁外面に縄文を付すものもある。口縁・頸部境界に沈線を配す。（567）は施文モチーフを復元出来た一例である。口縁がかなり長い、頸部下端と肩部（体部上半）の二部位に施文される。前者は粘土の貼りつけによって、簡略化された羊歯状文風のものを付している。後者の文様帯はその上下限を沈線で区切られ、その間に所謂〝Ｋ字文〟風のものが帯状に展開する。外面全面に赤色塗彩が行なわれる。器表面に膜状剥落が見られ、slip風の処理の痕跡とも思われる。なお沈線は口縁端部内外両面にも付される。

25の文様帯下限は刺突文帯によって区切られている。

大略以上である。いずれの例においても口縁・頸部境界、頸・肩部境界で接合している。後者においては若干肩部方向に寄った部分で接合する例も存在する。

(5) **同第5類**（第55図 571他、図版29）　頸部・口縁部が先と同様に分化しているが、口縁部が内湾から直口気味になるものである。内外ともに入念に研磨され、光沢がある。

(6) **同第6類**（第55図 573他、図版29）　同じく両者の分化が見らるが、口縁がほぼ水平に張り出すものである。肩部に羊歯状文他の入念な施文が行なわれ、また赤色塗彩、slip風の処理も見られ、もっとも精製品的な感の強いものである。細頸壺的で小型品が多いといえる。

(7) **同第7類**（第55図33、図版29）　直上し無文の口頸をもち、肩部に磨消縄文による文様帯をもつ。口頸端部外面に2沈線・内面に1をもつ。欠失してはいるが、小突起をもっていたと思われる。肩部文様帯の上・下限は沈線で区切られる。文様帯は三本一組の縦位沈線により四区画され、それぞれに工字文の祖型的な磨消縄文が付される。体下半には不整方向回転による縄文が付される。

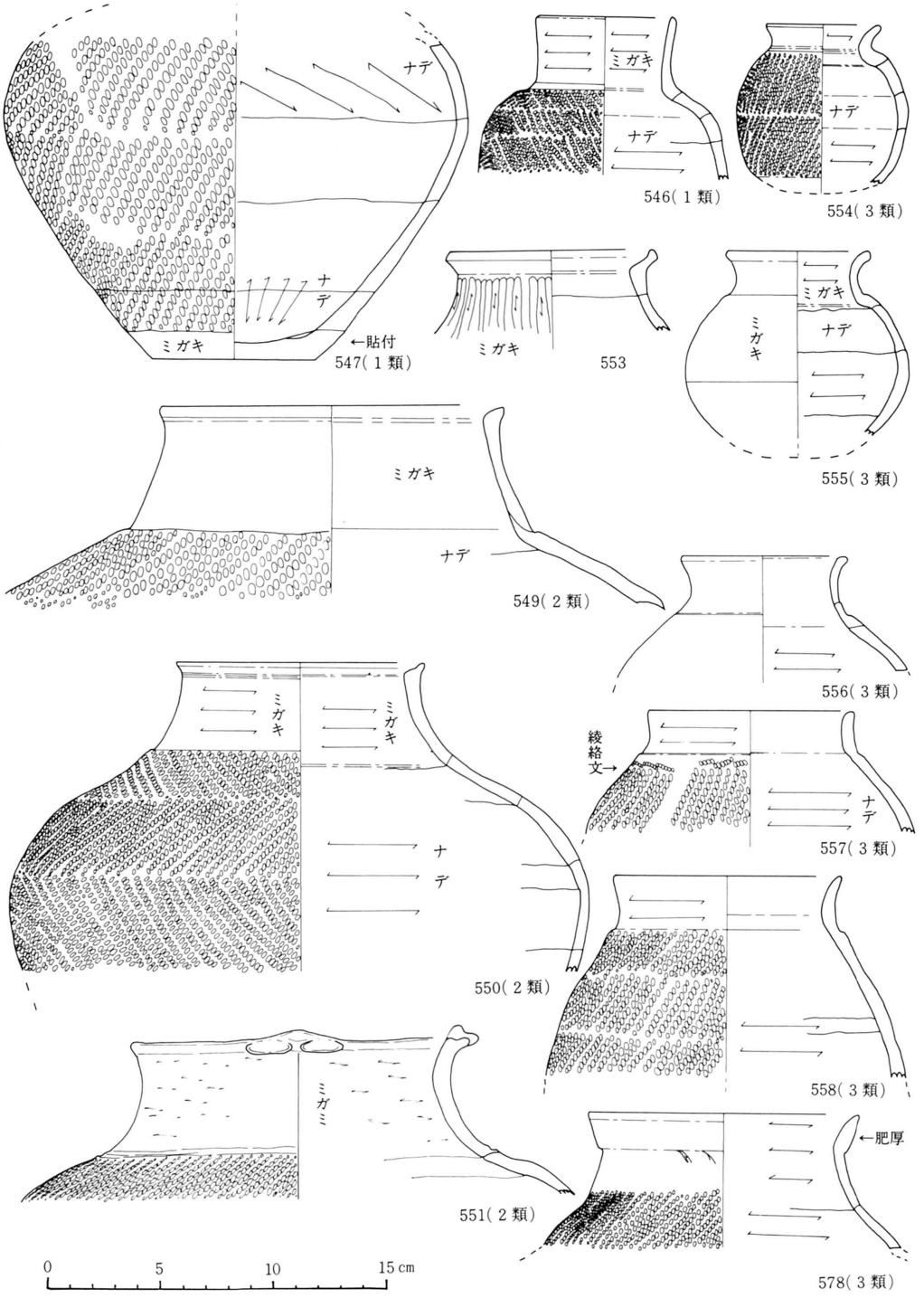
(8) **同第8類**（図版29）　所謂工字文をモチーフにするものである。

(9) **同第9類**（第55図 576、図版29）　広口壺的なもので、2個一対の小突起を4個所にもつ。口縁部に工字文（逆π字形）、肩部に工字文（π字形）とその祖型的な磨消縄文をもつ。体部下半は縄文施文である。口縁・肩部の工字文の位置は90°ずれており、肩部のそれと口縁の小突起は対応している。

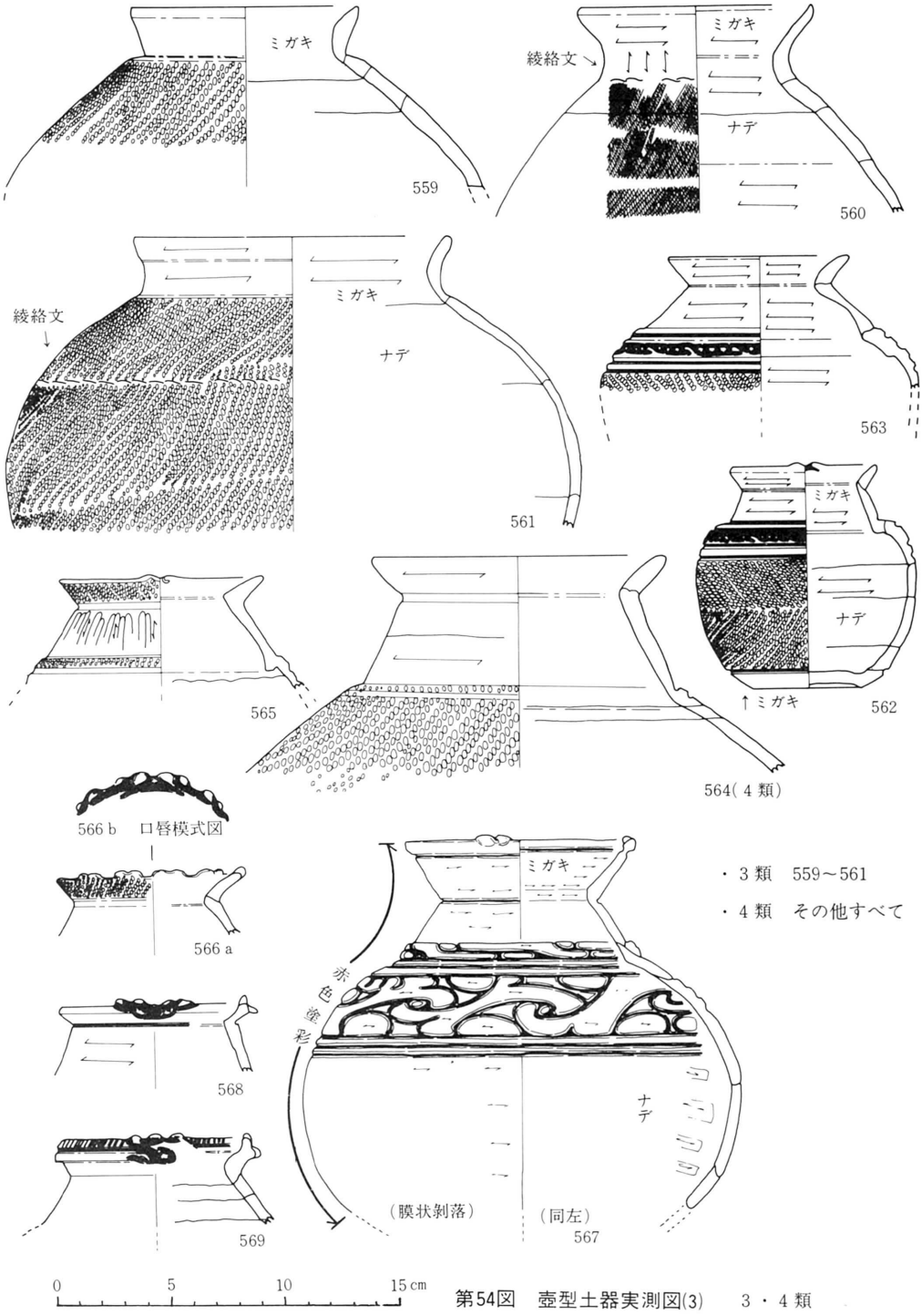
(10) **同第10類**（第55図 577）　細身のものである。平縁と2個一対の小突起を3個もつものなどがある。体部は無文である。33の頸端部内側には段が形成される。

(11) **同第11類**　無頸の広口壺的なものである。偏平な楕円形状の体部をもち、無文で研磨される。

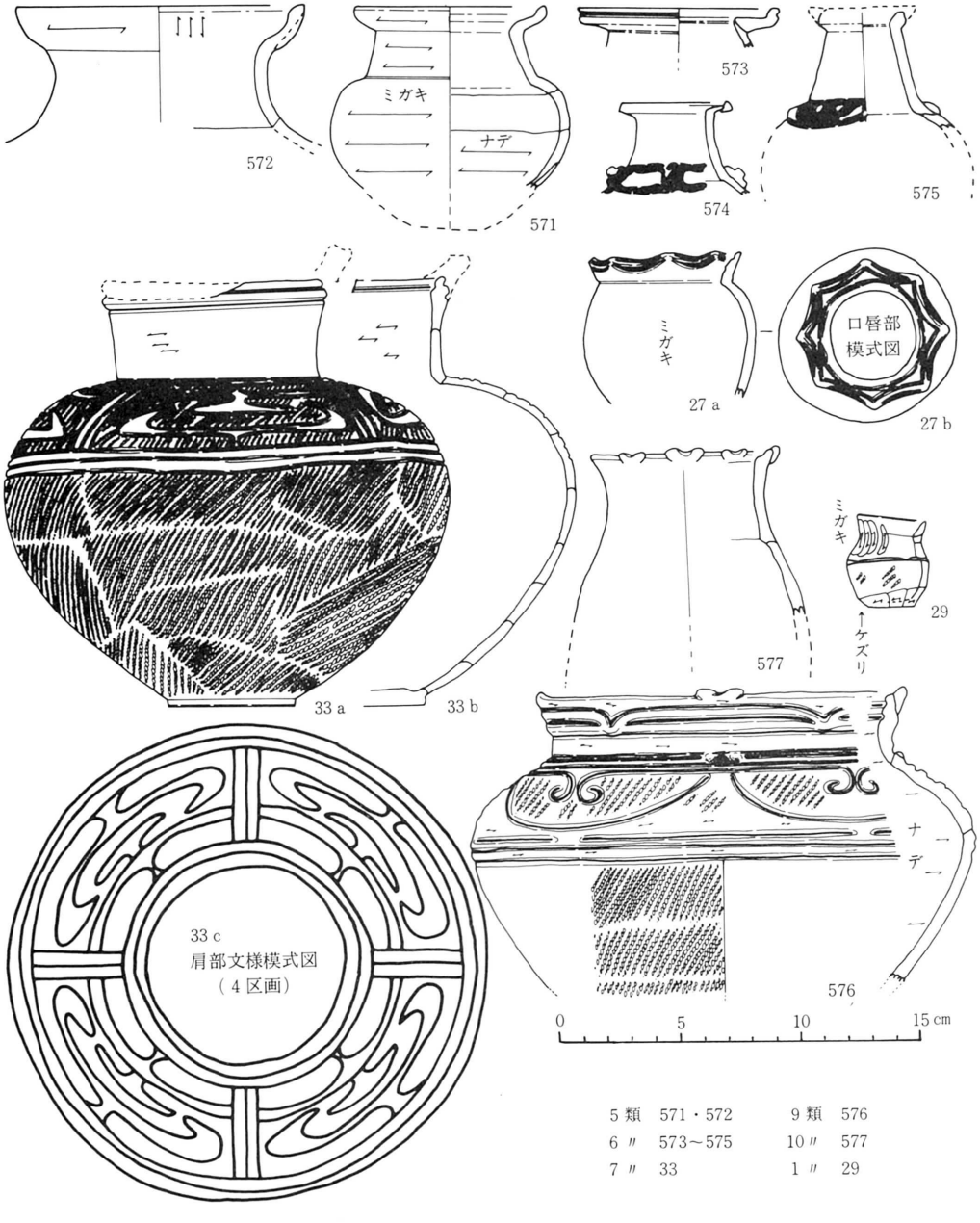
壺形土器の概要は以上である。第1～6、10・11類は晩期前半（大洞B－C・C_1式）期に、第7～9類は晩期後半（大洞C_2・A式）期に属するものであろう。第7はC_2式の典型例であり、第9類は大洞C_2式の新しい部分とも大洞A式の古い部分とも見做せる。第8類はより大洞A式的であろう。第1類が煮沸に供された可能性があることには既にふれた。



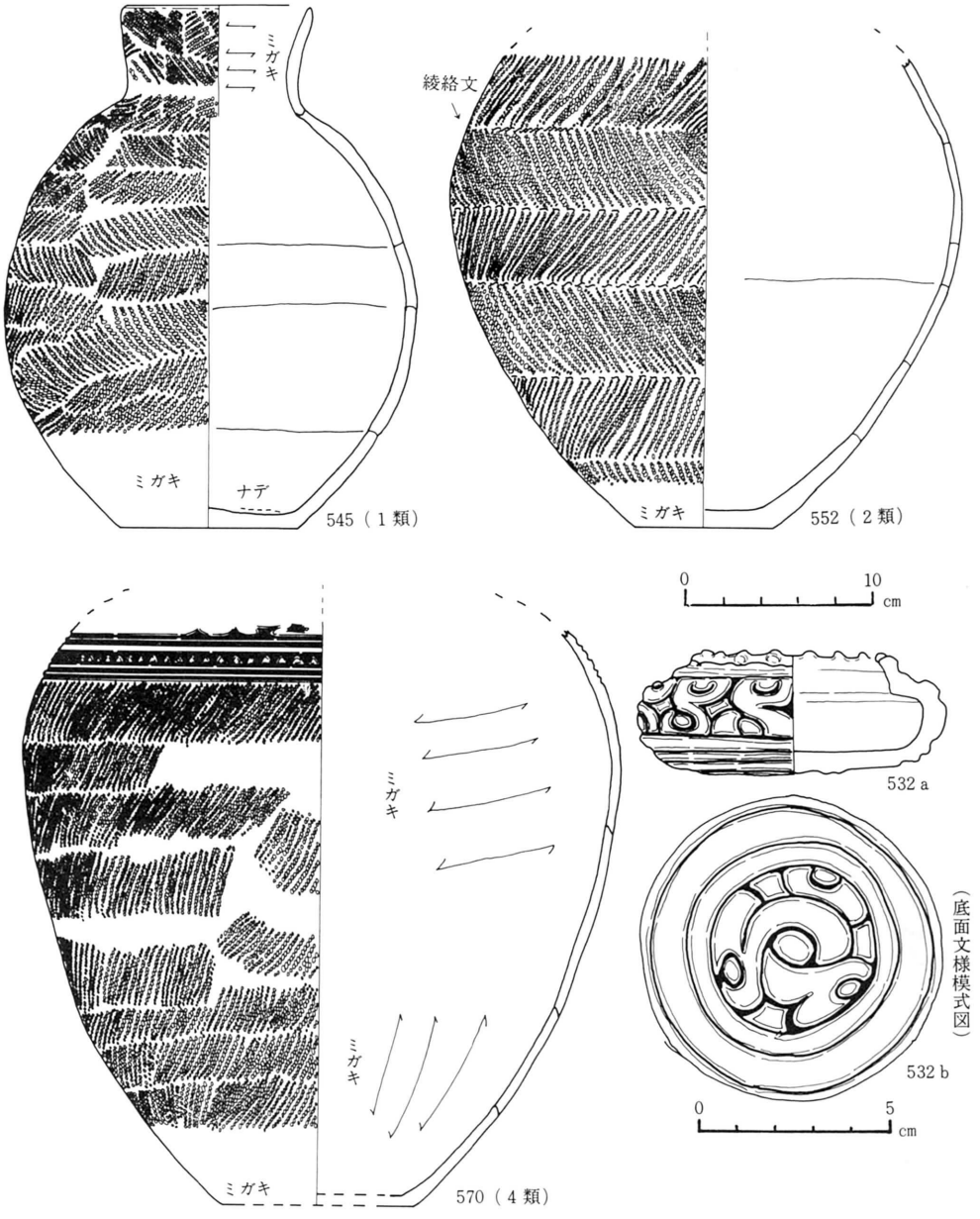
第53図　壺型土器実測図(2)　　1・2・3類



第54図　壺型土器実測図(3)　3・4類



第55図　壺型土器実測図(4)　1、5～7、9・10類



第52図　壺型・異型　土器実測図(1)

1 ～ 6	4 類	10	9 類
7 ～ 9	4 〃	11～13	7 〃
		14～18	8 〃

第56図　壺型土器拓影図

ⓘ **注口土器**（第57～63図、図版30・31）　所謂注口土器は文様を主・器形を従として分類した。以下にそれを示す。

(1) **注口土器第1類**（第57・58・62図、図版30）　文様帯に〝K字文乃至x字状文風のもの〟〝刻み目帯〟・〝シュリッツ〟などをもち、口唇上に突起等のつくり出しの見られるものである。内湾気味に立ち上がる口縁を有する頸・口縁部の分化したもの、分化しないものの両者がある。細部の施文の異同により細分しうる。

（**1－a類**）　口縁外面に縄文をもつ。縄文のみのものと、沈線文その他が併用されるものがある。得た資料からは頸部以下は不明である(501・502)。

（**1－b類**）　文様帯のモチーフにK字文乃至x字状文・シュリッツ・刻み目帯などをもつものである。口縁のつくりに変化があり、頸部との区分が見られず、口唇上に突起がつくり出されるもの（11）、単純な外反口縁となるもの(504、小波状をなす）内湾気味に直上するもの（5・503）などからなる。最後者は、口唇上に突起をもつものと、平縁のものとがある。

文様帯は口縁・頸部・肩部・底部に設けられるが、その具体的描出にはそれぞれ差がある。頸部文様帯に限れば、他のモチーフに加え、沈線文・シュリッツ文が加えられるのが特徴といえる。

（**1－c類**）　器形は大略1－bに同一であるが、文様のモチーフがやや複雑化するものである。即ち主要モチーフは、よりK字文的になり、また、刻み目帯の併用が顕著になる。これは文様帯の上下限に用いらるが、口縁・頸部・肩部・底面のそれぞれに例外なく施文される。底部の文様は注口部直下にもっとも入念に施こされる。それは、口縁部あるいは口頸部への施文モチーフの一部描出形ともいったものが多い（10・16)。

以上の1類の成形は、基本的には、口縁部・頸部・肩部・体部・底部・注口部の各部の接合により行なわれている。大型品の場合は、肩部が2枚の素地の接合からなっているものもある（18)。器内面にはヘラナデ、ヘラミガキ、ナデツケ(?)などの調整痕を残す（図版32)。

503 の注口部剝落部表面にはアスファルトが付着しており、補修の痕跡である。多くのものには赤色塗彩が施こされる。

(2) **同第2類**（第59・60・61図、図版30）　頸・口縁部が分化しない。内傾する頸部が特徴的である。頸部の形状に2種ある。

（**2－a類**）　頸部高がやや高めのものである（9)。文様帯は頸・肩・体・底・注口周囲にあり、第1類とほぼ同様である。施文モチーフは、頸部においては雄大なK字文、肩部におい

ても同様に雄大な羊歯状文である。

（**2－b類**）　頸部はあまり立ち上がらず、全形が所謂算盤珠状に近いものである（19・17・15・7・6・48・14）

口唇は平坦か小波状になる。肩部張り出しに若干の異同があるが、全形は既述のとおり珠算玉形に近い丸底風のものとなる。文様帯の部位は他に同じである。17にのみ瘤状の貼付文が見られる。頸部文様帯の上限には例外なく半截羊歯状文乃至羊歯状文がつく。下限は沈線のみのものと、羊歯状文の二種がある。7においては羊歯状文に加え刻み目帯も併用されている。その間にK字文が配される。正面観は特にない。施文は頸部下端にまでは及ばず、下端部に無文帯を残す。肩部には羊歯状文風・K字文の変型文などが付く、なお既述の17においては、粘土紐貼り付けによる小波状と小突起（2ケ一対）の装飾が加わり、その下位に円形を中心とした三叉文が配される。注口部直下を中心とする体・底部には、他例と同様の施文が行なわれる。注口部基部には円文を中心とした三叉文他が付される。

成形は他と同様に、頸・肩・体・底部・注口部の接合によって行なわれている。頸部の外側で肩部を接合する特徴がある。全般的に入念のつくりのものが多く、光沢も残存している。

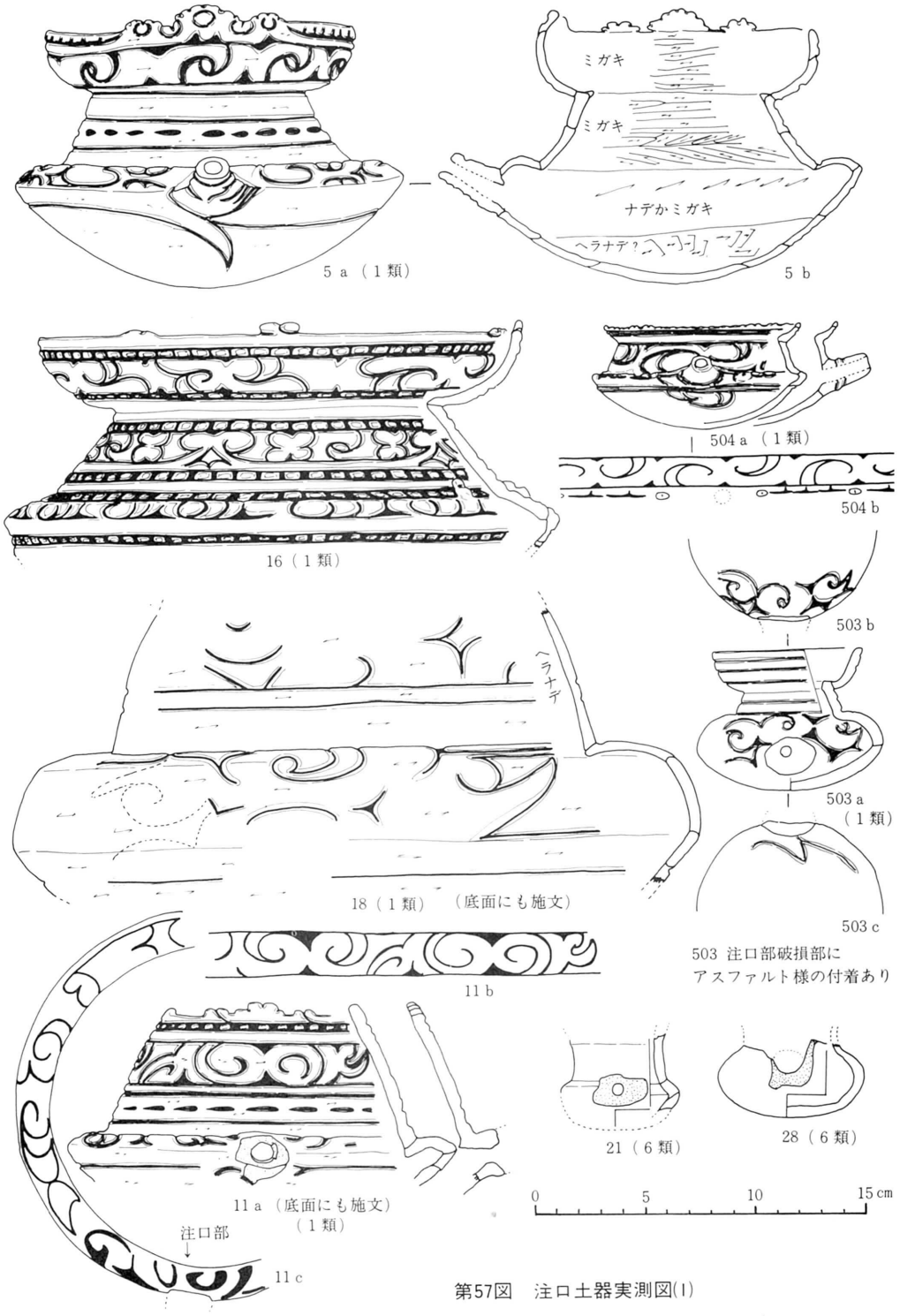
(3)　**同第3類**（第61図12他、図版30）　再び口縁・頸部の分化したものであるが、施文モチーフに磨消縄文を加え、x字状文他を表現するものである。(a)壺形土器そのものといった平底形態のもの（第16図12）、(b)珠算玉に口縁を付した如き丸底風のもの（同13）とがある。

(a)　**平縁**と思われ、また頸部文様帯は無い。肩部乃至体部上半に文様帯が展開し、上限は沈線・細かい刻み目帯（半截羊歯状文の簡略形と思われる）が伴なう。文様帯の一部が体・底下半部に及ぶものもあるが、これは、1・2類の注口部下位のそれの名残りであろう。注口部周囲に首飾り風の装飾が加えられる。注口部破損部断面にアスファルト様のものが付着している。

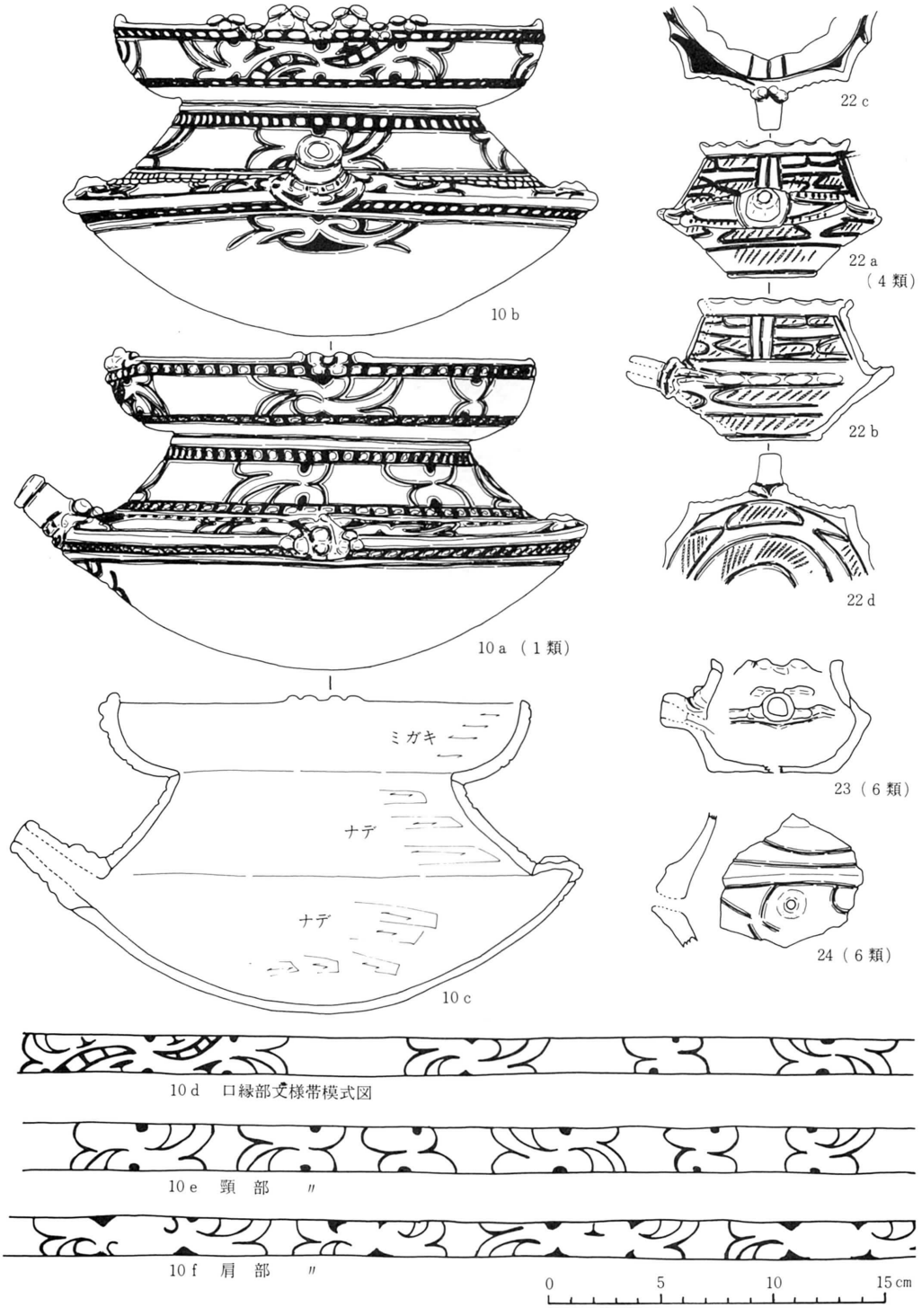
(b)　**口唇は小波状化**され、正面にのみ3個一対の突起状の装飾が施こされる。側面には細かい刺突が加えられる。なお小波状の上面観は三叉文風のものの連続とみなすことが出来るものである。頸部文様帯の上・下限は沈線であり、その間に所謂はち巻き文的な磨消縄文が4単位めぐる。肩部は刺突文帯と口唇におけると同様の装飾文が付される。体・底部は欠失しているが、磨消縄文を用いた施文が行なわれていたと思われる。注口部周囲も同様である。

成形方法などは他に同様である。肩部は断面三角形の素地の貼り付けであり、若干特徴的と思われる。

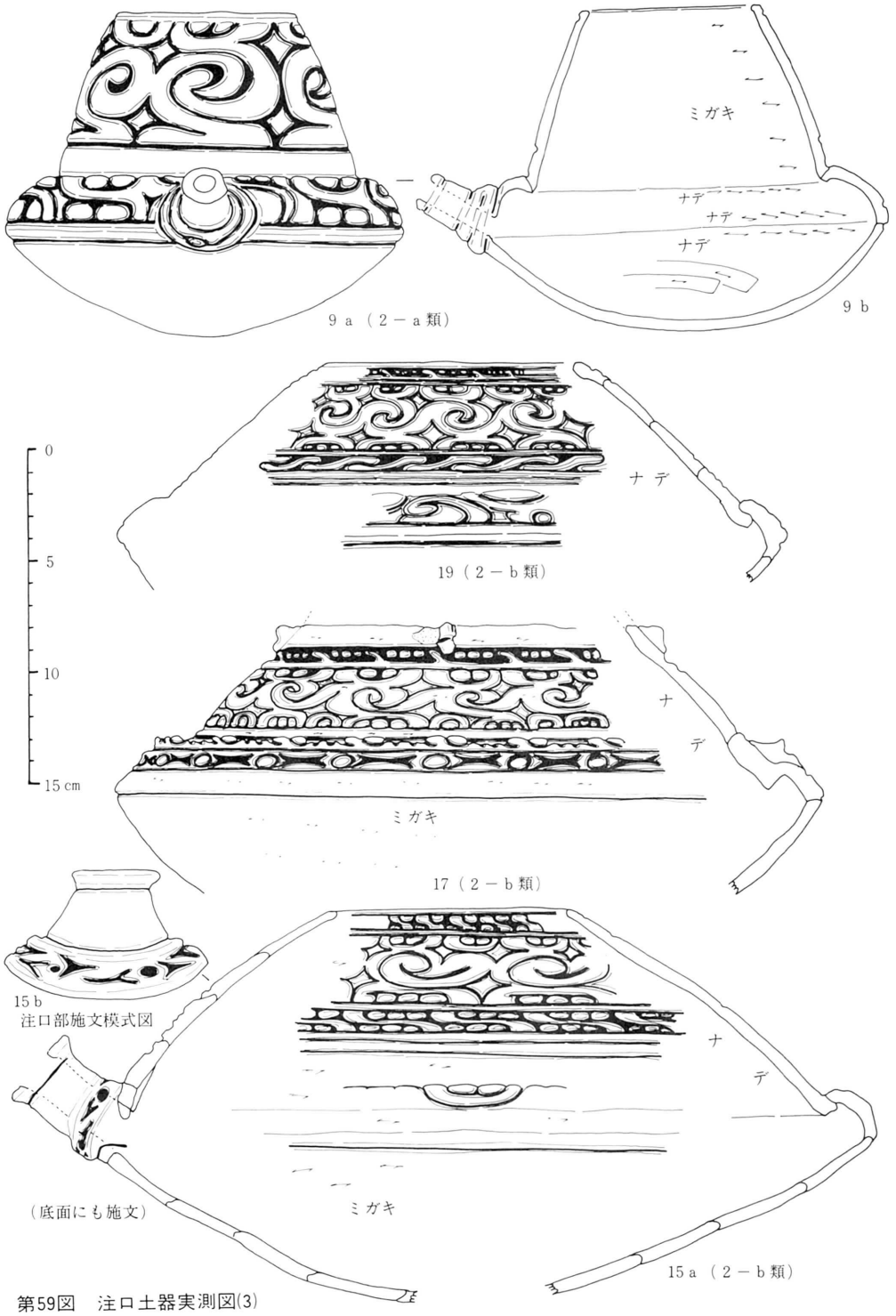
(4)　**同第4類**（第58図22、図版31）　3－bに平底を付した如き形態と、頸部文様帯に縦位沈線による区面を伴なうものである。小波状を呈す口縁は外反し、無文・研磨される。頸部は



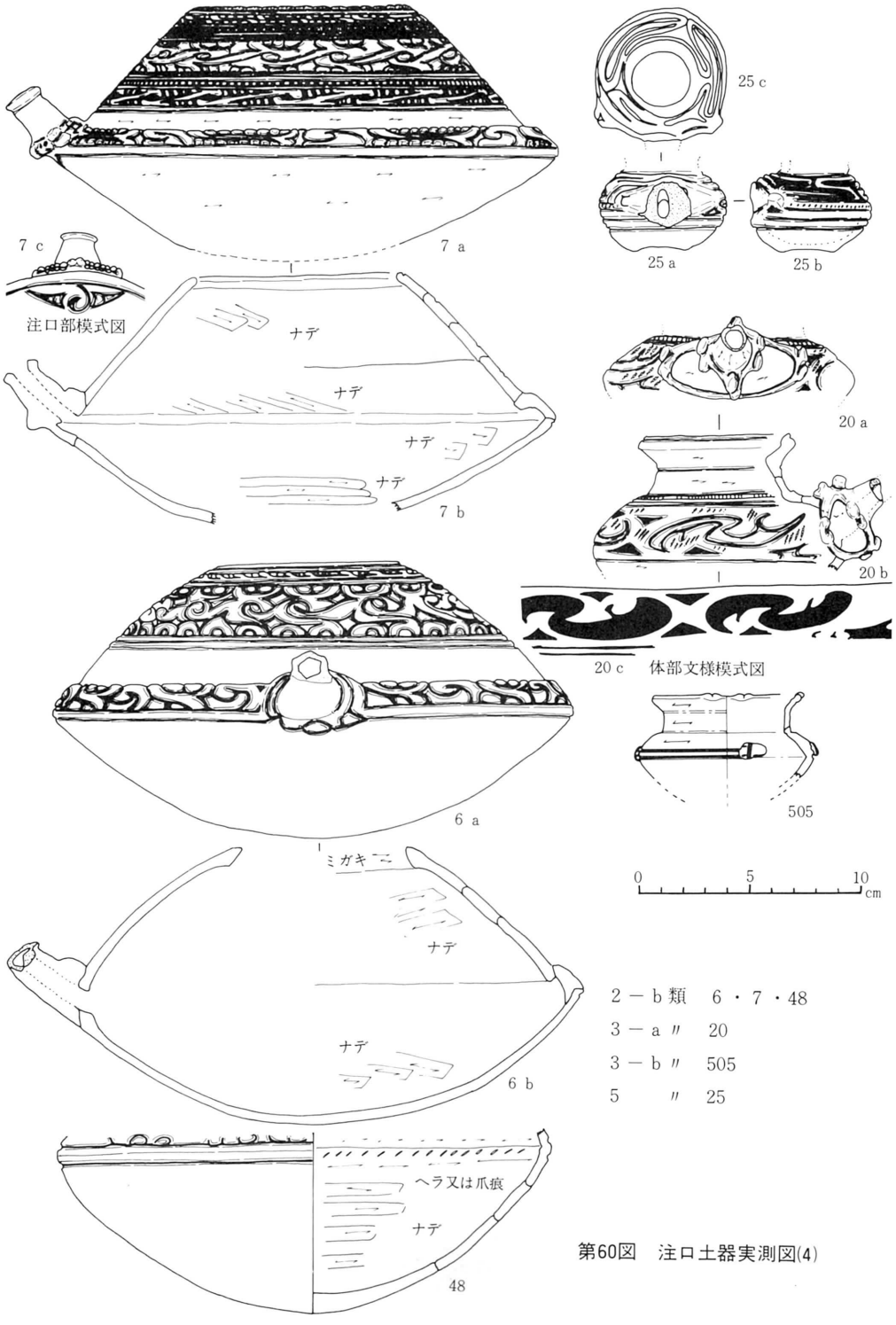
第57図　注口土器実測図(1)



第58図　注口土器実測図(2)

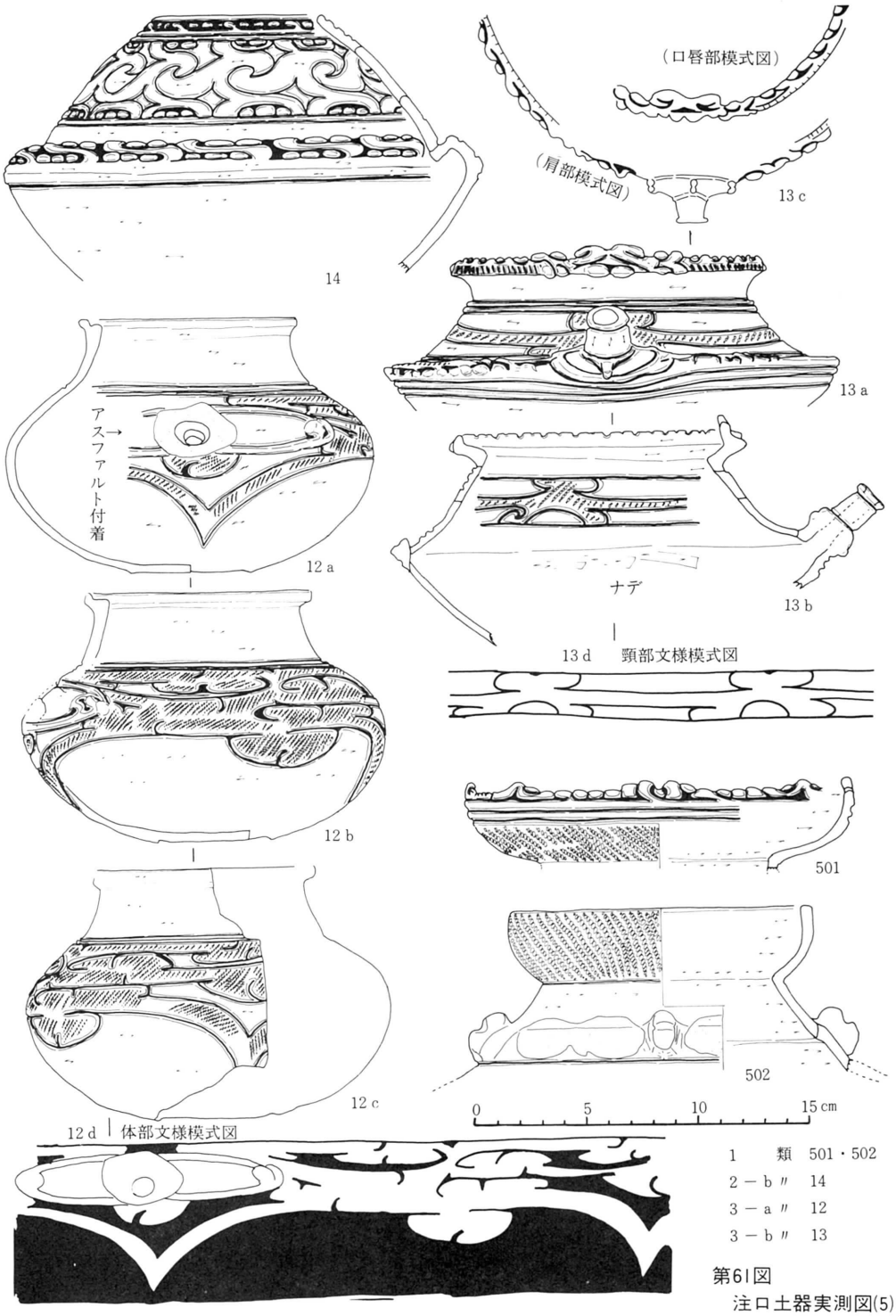


第59図　注口土器実測図(3)



2－b類　6・7・48
3－a〃　20
3－b〃　505
5　〃　25

第60図　注口土器実測図(4)



第61図
注口土器実測図(5)

第62図　注口土器拓影図(1)

第63図　注口土器拓影図(2)

三本一組の縦位沈線により四区画され、そのそれぞれに帯状の磨消縄文が二段付される。肩部の稜の部分は突起を伴なう。正面観にのみ刻み目が加えられる。これは３－ａの名残りであろう。体・底部上半に帯状磨消縄文（上下限は沈線が伴なう）、下半に縄文が付される。下端に沈線がめぐる。

(5) 同第５類（第60図25、図版31）　所謂四脚を有し、体部上半に工字文を付したものである。肩部に刻み目帯が一条めぐる、体・下半には二沈線が付され、注口部の周囲に３－ａ的な装飾環がめぐる。小型品である。

(6) 同第６類（第58図23他、図版31）　分類基準を異にするが、小破片の為詳細不明のものを仮に集めた。

大略以上である。１－ａ・１－ｂ類は大洞Ｂ式の新しい部分、１－ｃ類は大洞Ｂ－Ｃ式（の若干古い部分？）、２類は大洞Ｂ－Ｃ式（の若干新しい部分）、３は大洞C_1式、４類は大洞C_2式、５類は大洞Ａ式にそれぞれ相当しよう。第６類は後期のものなどを含むであろう。

第３類ｂの所謂はち巻き文風のものは大洞C_2式のそれの粗型的なものとも考えられる。またそのモチーフは三叉状入組文・Ｋ字文などへ系譜をたどれるものであろう。

ⓙ 香炉型土器（第64図、図版32）　所謂香炉型土器を集めた。原型をほぼうかがえる二例を中心に説明する。器体の成形は所謂突起・透し・体部上半乃至肩部・体部下半乃至底部・脚部の接合によっている。なおその接合状況は(508）により顕著に観察出来る。

突起は２個一対と思われ内部充塡の粘土塊の接合によっている。その一端を三角形乃至略円形に仕上げ、その周縁に三叉文の変種文を施文する。それは透し縁部・皿口唇部におけると同様のもので、かなり彫刻的である。(508）のそれは一見鳥乃至獣面把手を思わせるものがある。その基部には両突起を連結するかの如き穿孔が施こされる。これは透し部に見られる穿孔と同一で、施文モチーフの構成要素の一つであろう。〝面〟の表現例は他にも多い。

透し部のａ面観は大略台形、ｂ面観は大略半円形をなす。両側縁はほぼ直上し、あたかも口縁の如き印象を与える。それは二個一対の小突起とその間の小波状部とからなり、皿型土器の口唇部のつくりに極似する。沈線の併用状況も同一である。ａ面観は、穿孔部と沈線によりモチーフが描かれる。穿孔は大略円形のものと長方形のそれからなり、その相互が中心部・両側部におかれる。両者は沈線により連結する、沈線は二又に分岐し、その先端が尖っており、三叉文の変形と見ることが出来る。そのいい方をするならば、180°に背中あわせに配された三

叉文の部分に長方形の穿孔、その反対方向の三叉文の先端の一方の延長上に円形穿孔が行なわれたモチーフということが出来る。

体部上端（口縁該当部）には小突起乃至小波状がつくられる。

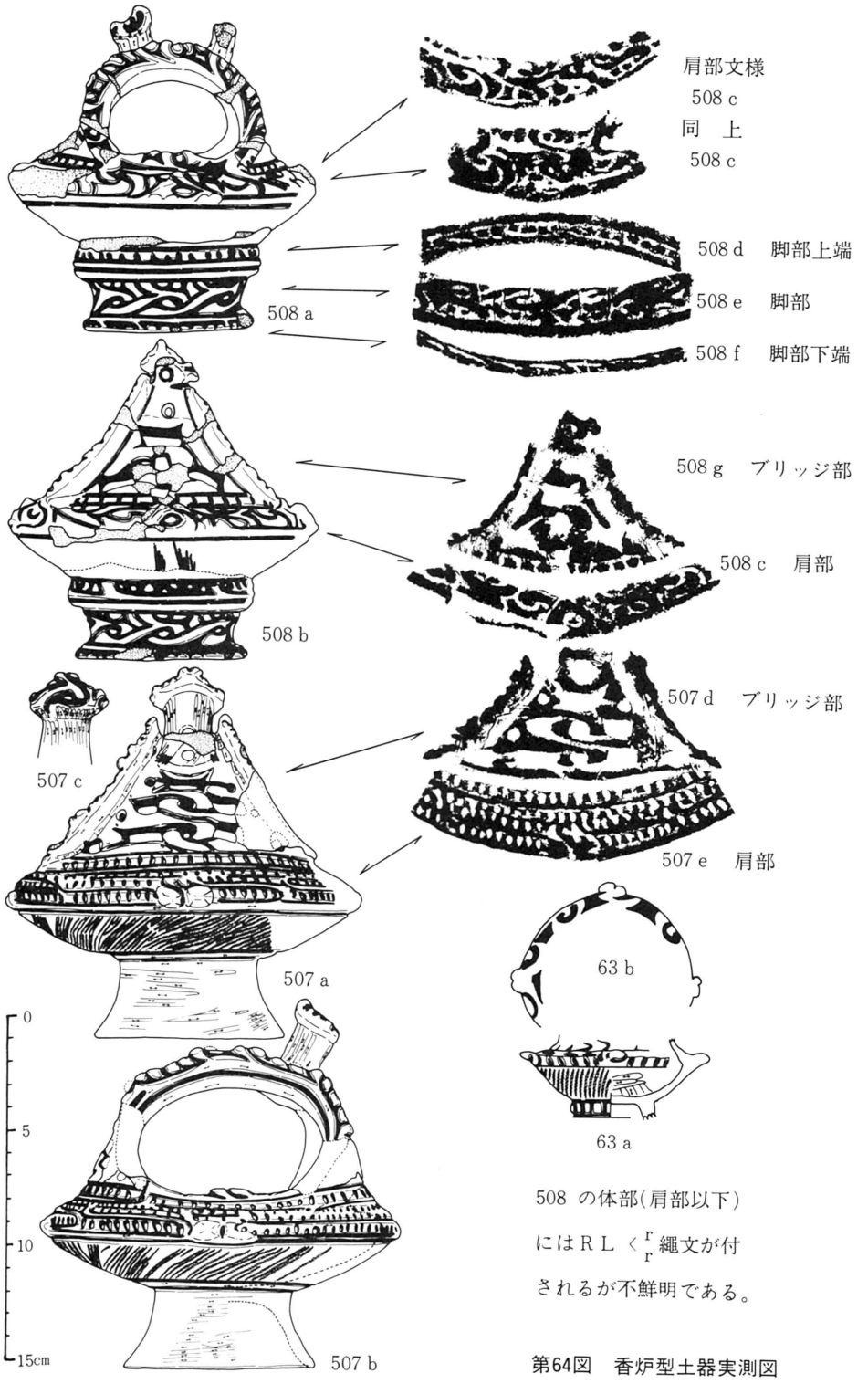
体部文様帯は二種からなる。上限区画文は両者ともに刻み目帯である。それより下位の内傾部（肩部相当）には、K字文の変形文（K字文と羊歯状文の中間的なもの、 508）と長大な羊歯状文(507）などが付される。また四分の一周毎に２個一対の小突起（瘤状）や突起表面におけると同様の装飾文が付される。体部下半は両者とも縄文が施こされるが、(507）は左撚り、(508）は若干不明であるが右撚り原体によると思われる。上下限は沈線である。

脚には二種ある。(507）は無文で研磨されただけの単純なものであり、(508）はその上端が肥厚し、下端部が外方に張り出す複雑な形態を呈す。肥厚部上半の内傾部にはK字文の変種文（注口土器第１・２類の肩部のそれ）が、下半には沈線１が施こされる。それ以下の脚の主体部には上下方向に押しつまった形でK字類似文が帯状に展開する。下端の裾部には、透し側縁部におけると同様文が付される。 508は既述の如くその成形・接合経過が明白にたどれる資料である。図版32のとおり、丸底風の体部への筒状の脚の貼り付け、体部下半と上半の貼りつけがわかる。脚部上端の肥厚部はその補強を兼ねているものともとれる。

両例ともに入念なつくりであるが、(508）は理由は不明であるが全体的に脆い。赤色塗彩は両者に見られる。以上は晩期前半大洞B−C 式に相当するものであろう。

脚部しか残存しないものの中にも香炉型が存在するであろうが、ここでは以上の二例の説明のみを行なった。

ⓚ **異型の土器**（第52図 532、図版32）　適当な器種名を知らないので仮にこう呼ぶ。浅い器高と、無頸の広口壺風の波状の口唇をもつ。体部上半乃至肩部と底外面にK字文類似文が付される。体下半には平行沈線がめぐる。素地の選定・調整ともに入念であり、赤色塗彩が施こされている。大洞B−C 式に相当するものと思われる。



508 の体部(肩部以下)
にはＲＬ＜$^{r}_{r}$縄文が付
されるが不鮮明である。

第64図　香炉型土器実測図

二、土製品

土製品として一括したものは、土偶・土面と思われるもの・sex symbolと思われるもの・装飾品と思われるもの・土版と思われるもの・円盤状のもの等々である。以下にその個別説明を行なう。

ⓐ **土偶**（第65～69図、図版32～34）　土偶と思われるものはすべて破片であり、遺構には共伴しない状態で出土した。総数44で、その出土状況は第３表のとおりである。形態・成形技法・施文等により分類しうる。またその破損の原因に人為性を読みとるべき何らかの明証を示すものは存在しない。

(1)　身体各部の表現が比較的写実的な印象を与えるもの（第65図１～第66図14）。土器に見られるが如き文様をその表面にもたないのを原則とする。施文される場合はより具象的で、身体各部の表現あるいは着衣等の象徴的表現の手段として用いられる。成形方法には、胎部中空のものと粘土で充塡されるものの二種があるが、後者が圧倒的に多い。文字通り写実的なもの（１－ａ、第65図１～６）と、体部のつくり出しが若干平板となり、顔面その他の表現に象徴化・形式化ともいうべき傾向の見えるもの（１－ｂ、第66図８～11）、詳細不明であるが胎部中空のもの（１－ｃ、同12）に細分出来る。

(2)　その表面に土器文様と共通する施文の見られるもののうち、雲形文類似文その他の曲線文の仲間と見做しうるものをもつもの（第67図18～第68図31）。所謂遮光器土偶にあたると思われる中空成形のもの（２－ａ、第67図18～第68図28）と、胎内粘土充塡形式をとるもの（２－ｂ、第68図29～31）とに細分出来る。後者の体部は若干偏平化している。

(3)　表面に併行沈線文・刺突文等を有するもの（第69図32～34）。胎内粘土充塡である。

以上の三大別について、その代表例を以ってやや詳述する。

(1)　１－ａ類（第65図１）　右腕と左乳房を欠く以外はほぼ原形に復し得た唯一の例である。全身の姿勢が所謂「中腰」の状態にあるかの如きポーズを示し、その点やや特異である。この姿勢と、前額部中央と両耳部に穿孔が見られる点を考慮すると、何らかの台に「腰かけ」させるか、紐でつるした状態で用いられた可能性がある。土偶の用途想定の一資料とはなしうるであろう。体部・腕・脚部は全体的に丸味を帯びている。頭部は頭頂部にむかって厚さが減じ、かつ後頭部は渦巻状の浅い溝状となっている。頭髪乃至まげの象徴とも考えられる。顔面はやや横長楕円形とされる。眉は隆帯とその上の細い刻みで表現される。鼻・唇・眼・眼尻のしわ

等はすべて写実的に表現されている。側面より見れば、眉上隆起・鼻・口唇・顎などの突出具合が見事に表現されているのがわかる。口唇内部の（歯などの）表現は無い。。

上半身の前面には乳房・腹・へそ・腕等が表現されている。手指の表現は見られず簡単に丸味のある塊として表現されており、この点のみが具象的とはいいがたい。しかし、手首と思われる部分はきちんと細く表現している。背･肩から鎖骨にあたる部分をへて胸部中央よりへそまで連なる「♀字」形の刺突文列が加えられる。これは刺青ないし着衣関連のものと考えられよう。背面中央は溝状に低くなっており、所謂「背筋」の表現と思われる。

下半身を見ると、下腹部・でん部には細沈線が多く引かれている。それはでん部では横長長方形、下腹部では長辺が内湾する台形の区画内におさめられている。下腹部のそれは第65図３によりより明確に推定できる。これは積極的な根拠は無いが、一応、着衣関連（たとえば褌）のものと見做しておく。勿論先と同様、刺青関連のものとも見做しうる。

両脚の表現は、ふくらはぎ等に写実性がよく発揮されている。手指と同様に足指の表現は見られない。しかし片面を平担、他面に傾斜をつけるなど、足の甲の印象を与える表現ではある。

資料は首・腕・腰・脚・乳房のそれぞれつけ根で破損している。これを成形時の素地粘土の接ぎ手部分と見做すことも出来る。全面にミガキが施こされ、また朱彩も施こされる。前述の刺突文の沈線部に漆黒の物質がつまっているが、これが何らかの樹脂類の可能性もある。近い将来分析する必要がある。なお刺突文は、首・足首・手（腕）などの各部に用いられることが多いらしい。

(2)　１－ｂ類（第66図８・９・10）　体部の表現が若干平板化する他は、１－ａ類に共通する点が多い。下半身を欠くが、８もおそらくは「中腰」の姿勢をとろう。頭頂部は凹凸ある表現がとられ、やはり「まげ」風のものの象徴かとも思われる。顔面は下顎をつき出す点は１に似るが、口唇はかなり小さい。

上半身は湾曲し、若干〝前かがみ〟風の姿勢をとろう。首囲りから上半身前面中央に沈線が配される。これは１の刺突文にあたろう。下端にへそ乃至腹部の表現と思われる盛り上がりがつくり出される。朱彩が施こされる。

９はあたかもトルソーの如き残存状態を示す。大略８に共通するが、全体的に表面の膜状剝落現象が顕著である。これは成形・細部表現時に、slip風の粘土使用を行なった可能性を示すものとも考えられる。

10は頭部上半のみで詳細不明であるが、頭頂部の表現が他と同様にまげ風ともとれることから一応この類に加えておく。

(3)　**1－c類**（第66図12）　脚部と思われる現高が約 5.5cmあり、かなりの大型品であったと思われる。一端が広く、他端が狭い形が、足の表現と思われるので、土偶とみなした。成形時の接ぎ手と思われる横位の凹凸、ナデかミガキと思われる調整痕だけが見られるにすぎない。なお部分的には爪圧痕と思われるものが見られる。

(4)　**2－a類**（第67図18～第68図28）　いわゆる遮光器土偶の典型例である。18～20は出土地点が異なるものを含むが、胎土・施文などの特徴からして同一個体の可能性の大なるものである。

18の頭部は顔面のみの残存である。頭頂部は彫刻的な装飾が加えられ、冠状になる。土器口縁と同様であり、中空の胎内が見える状態となっていたと思われる。顔面は両側の大型の眼部とその中間の鼻・口とで構成される。顔面成形後に貼付されたと思われる眼球の周縁の隆帯上に縄文が見られる。内面に横位の凹凸が数段見られ、素地粘土の接ぎ手部分と思われる。ナデ調整痕と思われるものも見られる。鼻は眼球の表現終了後に貼付されているらしい。

頸部上端にはやや大ぶりの羊歯状文モチーフの施文が見られる。

19は右上半身と右腕である。頸部下端全周、されたそれより若干下位の胸から背にかけて、さらに胸から腹上部にかけて、角張った刻み帯が施こされる。乳房と背面を結ぶ部分に横位の隆帯が２本貼付され、その上に円形（竹管などの中空の工具）の刺突文が加えられる。腕のつけ根と手首は沈線で区切られる。以上で区画された部分に、横方向に展開する文様が施こされる。モチーフの詳述は省くが、上・下位ともに共通すると思われる。ただし、体部の各中心部（正面観であれば、胸・背の中央、側面観であれば肩部の中央などにおいては、点対称で180°回転した位置に置く傾向があるらしい。

腕部は無文である。手首以下の手は、刻みをもつやや偏平な楕円形で表現され、かなり抽象化している。

内面には素地の接ぎ手が明確に認められ、この部分のみで５段以上の素地を用いていることがわかる。手指によるナデ等の成形痕も顕著である。

20は下腹部・脚等で下半身である。腹部下端と脚の基部に先と同様の刻み帯が、そのそれぞれ下位に沈線がめぐる。その間に施文される。モチーフは先と同様である。ただし、下腹部正面の文様部位にのみ肩部に見られたと同様の円形の刺突文が加えられる。あるいはへそを意識したものとも考えられる。

脚部は無文である。足首は細くつくり出される。足は円形・平坦につくられ、手と同様に抽象的である。足の裏にあたる部分は凹凸があり、とりたてて調整されたとは思われない。

全体に朱彩が施こされていたと思われる。器面調整はそれぞれの部位に応じた方向へのヘラ

ミガキ、文様帯はＬＲ$<\frac{1}{1}$縄文である。

26は下腹から股にかけての部分であるが、中央部に穿孔が見られる。

28は脚～足であるが、足指の表現と、足の裏中央部に26と同様の穿孔が見られる。表面は入念にヘラミガキされる。内面には３段以上の素地の接ぎ手が認められる。

(5)　２－ｂ類（第69図29・30）　表面に土器に共通する文様をもち、胎内粘土充塡のものである。29は頭部・両腕を欠くが、上半身のうち胸～背にかけての上位と、腹部から腰にかけての下位に二本の文様帯が見られる。上位の胸部には刻み目を有する逆三角形の隆帯がめぐり、その下端部に２ケの粘土粒が貼りつけられる。背の中央には楕円形に近い沈線文が見られる。これは向かいあわせた三叉文あるいは所謂玉だき三叉文の玉とも見える。下位の腹部にも施文が見られ、それは、19・20などに共通するものであろう。その他の施文は見られず、全面ヘラミガキの上朱彩されている。

30は下腹部～股部である。小破片なる故施文のモチーフはつかめないが、三叉文の仲間と思われるものは看取されるので、大略他と同様であろう。ただし、へそと思われる部分がやや深めに貫入している点は他と異なる。尻の部分に横長の方形の区画かとも思われる沈線があり、あるいは１の尻のそれに共通する可能性もある。

本資料の左脚のつけ根の破損部断面に、アスファルト他と思われる物質の付着が見られる。これが接着剤としての機能を期待されたものであるとすると、〝復元・修理された土偶〟の存在を示す一証佐となしうるであろう。なお、破損部への同様物質の付着例は、本遺跡においては、この資料以外には無い。微量の故もあり正確な材質鑑定は今後に譲りたい。

(6)　３類（第69図32～34）　表面に横走する併行沈線文・刻み乃至刺突文を有する隆帯などを有するものである。肩部が平坦なプラットフォーム化するなど、抽象化・形式化の度合がやや高い。32・34は肩部、33は腕であろう。すべてに朱彩が施こされる。

以上の細別６種類の土偶の編年上の位置について若干のべる。土偶の編年については既に早く、江坂輝彌氏の業績がある。[註1)] 氏は縄文時代晩期の土偶を６類に分類された。それを簡略に示すと以下のとおりである。

第一類　大洞Ｂ式共伴。胴部に比し頭部が大きい。小型品多く「中空」は少ない。「雨滝式」の文様を有するものもある。

第二類　雨滝式併行。「中空」、大型品も増す。頭頂部が円形または楕円形に空く。

第三類　大洞C_1式併行。30cm前後のものも出現しさらに大型化。「パンツ様」のものを表現

する例もある。この他に小型土偶や抽象的なものもある。

第四類　大洞C_2式～Ａ式併行。

第五類　大洞Ａ式～Ａ′式併行。

第六類　大洞Ａ′式併行。

本遺跡出土例の第２類は氏の第二・三類に相当すると考えられる。頭頂部が空く点は第二類そのものといえよう。さらに３類は第四類に相当するものであろう。

第１類としたものの位置は若干の検討を要しよう。氏の第一～六類には本類の如き土偶は示されていない。しかし「パンツ状のもの」の着装例として示された青森県八幡、岩手県蒔前台同戸類家出土の３例は本類に極似する。前二者は大洞C_2式併行と思われ、最後者は大洞Ａ式相当とされている。これに従がうと本遺跡の１－ａ類は大洞C_2式～Ａ式期のものということになる。しかしその周辺から出土した遺物は大洞C_1式期までのものが主体をなす。遺物の共伴関係からすると晩期前半（大洞C_1式期）までのものと見做した方が無理がないと思われる。したがってこの二者の可能性を併記し、今後の資料の増加をまつこととする。

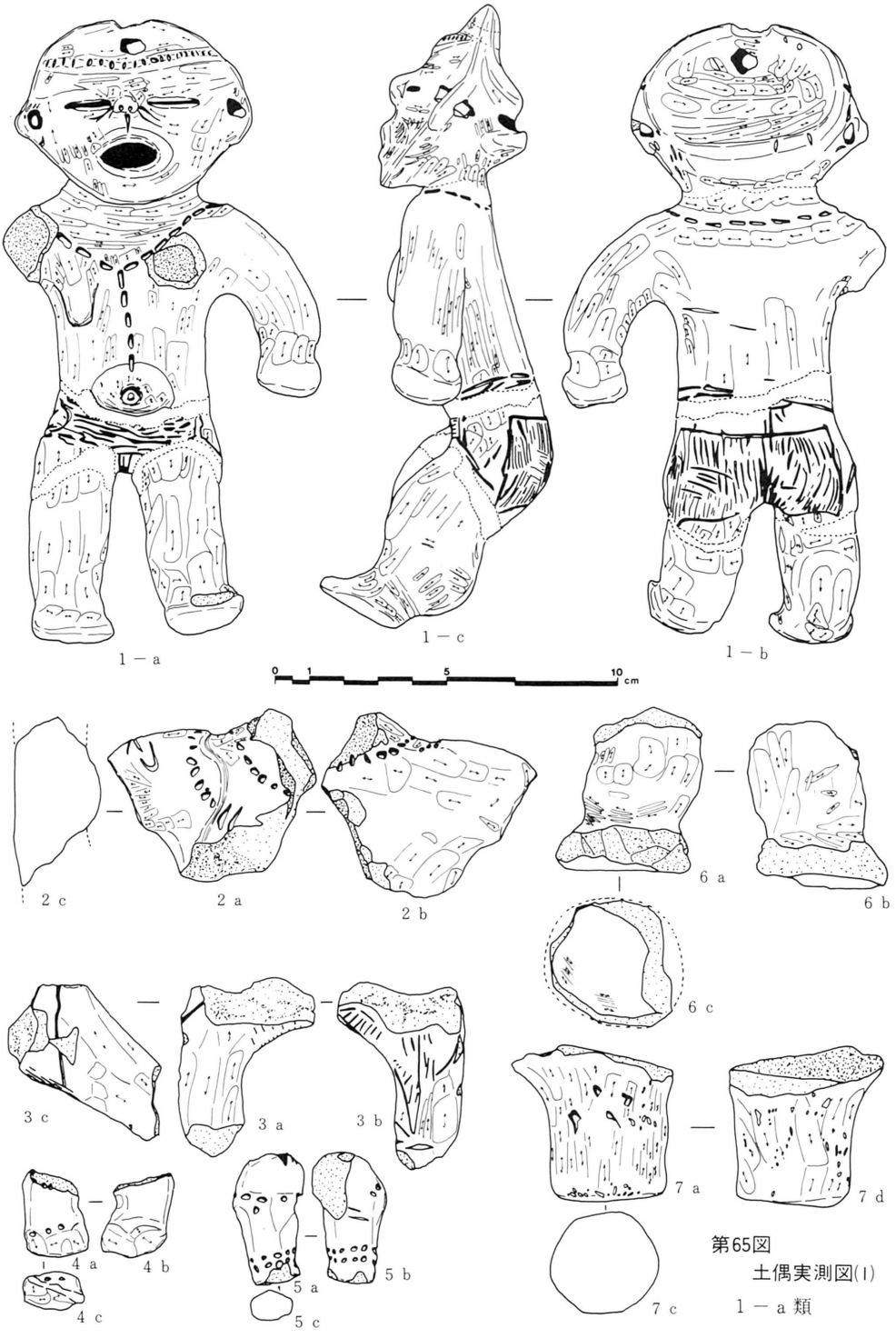
なお大洞C_1式併行とされるパンツ着装例は、青森県東津軽郡三厩村宇鉄出土例、同期で中腰乃至腰かけ状態のポーズをとる例は青森小向遺跡出土例などがある。

最後に、本遺跡出土例にアスファルト付着の事実が存したことを前提として、土偶の性格について若干ふれ、まとめとする。土偶の性格・機能についてふれた業績は多いが、最近の藤沼邦彦氏の要約が適確である[註２]。即ち、「（前略）土偶は自然界の動植物の繁殖を祈願する考えと、女性のもつ生殖力・繁殖力が結合され、それらを祈願する（さらには安産などをも）祭式・儀礼において用いられたものであろう。（中略）しかもその一部が小さく壊れても機能に関係がない場合にはそのまま用いられたり、また補修されたりしてくり返し使用されたのである。そして機能をまっとうできないほど破損した時にはじめて、他の不要品と同じ扱いで廃棄されたのであろう。（後略）」本調査例も大略この要約に合致するものであろう。なお、アスファルト付着例は大迫町小田遺跡[註３]に多数知られている。今後もこの種資料の蓄積に努めるべきであろう。

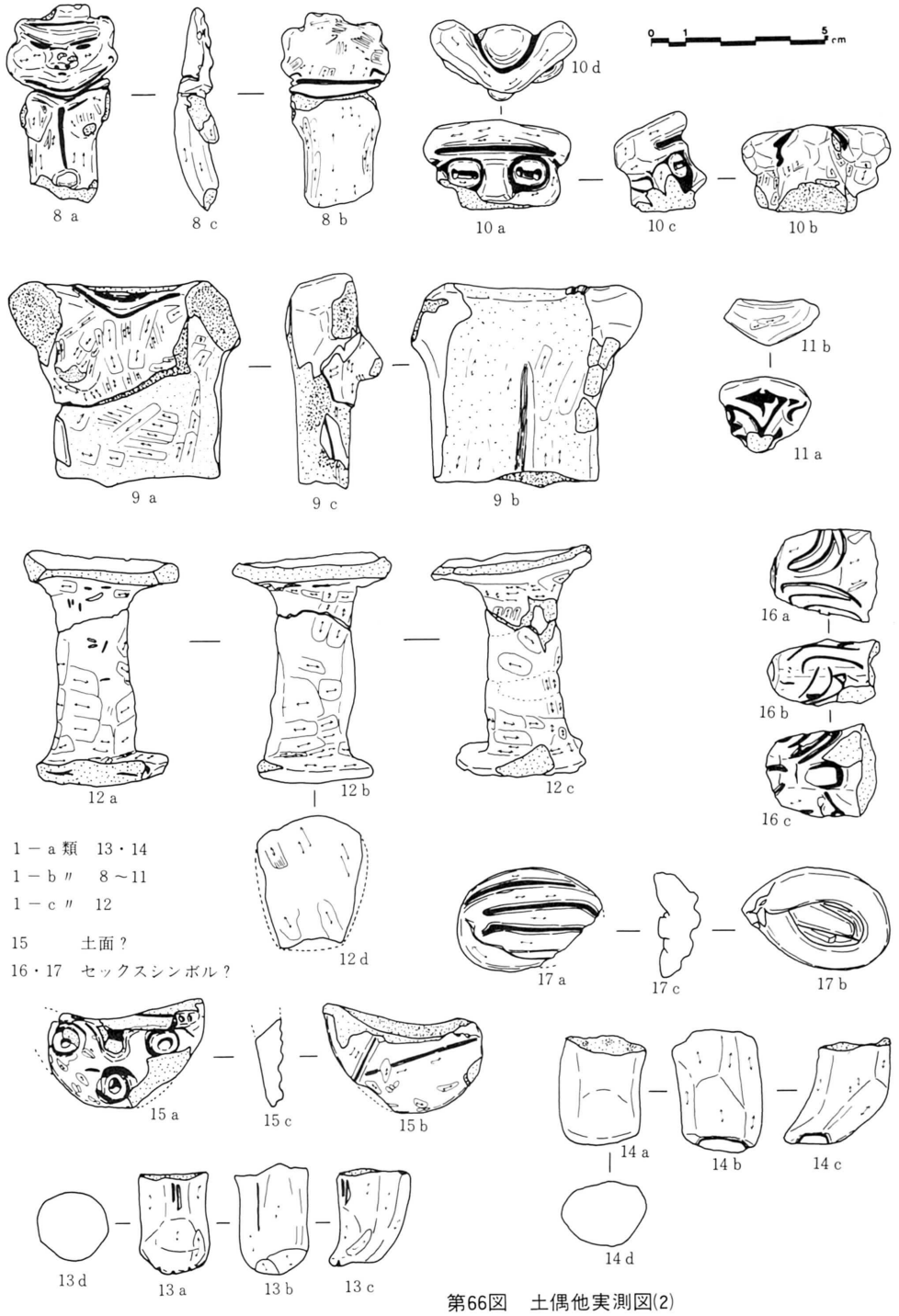
註１）　江坂輝彌　土　偶　　校倉書房　昭和35年

註２）　藤沼邦彦　土　偶―付　土製仮面・動物形土製品―　世界陶磁全集Ⅰ　日本原始　小学館　昭和54年

註３）　岩手県稗貫郡大迫町　小田（こだ）遺跡発掘調査報告書　大迫町埋蔵文化財報告書第４集　大迫町教育委員会　昭和54年３月



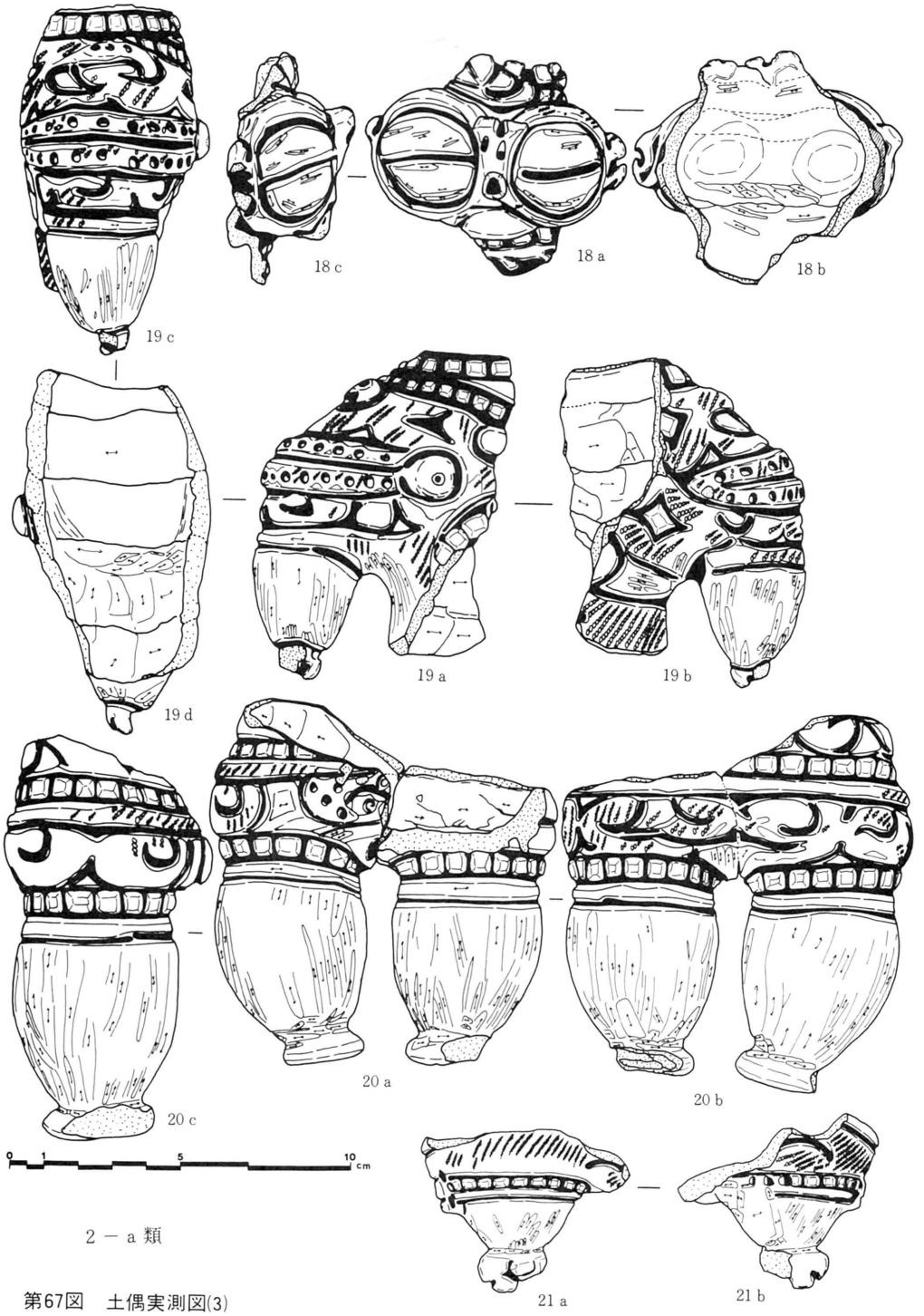
第65図
土偶実測図(1)
1－a類



1－a類　13・14
1－b〃　8～11
1－c〃　12

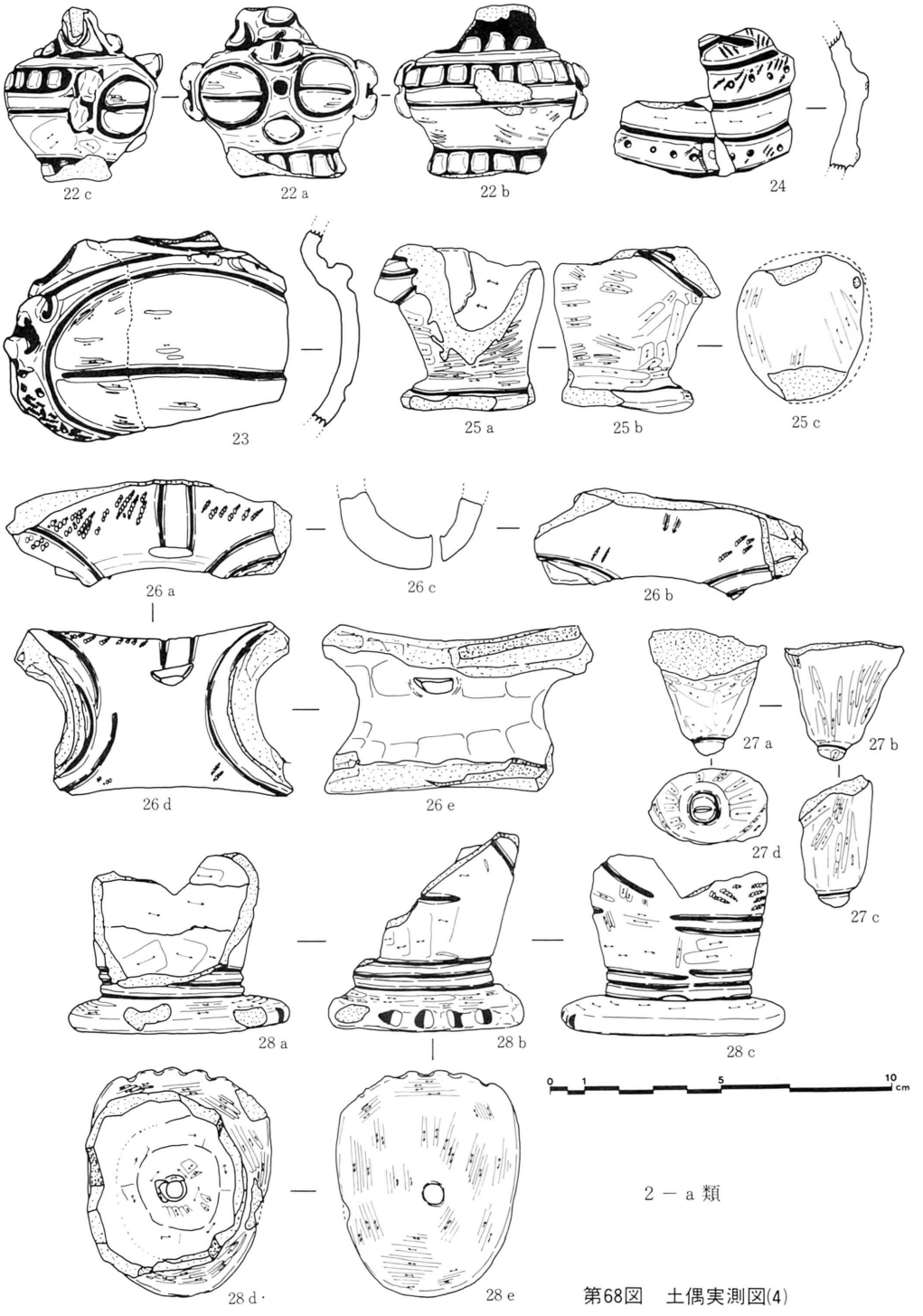
15　土面？
16・17　セックスシンボル？

第66図　土偶他実測図(2)



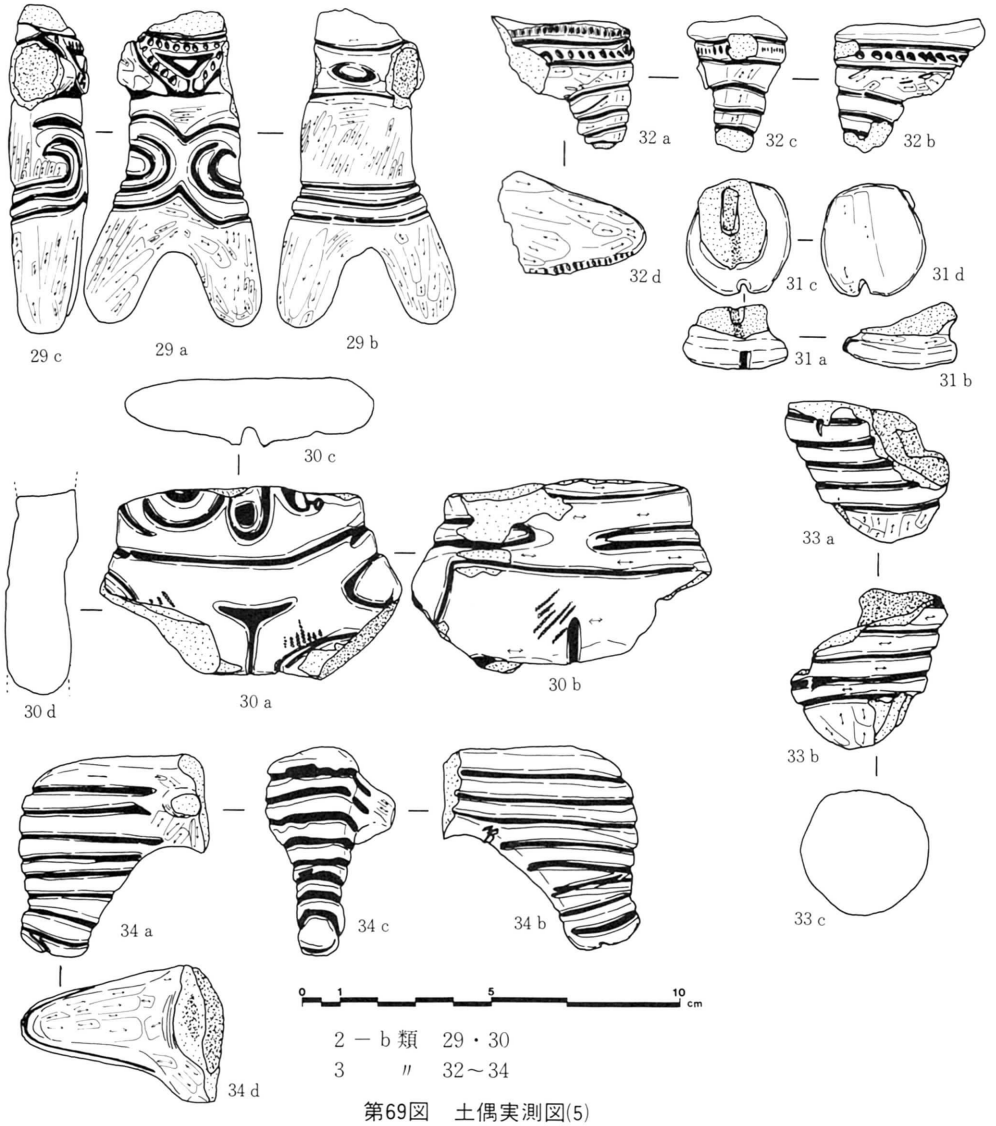
2 － a 類

第67図　土偶実測図(3)



2 － a 類

第68図　土偶実測図(4)



2 − b 類　29・30
3　〃　32～34

第69図　土偶実測図(5)

第 3 表　土偶出土状況一覧

地　点	層位	部　位	タイプ	備　考	地　点	層位	部　位	タイプ	備　考
B h 24	I	下腹部	2 − b	1	C b 15	III	脚　部	1 − c	10
B j 12	III	手か脚	1 − a	2	C b 24	II M	不　明	1 − a	11
B j 21	II M	頭　部	1 − b	3	C b 27	III	手　?	1 − a	12
〃	III	下腹部	2 − a	4	C c 09	III L	右肩以下	2 − a	13
C a 12	III	手　?	1 − a	5	C c 12	III	眼 部 ?	2 − a	19と同一 14
〃	III	脚	2 − a	6	〃	III S	右　脚	2 − a	22と同一 15
C a 15	III M	不　明	1 − a	7	〃	II	手　?	1 − a	16
〃	III	頭　部	2 − a	9、13、15、22と同一？ 8	〃	III	不　明	1 − a	17
C b 09	III S	〃	2 − a	9	〃	〃	〃	1 − a	18

地　点	層位	部　位	タイプ	備　考	地　点	層位	部　位	タイプ	備　考
Ｃｃ15	Ⅲ	脚　部	１－ｂ	14と同一 19	Ｃgh　06	ⅡＳ	頭部～	１－ｂ	33
〃	ⅢＬ	眼　？	２－ａ	20	Ｃｈ03	ⅢＬ	下腹部	２－ｂ	34
Ｃcd　12	ⅡＳ	手　？	１－ａ	21	Ｃａ12	ⅢＭ	不　明	２－ａ	35 同一個体
Ｃｄ12	ⅢＭ	左　脚	２－ａ	15と同一 22	Ｃａ15	Ⅲ	〃	〃	36 同一個体
Ｃｄ15	ⅢＭ	脚	１－ａ	23	Ｂｅ65	Ⅲ	右　肩	１－ａ	37
Ｃｅ03	不明	下腹部	１－ａ	24	〃	Ⅲ	脚	２－ａ	38
〃	ⅢＬ	脚　部	１－ａ	25	Ｂｄ68	Ⅲ	左　腕	３	39
Ｃｅ12	ⅢＵ	手　？	１－ａ	26	Ｂｅ68	Ⅲ	手　？	３	40
Ｃｇ03	Ⅲ	頭部～	１－ａ	27 同一個体	Ｂｅ68	Ⅲ	脚　部	２－ａ	41
〃	ⅢＭ	左　脚	１－ａ	28 同一個体	〃	Ⅲ	〃	２－ａ	42
〃	ⅢＬ	右　脚	１－ａ	29 同一個体	Ｂｇ68	Ⅲ	右　腕	３	43
〃	ⅢＳ	不　明	１－ａ	30	〃	Ⅲ	脚　部	２－ａ	44
〃	ⅢＵ	手　？	２－ａ	31	〃	Ⅲ	上半身	１－ｂ	45
〃	Ⅲ	手　？	２－ａ	32					

第４表　　土偶、土面、sex　symbol等実測図説明

タイプ	実測図	出土地点	出土層位	種別	成形	部位	内・後面 色調	内・後面 調整	外・前面 色調	外・前面 調整	外・前面 朱彩	焼成	胎土色調 内部	胎土色調 外部	土性	その他
１－ａ	65－１	Ｃｇ03	Ⅲ	土偶	胎内充塡	頭～体部	肌　色	ミガキ	肌　色	ミガキ	有	やや良	極暗褐色	肌　色	石英粒で粗	同一個体
			ⅢＭ	〃	〃	左　脚	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃		同一個体
			ⅢＬ	〃	〃	右　脚	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃		同一個体
	2	Ｂｅ65	Ⅲ	〃	胎内充塡	右肩・胸	ピンクがかった肌色	〃	左に同じ	〃		普通	暗灰褐色	〃	同　上	
	3	Ｃｅ03	ⅢＵ	〃	〃	下腹～右股	肌　色	ミガキかケズリかナデ	肌　色	同　左	有	〃	肌　色	〃	〃	
	4	Ｃｃ12	Ⅱ	〃	〃	右腕？	〃	ミガキかナデ	〃	〃		〃	〃	〃	石英粒	同一個体？
	5	Ccd12	Ⅱ	〃	〃	左腕？	茶がかった肌色	〃	同　左	同　左		良好	茶がかった肌色	同　左	〃	同一個体？
	13	Ｃｅ03	ⅢＬ	〃	〃	〃	灰乳色	〃	〃	〃		普通	灰乳色	同　左	〃	〃
	14	〃	Ⅲ	〃	〃	右脚？	肌　色	〃	〃	〃		〃	肌　色	同　左	石英粒でやや粗	〃
	6	Ｂｅ68	Ⅲ	〃	〃	脚～足？	極暗褐色	ミガキ	同　左	〃		やや不良	茶褐色	極暗褐色	〃	
	7	Ｃｄ15	Ⅲ	〃	〃	左脚？	肌　色	ミガキ？	肌色、灰色部あり	ミガキかケズリ		普通	暗灰色	肌　色	〃	
１－ｂ	66－８	Cgh06	ⅡＳ	〃	〃	頭部～上半身	肌色と暗灰色部	ヘラミガキ	茶がかった肌色	ミガキ	有	良好	茶がかった肌色	同　左	〃	
	9	Ｂｇ68	Ⅲ	〃	〃	上半身のみ	赤褐色剝落部灰色	ミガキかヘラナデかナデツケ	暗灰色	〃		不良	灰がかった肌色	〃	〃	
	10	表面採集		〃	〃	頭　部	灰がかった肌色	ミガキ	同　左	〃	有	良好	暗灰褐色	灰がかった肌色	石英粒あるも普通	
	11	Ｂｊ21	Ⅱ	〃	〃	頭部？	暗灰色	ナデツケ？	暗灰色と淡茶褐色	〃		〃	暗灰色	暗灰色と淡茶褐色	精　良	
１－ｃ	12	Ｃｂ15	Ⅲ	〃	中空	脚部？	肌　色	ナデツケかミガキ	同　左	ミガキ、爪		普通	肌　色	同　左	石英粒ありて不良	
２－ａ	67－18	Ｃａ15	Ⅲ	〃	〃	顔　面	肌　色	ナデツケ	淡灰乳色	ミガキ	有	良好	灰　色	灰乳色	石英細粒で精良	18～20 同一個体？

タイプ	実測図	出土地点	出土層位	種別	成形	部位	内・後面		外・前面			焼成	胎土色調		土性	その他
							色調	調整	色調	調整	朱彩		内部	外部		
2－a	19	C c 09	III L	土偶	中空	右肩・右腕	暗灰色	ナデツケ	暗灰色～淡茶褐色	ミガキと LR < 1/1	有	良好	暗灰色	淡茶褐色	石英細粒で精良	
	20	C c 12	III S	〃	〃	右脚	淡茶褐色	〃	淡茶褐色	ミガキと LR < 1/1	〃	〃	淡灰色	淡茶褐色	石英細粒のみで精良	接合
		C d 12	III	〃	〃	左脚	〃	〃	〃	ミガキと LR < 1/1	〃	〃	〃	〃		
	21	C g 03	III U	〃	〃	右腕	淡い肌色	ナデツケ？	同左	ミガキと LR < 1/1	〃	〃	肌色	淡い肌色	精良	
	68－22	C b 09	III S	〃	〃	頭部	灰色	不明	淡灰褐色肌色部	ヘラミガキ	〃	〃	淡灰褐色	淡灰褐色	石英細粒雲母片あるも精良	
	23	C c 12	III	〃	〃	左眼	肌色	ナデツケ？	淡茶褐色黒色部	ヘラミガキ LR < 1/1	〃	〃	灰色	茶がかった肌色	石英細粒あるも精良	大型品
	24	C a 12	III M	〃	〃	体部？	暗灰色	〃	灰褐色と淡茶褐色	ミガキと LR < 1/1	〃	〃	暗灰色	灰褐色と淡茶褐色	〃	接合
		C a 15	III	〃	〃		暗灰色	〃			〃	〃				
	25	B e 68	III	〃	〃	左脚	淡灰色	ヘラナデ？	暗灰色	ミガキ	〃	良好	淡乳色	暗灰色	精良	
	26	B j 21	III	〃	〃	股～下腹	〃	ナデツケ？	淡い肌色	ミガキと LR < 1/1	〃	やや軟質	灰色	淡い肌色	〃	
	27	C g 03	III	〃	胎内充填	腕？	灰乳色	ミガキ	同左	ミガキ	〃	良好	肌色	灰乳色	石英粒ありて粗	
	28	B e 65	III	〃	中空	右足？	肌色	ナデツケ？	同左	ミガキと LR < 1/1	〃	〃	灰色	肌色	〃	指5本あり
2－b	69－29	C b 03	III U	〃	胎内充填	首以下両腕欠落	暗灰色	ミガキ	同左	ミガキ	〃	普通	灰色	暗灰色	〃	
	30	B h 24	I	〃	〃	下腹～股	淡茶褐色	ミガキと LR < 1/1	同左	同左	〃	良好	〃	淡茶褐色	精良	左脚破損部にアスファルト付着
2－a？	31	C a 12	II	〃	中空	右足	淡茶褐色	ミガキ？	同左	同左	〃	〃	淡灰褐色	淡茶褐色	〃	
2－c	32	B d 68	III	〃	胎内充填	左肩・腕	黒～極暗褐色	ミガキ	同左	同左	〃	〃	淡茶褐色	極暗褐色	石英粒ありて粗	
	33	B e 68	III	〃	〃	左腕	淡い肌色	〃	同左	同左	〃	普通	灰色	淡い肌色	〃	
	34	B g 68	III	〃	〃	右肩・腕	淡茶褐色	〃	同左	同左	〃	〃	肌色	淡茶褐色	石英粒あるも精良	
	15	D h 12	III S	土面？	板状	頭～顔面	茶がかった肌色	ヘラミガキ？	同左	貼付後ヘラミガキ		良好	暗灰色	茶がかった肌色	同上	slip？
	16	C e 03	III	sex symbol?	内部充填		茶がかった肌色	ミガキ	同左	同左		〃	灰乳色	茶がかった肌色	石英粒多く粗	男性？穿孔あり
	17	C a 21	III	〃	〃		極暗褐色	粘土紐	灰乳色	ナデかミガキ		普通	極暗褐色	灰乳色	〃	女性？

ⓑ　土偶頭部または土面（第66図15）

半月形の一端が破損した形状をなす。上方の内湾部（額部？）には貼付の痕跡が見られる。下方の外湾部（顎部？）の綾線部には研磨痕が見られ、それで完結するものと思われる。したがって本資料は上方（頭部？）方向へさらに何らかの連続部をもつものと考えられる。それにより土面の可能性をも想定した。表裏面ともに膜状の剝落部が見られ、あるいはslip風の成形が行なわれたとも考えられる。顔面の表現は眉・鼻・眼・口からなる。眉と鼻は粘土紐貼り付けによる隆帯により一連のものとして表現される。眉上には刻みが加えられる。貼り付けを確

実にするための器面への事前処理が行なわれる。眼と口も同様に粘土紐貼り付けによるが、隆帯の両側に二重の沈線が加えられる。貼り付け後、全面にミガキが加えられる。

本例が土面、とりわけ「土面着装土偶」の破片である可能性は皆無ではないと思われる。土面着装土偶の類例は江坂輝彌氏[註1)]によると、青森県西津軽郡木造町大字舘岡字亀ヶ岡、同森田村床舞出土のものがあり、いずれも縄文晩期に属する。本例も大略この仲間と見做しうるかと思われる。

仮面（あるいは土製の耳・鼻・口等も）等の機能は、何らかの儀礼（集団規模）において果たされたものであろう。同様に動物型土製品は狩猟に関する儀礼に用いられた呪具である可能性があろう。

註1）　江坂輝彌　土偶　校倉書房　昭和35年

Ⓒ　**.sex symbol と思われるもの**（第66図、図版35）

土偶の部分とも思われるが、一応分離して扱う。男女性器と思われるものの両者がある。

(1)　男性器と思われるもの（第66図16）。やや偏平な楕円体をなし、表面全体に3本を単位とした彫刻的沈曲線が施文される。側面（正面？）には円形と縦位の沈線が施こされる。それぞれで、包皮・亀頭・尿道口などを表現したと見られる。下面には長軸に沿って斜位の穿孔が見られる。一端は破損しており、体部に相当する部分からの欠落品とも考えられる。その場合は土偶の破片ということになろうか。

(2)　女性器と思われるもの（同17）。粘土紐により成形された独立品と思われる。楕円形のリング状にした粘土紐上に、さらに粘土紐を貼りつけており、裏面にそれが顕著に現われている。片面（表面）には4本の沈線がひかれ、陰唇その他を象徴しているとも見える。所謂遮光器土偶の眼部風にも見えるが、調整・施文技法、胎土土質等が明白に異なることから別に扱かった[註1)]。

大略以上である。これらを性器の象徴と見做しうるか否かの根本的な問題があるが、そうと見做して要約しておく。これらの類例はあまり知らないが、石棒以外に男性器をかたどったものとしては石製品ではあるが、岩手県北上市滝ノ沢遺跡出土例がある[註2)]。時代は縄文時代前期末である。女性のそれについては土偶におけるものしか知らない。

この種のものの性格をいかに解すべきかは不明であるが「仮面」に関連すると思われる口・鼻・耳等の土製品と同様のものと見做してよければ、呪術・儀礼に関連する可能性をもっとも考えうるであろう。現状ではこれ以上の言及はさしひかえる。

註1）　林　謙作氏（昭和49年3月、当時岩手県教委事務局文化課）の教示による。

註２）　斉藤尚巳・中山清隆　北上市滝ノ沢遺跡出土のGlans形石製品　考古学ジャーナル№166　1979年９月号　ニューサイエンス社

ⓓ　**装飾品と思われるもの**（第70図３～６、図版35）　所謂垂飾・腕輪・耳栓などの類を区分した。

⑴　**垂飾と思われるもの**（同図３）　積極的な根拠は無いが、その形状が「鹿角製の垂飾」などと分類されているものに類似するとも見えることから、一応このように区分した。孤状をなす基軸の外湾部分に彫刻的手法で施文した張り出し部をもつ全体的形状をなす。体部中央に貫通穿孔を１つと、孤状をなす基軸部分の両端部に穿孔部をもつ。ａとｂを比較すると、ａに穿孔を中心にして三叉文的な施文が対称的に見られ、ｂは殆ど無文に近いので、前者を正面とみることも出来る。同様に側面観においてもｃにより強い意図的装飾性を看取出来ることから、前者を正面視すべきであろう。ｃの彫刻的施文のモチーフは、隆起部を以って表現された三叉文風のもの（それが 180°の点対称に配置される）と思われる。通常三叉文はnegativeな部分で表現されることが多いのに対しこれは相違しており若干の疑問無しとはしないが一応以上のように見做しておく。完全品である。

⑵　**耳栓と思われるもの**（同図４～６）。　二形式で総数３を得た。

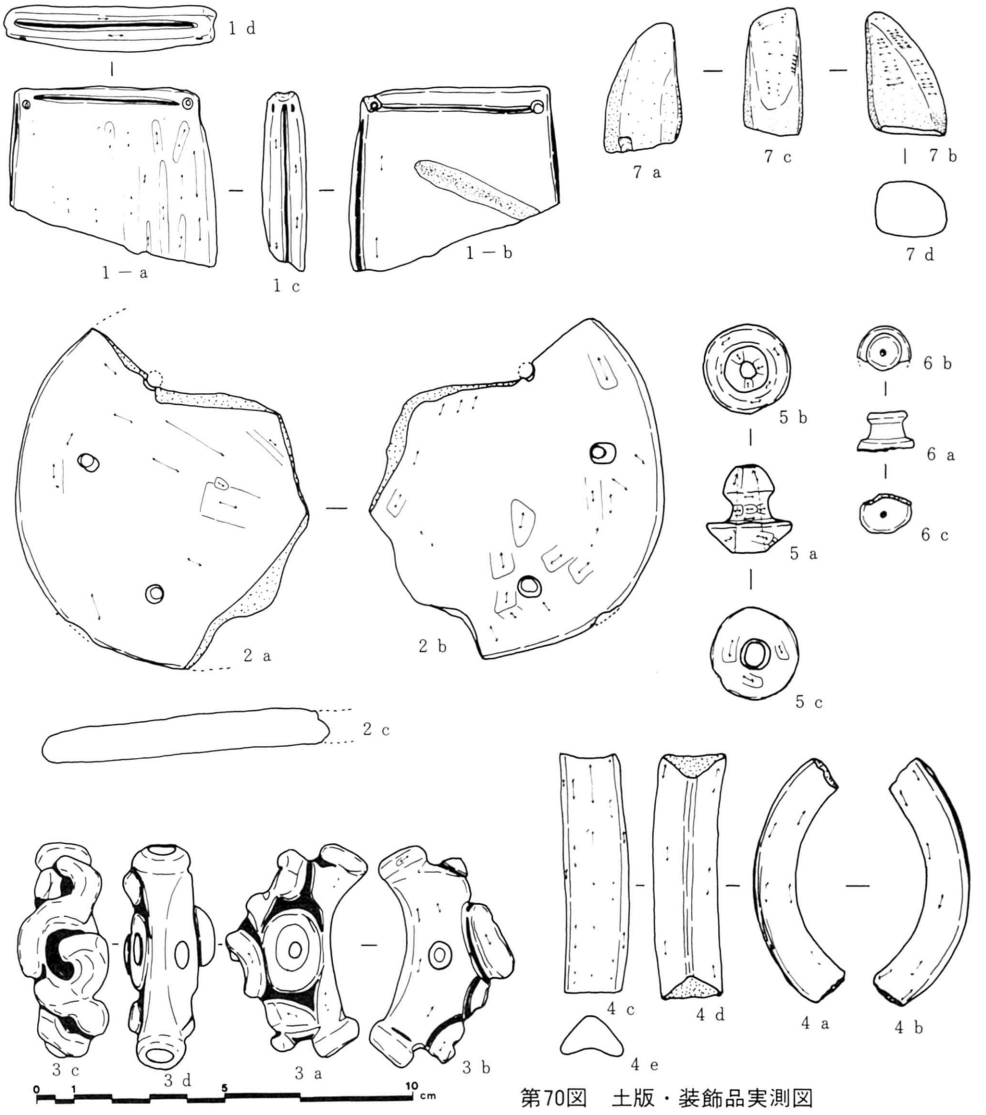
４は外径９・内径６・厚さ１cmと思われるもののほぼ四分の一の破片である。断面形態は内側が凸部を、外側が凹部を形成する大略三角形に近いものである。全面にミガキと朱彩が施こされる。現重量は約12.5ｇあり、これを単純に４倍すれば、総重量は50ｇ前後あったことになる。

５・６は環状をなさない大小の例である。５は完全品である。上径 0.8×底径2.3×高さ0.7cmの截頭円錐台形に、上径 0.5×底径1.3×高さ0.7cmの截頭双円錐台形を接合したかのような形状をなす。表面は入念にヘラミガキされ、朱彩が施こされる。形状・調整ともに均斉な感の強いものである。体中央の穿孔は直線的である。現重量 5.8ｇである。

６は一部欠損の小型品である。５に比し非常に軟質である。上径 1.0×下径1.5×高さ1.1cmである。上・下径ともにその周縁部を肥厚させる。５と同様、ミガキと朱彩が顕著である。現重量0.75ｇであり、おそらくは１ｇ前後のものであったろう。

以上の諸遺物は大略晩期に属するものではあろう。出土地点を勘案すれば、晩期の前半（大洞 B-C 式～C式）にかかわる可能性が、とりわけ高いとはいえる。

ⓔ　**土版と思われるもの**（第70図１・２、図版35）　施文の見られない無文の器面をもち、積



第70図　土版・装飾品実測図

第５表　　土版、装飾品類一覧

実測図 No.	種別	出土地点	出堀位	色調	調整	焼成	胎土色調	同土性	備考
70 − 1	土版	B d 68	III	淡茶褐色 黒斑あり	ヘラミガキ 朱彩？	普通	内外淡茶褐色	石英粗粒他で粗	隅に２穿孔破片
− 2	〃	B e 68	III	暗茶褐色、部分的に明茶褐色	ヘラミガキ	〃	内外暗茶褐色	〃	穿孔3.破片
− 3	垂飾	C a 12	III S	灰がかった肌色	ヘラミガキ 朱彩？	良好	灰がかった肌色	精良	彫刻的手法 完全品23 g
− 4	耳栓	Ccd 12	III ？	同上	〃	普通	肌色	石英その他で粗	環状・破片 12.5 g
− 5	〃	C e 33	III L	不明	〃	良好	不明	精良	完全品 5.8 g
− 6	〃	C d 12	III M	〃	〃	不良	暗灰褐色	〃	破片0.75 g
− 7	不明	B j 15	III	材質玉髄	研磨			完全品？	14.25 g

極的な根拠に欠けるうらみがあるが、その形状からして「版」のカテゴリーに含めて大過ないと思われる２資料を区分した。

(1)は現長５×５＋α×１.2㎝で、おそらくは長方形をなすと思われる。長辺の中間と、横・縦断面形ともに若干膨らむと思われる。表裏面の短辺沿いと側面に沈線が配される。その断面底部に数条の擦痕が見られ、その工具の先端は平垣なものではなかったと思われる。現存の２つのコーナーに穿孔が見られる。表裏面ともにケズリ痕乃至ミガキ痕が見られ、それはおもに長辺方向に沿っている。器面は粗い。朱彩が施こされていると思われる。

(2)は円盤状をなしていたとすれば、その四分の一程度の残存品である。周縁より約１.5㎝程中心に寄った部分に穿孔が施こされ、現存品で３個まで確認出来る。両面からの穿孔作業によったと思われる孔もある。表裏ともに器面上にはミガキ痕が見られ、その方向は、周縁部はそれに沿って、中央部は無関係の方向になっている。石英粗粒他が極めて多く、器面は粗い。

この種遺物の類例は寡聞にしてあまり聞かないが、晩期に関するものではあろう。さらにいうと出土地点からして、晩期後半にかかわるものである（大洞C_2～Ａ式）可能性が比較的高いといいうる。

ⓕ **土製円盤**（第71～73図、図版35）　おもに土器の破片を利用し、その形態を円盤形に仕上げたものを一応このように呼んだ。穿孔の有無その他の特徴により若干の分類が可能であるが、以下では項目別に総括的に説明する。

(1)　素材　前述の如くに、基本的には土器の破片の二次的利用によっている。破片の部位は体部が圧倒的に多いが、底部の利用例も若干存在する（第72図16・22・28・29）。その場合は体部下端にあたる部分のみを加工して、もとの直径を残す例が多い。破片の周縁を打割し、その後に研磨するのが一般的な加工法のようである。体部破片の利用例において、そこに羽状縄文が施文されている場合には、結末部が円盤の中央にくるものが多い。したがって加工時に何らかの配慮が働らいていたと見ることも出来る。

第71図１のみは破片の二次的利用ではなく、それ自体を本来の目的とした一次製品の可能性が高い。片面が盛り上がり、他面が凹む形態をとり、全面がヘラケズリ乃至ヘラミガキされている。周縁は丸味を帯びる。例外的な大型品・重量品であり、破片利用の他例とは性格が異なる可能性が大きいが、一応ここに含めておく。

(2)　形態・大きさ他　基本的には円盤形をなすが、稀に所謂「隅丸方形」に近い例も存在す

る（第71図３）。大きさ・重量等については第７～９表を参照されたい。最大径6.4(確実例）、最小径 2.3cmの間に種々分布しているが、６cm以上、5.9～4.9cm、4.7～4.3cm、4.1～3.5cm、３cm前後、に若干の集中が見られる。しかし、６～５cm前後（大型）、3.5～4cm台（中型）、３cm前後～以下（小型）の三大別程度にまとめるべきかとも思われる。

重量分布は最大24.5、最小 5.0ｇ（完全品のみ）であり、直径とある程度の相関関係をもちながら分布している。現在の重量の５ｇを単位とする集合が存在するかとも見えるが、詳細な検討は今後に期すこととし、そのグラフのみを示しておく。縄文時代の度量衡問題もいずれは研究課題とされるであろうことを期待しつつ、資料提示を行なうに留める。

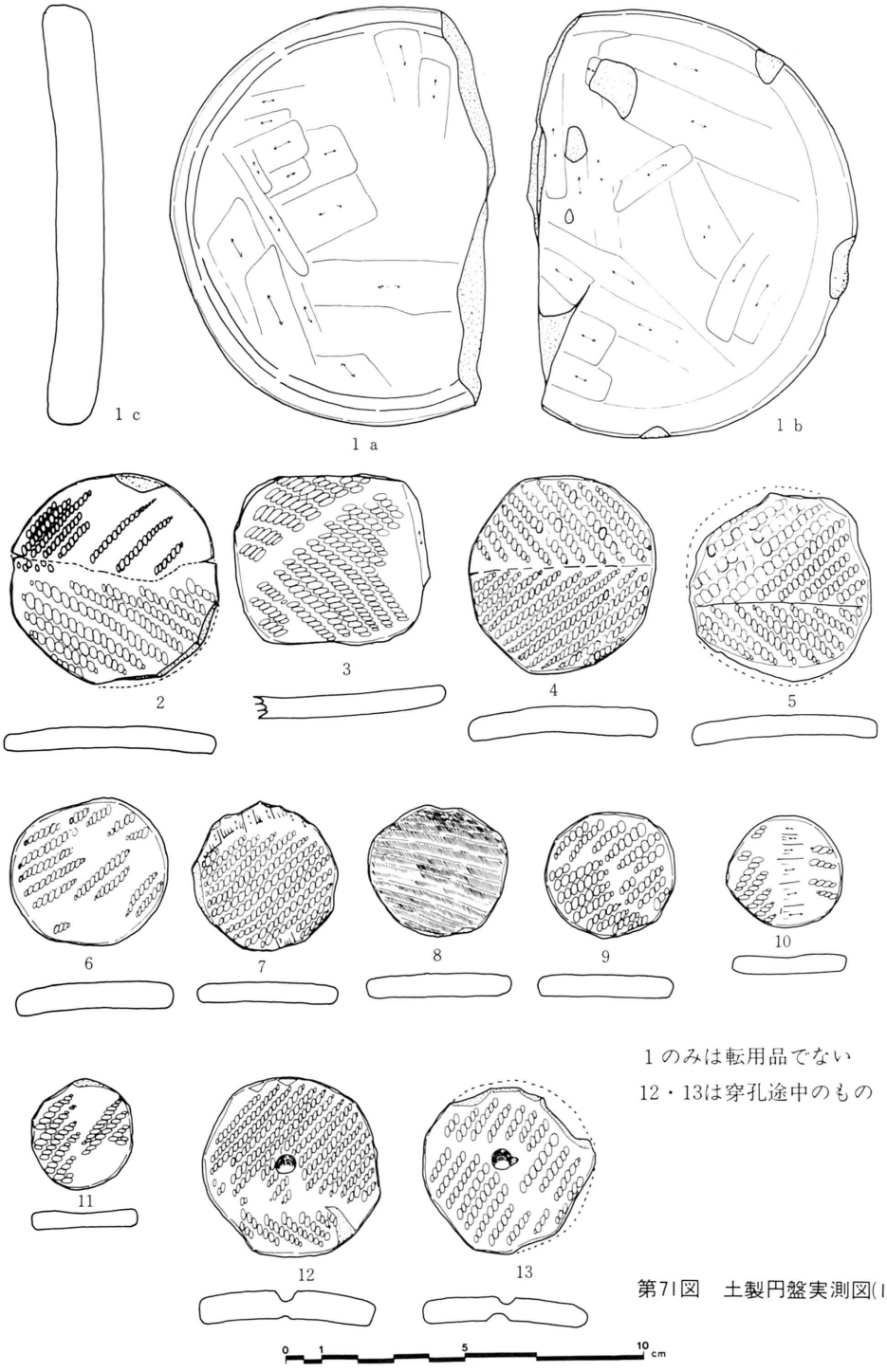
器厚は土器のそれに左右されるが、大略0.8～0.5cmの巾の中に納まる。底部破片利用の１例のみが 0.4cmと若干薄い。

(3) 成形その他　この資料の製作工程の一部には既にふれたが、それは破片の選択→周縁の打割による成形→周縁の研磨→穿孔というプロセスであったろう。それは、未穿孔資料（第71図２～11）、穿孔途中の例（同12・13）、貫通例（その他のすべて）の三種の資料の存在から想定出来る。ただし、未穿孔品もそれで完成品でありうる可能性を否定するものではない。しかし穿孔途中の製品の存在は、この種資料が本来の形（完成時）が有孔であったことを想定せしめるものであろう。穿孔は表裏両面からの回転運動によっている。

(4) 出土状況他　出土状況は第10表にまとめた。ほとんど全グリッドからまんべんなく出土しているといってよい。Ⅲ層が主体をなそう。Ca 12・15、Cb 12・15、Cc 12周辺に若干集中化現象があるとも見えるが、これは他の遺物のそれとほぼ軌を一にするものであろう。つまり本資料は晩期前半期に主体的に共伴するものと見做しうる。ただし、Bd 68その他の晩期後半の遺物も多い地点出土のものには、底部破片利用の例がやや多いとも見える。したがって、時期により利用される素材破片に若干の差が存在した可能性もありうる。

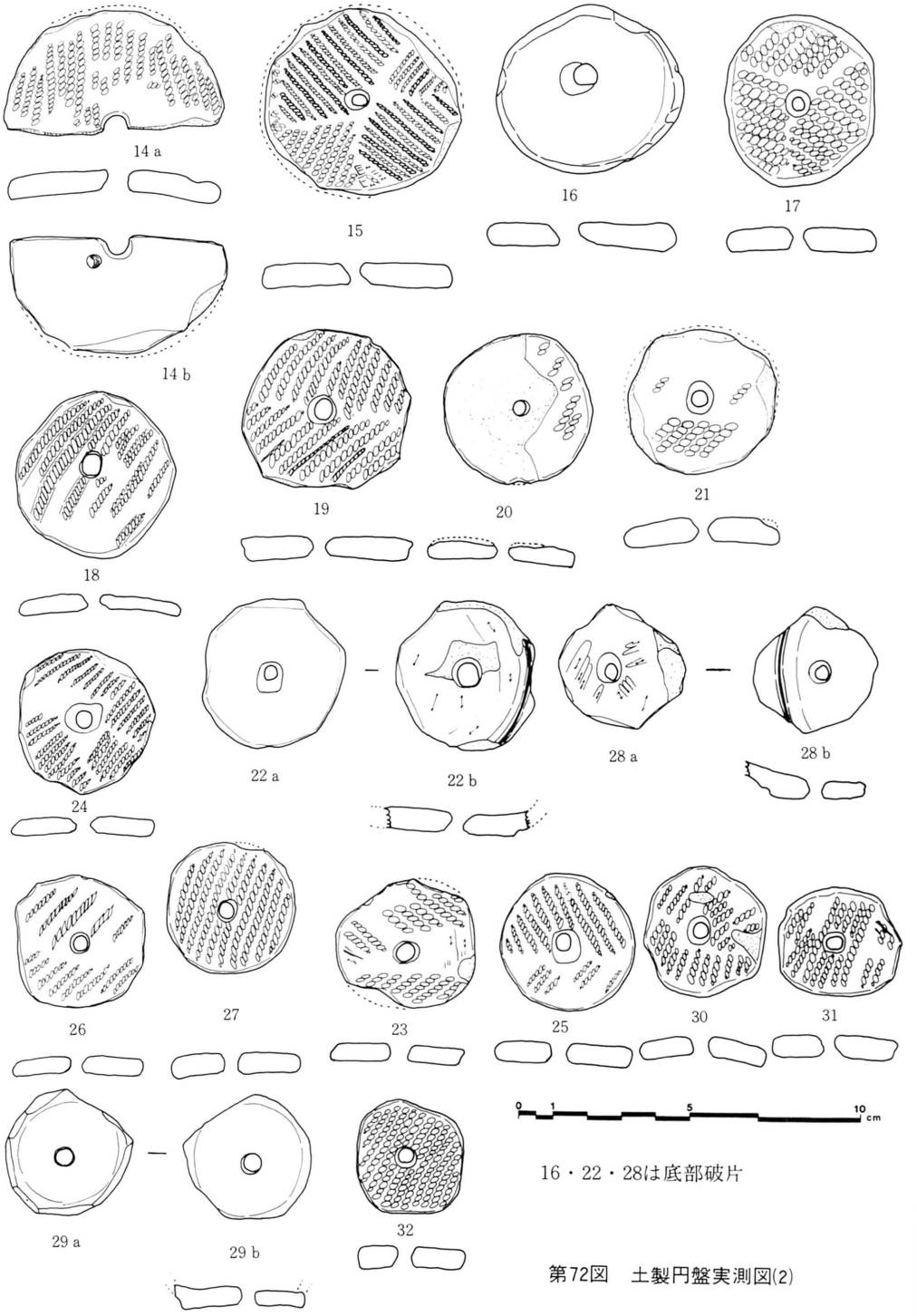
(5) その他　破片状況は半欠か、周縁の打割によるものの二種である。これらが、その使用の結果か、製作途辺の破損かは不明である。用途は不明であるが、有孔なる形状に着目すればそこに軸・柄・糸・紐などを通す何らかの意味での「錘」的なものを想定することも出来る。本遺跡の立地が衣川に臨んでいる点、縄文時代に盛行している繊維束利用の広汎な編物作業の存在などを考慮すれば、あながち不当な想定とはいえまい。

註）以上の他に大木８ａ式、土師器、須恵器、陶磁器の細片を得た。土師器・須恵器は９世紀半以降のもの、最後者は近世以降のものである。古代のものは回転糸切り・無調整のものである。細片・少量の故に本報告では省略した。それらの一部を胎土分析試料化したことについては後述してある。



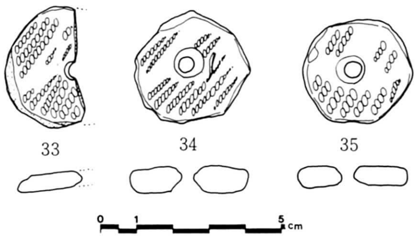
1のみは転用品でない
12・13は穿孔途中のもの

第71図　土製円盤実測図(1)



16・22・28は底部破片

第72図　土製円盤実測図(2)



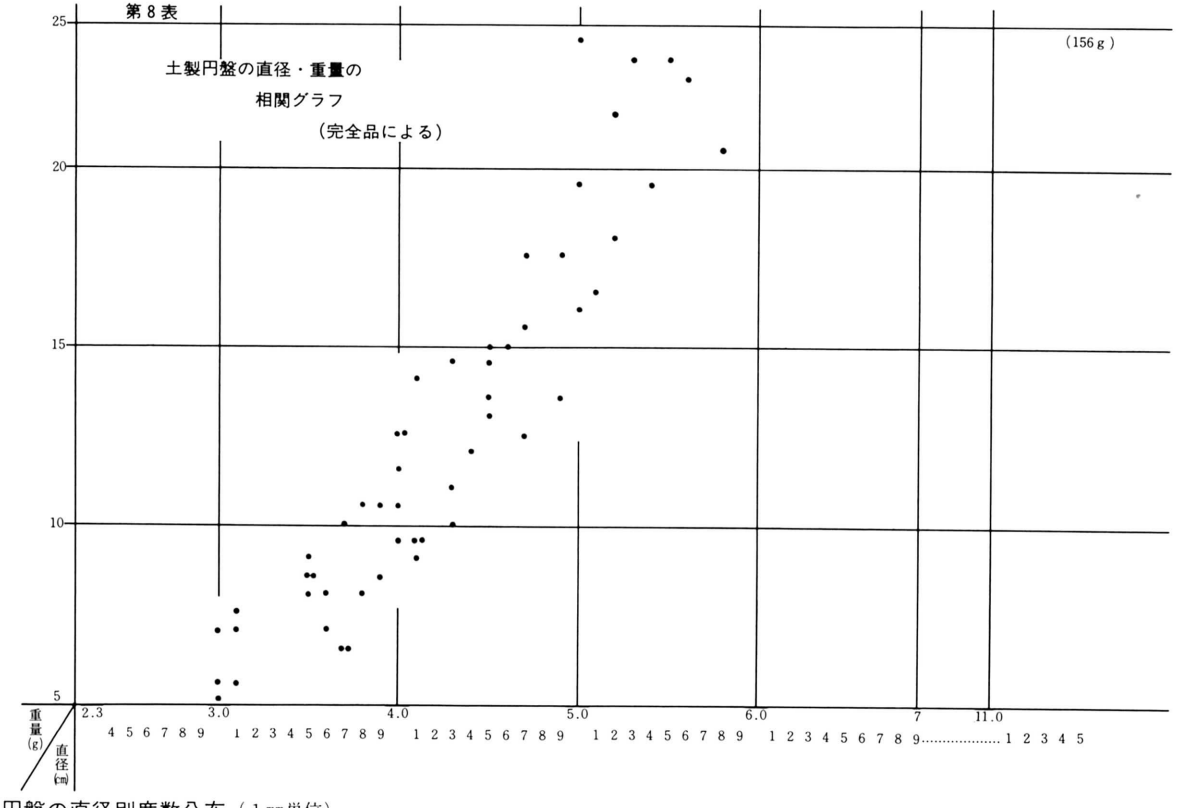
第73図　土製円盤実測図(3)

第６表　土製円盤実測図説明一覧

実測図No.	出土地点	出土層位	色調 表面	色調 裏面	調整 表面	調整 裏面	焼成	土性	穿孔 無	穿孔 中途	穿孔 貫通	その他
1	Ｂｅ65～68	Ⅲ	両面淡茶褐色、黒斑		ヘラミガキかナデ	同左	普通～やや不良	石英粗粒ありて粗	○			第１次製品
2	Ｂｉ12	ⅢＬ	両面黄色がかった肌色		羽状縄文 ＬＲ<⌇＋ＲＬ<⌇	ヘラミガキ	不良	砂粒露出し粗	○			体部破片
3	Ｃｂ12	ⅢＬ	極暗褐色～暗褐色	淡茶褐色	ＬＲ<⌇	ヘラミガキ crack	良好	石英細粒ありてやや粗	○			〃
4	Ｃａ15	ⅢＬ	暗灰色	茶がかった肌色	ＲＬ<⌇＋ＬＲ<⌇の羽状縄文	ミガキ	普通からやや良	石英粗粒多くやや粗	○			〃
5	Ｃｂ15	ⅢＬ	淡茶褐色	同左	LR<⌇+RL<⌇の羽状縄文	ミガキ、光沢	普通	石英粒極めて多く粗	○			〃
6	Ｃａ09	Ⅲ	肌色	極暗褐色	ＬＲ<⌇縄文、多孔質	ミガキ、光沢	不良	小石、石英粒多く粗	○			〃
7	Ｃａ15	ⅢＬ	茶がかった灰褐色	茶がかった肌色	ＬＲ<⌇縄文	ミガキ、多孔質	普通からやや良	石英粒、雲母片ありて粗	○			〃
8	Ｃｄ12	Ⅲ	極暗褐色	淡灰色	Ｒ<⌇、無節縄文 煤(?)付着	ミガキ、平滑	〃	石英細粒ありて若干粗	○			〃
9	不　明	不明	暗茶褐色	茶がかった肌色	ＬＲ<⌇縄文、煤(?)	ミガキ	普通	石英粗粒ありて粗	○			〃
10	Ｃｂ12	Ⅲ	淡茶褐色	肌色	ＲＬ<⌇＋ＬＲ<⌇ 羽状縄文、煤(?)	ミガキ crack	〃	〃	○			〃
11	Ｃａ12	Ⅲ	灰褐色	肌色	ＲＬ<⌇、縄文、煤(?)	ミガキ	〃	〃	○			〃
12	Ｃｂ12	Ⅲ	茶がかった肌色	暗褐色	ＬＲ<⌇＋ＲＬ<⌇の羽状縄文	ミガキ	〃	小石、石英粗粒多く粗		○		〃
13	Ｃｇ06	Ⅰ	〃	灰がかった肌色	ＬＲ<⌇縄文	ミガキ、多孔質	不良	〃		○		〃
14	Ｃｂ09	Ⅲ	〃	同左	ＲＬ<⌇縄文	同上	普通	〃			○	〃
15	Ｂｊ15	Ⅲ	灰がかった茶褐色	同左	ＲＬ<⌇とＬＲ<⌇の不整な羽状縄文	ミガキ、平滑	良好 硬質	〃			○	〃
16	Ｃｂ18	Ⅲ	〃	〃	ヘラミガキ？	同左	普通	石英細粒あるも精良			○	底部破片
17	Ｃｅ15	Ⅲ	〃	〃	ＬＲ<⌇による羽状縄文風	ミガキ、平滑	良好	石英細粒あるもほぼ精良			○	体部〃 朱彩(?)
18	Ｃｂ15	Ⅲ	淡茶褐色	暗褐色	ＬＲ<⌇縄文	ナデかミガキ、多孔質	普通	小石、石英ありて粗			○	体部破片
19	Ｃｆ09	Ⅲ	黄色がかった肌色	同左	〃	ミガキ、多孔質	やや不良	〃			○	〃
20	Ｂｉ15	Ⅲ	淡茶褐色	茶がかった肌色	ＲＬ<⌇縄文 膜状剥落	〃	普通からやや不良	〃			○	〃
21	Ｃａ12	Ⅲ	肌色	白灰色	ＲＬ<⌇縄文	ヘラミガキ、平滑	普通	〃			○	〃
22	Ｂｅ68	ⅢＬ	暗茶褐色	同左	ミガキ	同左	良好	精　良			○	底部破片
23	Ｃａ09	Ⅲ	暗灰褐色	肌色	ＬＲ<⌇＋ＲＬ<⌇ 羽状縄文、煤(?)	ミガキ、平滑	やや不良	石英、雲母あるも普通			○	体部破片
24	Ｃｅ06	Ⅲ	淡茶褐色	同左	ＬＲ<⌇縄文、煤(?)	ヘラミガキかヘラナデ	普通	石英細粒あるも精良			○	〃
25	Ｃｄ09	ⅢＬ	黄色がかった肌色	同左	ＲＬ<⌇＋ＬＲ<⌇の羽状縄文	ミガキ 多孔質	普通からやや不良	石英粒多く粗			○	〃
26	Ｃｆ03	ⅢＬ	極暗褐色	淡茶褐色	ＬＲ<⌇、縄文 異原体２本	〃	〃	〃			○	〃
27	Ｃａ21	ⅢＬ	白乳色	灰乳色	ＬＲ<⌇縄文、多孔質	ミガキ、極めて多孔質	〃	〃			○	〃
28	Ｂｄ68	Ⅲ	茶がかった肌色	同左	ヘラミガキ 多孔質	ヘラミガキ、多孔質	〃	白色、茶色粒子ありて粗			○	底部破片
29	Ｂｇ68	Ⅲ	灰褐色	同左	ヘラミガキ	〃	〃	〃　あるも普通			○	〃
30	Ｃｃ18	Ⅰ	淡茶褐色	暗灰褐色	ＬＲ<⌇、縄文 剥落	ヘラミガキ 平滑	普通	石英、雲母片あるも精良			○	体部破片
31	Ｃｂ15	Ⅲ	淡茶褐色	同左	ＬＲ<⌇縄文、煤(?)	ヘラミガキ	不良	石英粒ありて粗			○	〃
32	Ｃａｂ09	Ⅲ	暗灰褐色	同左	ＬＲ<⌇縄文	ヘラミガキ	良好	石英細粒あるも精良			○	〃
33	不　明	不明	暗褐色	肌色	ＬＲ<⌇縄文、煤(?)	ヘラミガキ、多孔質	不良	粗砂ありて粗			○	〃 半欠
34	Ｃｃ12	Ⅲ	黄色がかった肌色	同左	ＬＲ<⌇縄文	〃	〃	石英粗粒ありて粗			○	〃
35	Ｃｂ06	Ⅲ	肌色、黒斑	同左	〃	〃	〃	〃			○	〃

第7表　土製円盤一覧

通算番号	登録ナンバー	出土層位	概形形		最大長 cm			重量g	備考
			完全	破損	縦	横	厚		
45	Be 65～68	III		○	11.5	—	1.3	156.0	無孔
37	Bi 12	III L(3)			5.6	—	0.6	22.5	(接合)
32	Cf 03	III L		○	5.5	—	0.6	14.5	
28	Ca 15	III L	○		5.3	—	0.6	24.0	
29	Cb 12	III L(2)	○(方形)		5.2	—	0.6	21.5	
30	Cb 15	III L(1)	○		5.0	—	0.6	19.5	
31	Cb 15	III M	○		4.5	—	0.6	14.5	
34	Cc 12	III	○		4.1	—	0.6	14.0	
33	Ce 09	III(3)	○		4.3	—	0.7	14.7	
36	Ca 15	III L(1)	○		4.0	—	0.6	11.5	
48	Be 65	III	○		4.0	—	0.8	17.5	
46	Bj 12	III L	○		4.3	—	0.6	11.0	
51	Cd 12	III M	○		3.9	—	0.5	10.2	
52	?	?	○		3.7	—	0.6	10.0	
35	Cb 15	III M	○		3.5	—	0.6	8.5	
53	Ca 21	III L		○	3.6	—	0.7	5.5	
50	Cb 12	I	○		3.1	—	0.5	6.5	
49	Ca 12	III	○		3.1	—	0.6	5:5	
47	Cb 12	III	○		5.0	—	0.8	24.5	穿孔途中
64	Cg 06	I	○		4.7	—	0.7	15.5	
65	Cb 09	III		○	6.4	—	0.7	19.5	有孔
54・73	Cb 24	I		○	6.3	—	0.5	8.5	
16	Bj 15	III(1)	○		5.8	—	0.5	20.5	
24	Cg 03	III L		○	5.0	—	0.6	9.5	
22	Cb 12	III(3)		○	5.5	—	0.6	8.5	
26	Cg 03	III L	○		5.5	—	0.6	23.0	24と同じ
1	Cb 18	III	○		5.4	—	0.7	19.5	底部破片
63	Cc 09	III M	○		5.2	—	0.7	18.0	
39	Ce 15	III①	○		4.9	—	0.7	17.5	
41	Be 68	III(12)	○		4.6	—	0.6	15.0	
10	Cf 09	III	○		5.0	—	0.6	16.5	
60	Be 68	III	○		5.1	—	0.6	16.5	
62	Bg 68	III	○		4.9	—	0.6	13.5	
9	Ca 12	III L	○		4.4	—	0.5	12.0	
2	Cb 15	III M	○		4.7	—	0.5	12.5	
6	Ce 06	III(3)	○		4.7	—	0.8	17.5	
66	Cg 03	I		○	3.8	—	0.6	8.5	
67	Cc 09	III		○	4.3	—	0.7	7.5	
20	Cd 09	III		○	4.6	—	0.5	8.5	
27	Ca 12	III		○	4.4	—	0.6	6.5	
15	Bi 15	III	○		4.3	—	0.6	10.0	
40	Ca 12	III S①	○		4.5	—	0.6	13.5	
13	Cd 09	III V	○		4.5	—	0.6	15.0	
57	Be 68	III L	○		4.5	—	0.6	13.0	底部破片
58	Ca 09	III	○		4.1	—	0.5	9.5	
56	Ca 12	III	○		4.1	—	0.6	9.5	
7	Ce 06	III	○		4.1	—	0.5	9.0	
11	Cd 09	III L(13)	○		4.0	—	0.6	10.5	
8	Cf 03	III L	○		4.0	—	0.5	9.5	
14	Ca 21	III L	○		3.8	—	0.6	10.5	
12	Ce 09	III①	○		3.9	—	0.5	8.5	
23	Cc 12	III		○	4.7	—	0.5	5.0	
25	Cd 06	III L		○	3.7	—	0.6	5.5	
21	Cb 12	III U		○	4.0	—	0.6	8.0	
61	Cgh 09	I	○		4.0	—	0.7	12.5	
42	Bd 68	III	○		3.7	—	0.5	6.5	底部破片
43	Bg 68	III	○		3.7	—	0.4	6.5	〃
59	Cc 18	I	○		3.8	—	0.5	8.0	
5	Bj 15	III	○		3.5	—	0.6	8.0	
44	Bfg 09	III	○		3.5	—	0.6	9.0	
70	Be 65～68	III		○	3.7	—	0.5	4.0	
68	Cc 12	III		○	3.8	—	0.5	4.5	
74	Cg 06	III		○	3.6	—	0.5	5.0	
17	Cb 15	III M	○		3.6	—	0.6	8.0	
19	Cf 03	III L⑩	○		3.6	—	0.4	7.0	
71	Bf 06	III		○	3.1	—	0.6	5.0	
69	?	?		○	3.3	—	0.5	4.5	
55	Cab 09	III	○		3.5	—	0.6	8.5	方形
3	Cb 06	III(2)	○		3.0	—	0.5	5.5	
4	Cc 12	III M	○		3.1	—	0.7	7.5	
18	Cg 03	III L	○		3.0	—	0.7	7.5	
38	Bd 68	III U		○	3.0	—	0.6	3.5	
72	?	?		○	2.3	—	0.5	1.5	



第9表　土製円盤の直径別度数分布（1mm単位）

直径	2.3	3.0	3.1	3.3	3.5	3.6	3.7	3.8	3.9	4.0	4.1	4.3	4.4	4.5	4.6	4.7	4.9	5.0	5.1	5.2	5.3	5.4	5.5	5.6	5.8	6.3	6.4	11.5
数量	1	3	4	1	4	4	5	4	2	6	4	4	2	4	2	4	2	4	1	2	1	1	3	1	1	1	1	1

第10表　土製円盤の地区別出土数

	Bd68	Be65	Bg 65・68	Be68	Bg68		Bf06	Bfg09	Bi12	Bi15	Bj12	Bj15		Ca09	Ca12	Ca15	Ca21	Cab09	Cb06	Cb09	Cb12	Cb15	Cb18	Cb24	Cc09	Cc12	Cc18	Cd06	Cd09	Cd12	Ce06	Ce09	Ce15	Cf03	Cf09	Cg03	Cg06	Cgh09
不明																																						
I																					1			1			1									1	1	1
III	2	1	2	3	2		1	1	1	1	1	2		1	5	2	2	1	1	1	3	5	1		2	4		1	3	1	2	2	1	3	1	2	1	
計	2	1	2	3	2		1	1	1	1	1	2		1	5	2	2	1	1	1	4	5	1	1	2	4	1	1	3	1	2	2	1	3	1	3	2	1

（C）石器類　種別を識別しうるもの 3,500個前後と大量のものを得た。以下順に記す。

石器類の出土状況その他（第74図、図版14・15）

石器類についても土器と同様に特異な現象は指摘できない。大略土器のそれに類似している。したがって、とりわけＡ地点においては帯状分布、その中での南北の二群構成などを示している。ただし土器とは異り、４～５群の細群に分化する傾向はほとんど示さない。

その組成内容も生活用具の直接的反映と思われるものである。したがって当時の利器を主とする石器類が廃棄されたものと考えられる。完全品・破損品・未製品・素材のすべてをふくむ。特記事項としてＣｄ12地点（１点のみＣｄ09）ＩＣ層下部出土の剝片類の接合資料がある（第75図)。これはほぼ同一地点に集中して検出されたものであり、得た全資料が接合し、母岩の形状にもどるものである。調査の不備から、ピット類他の遺構を伴なうか否か（あるいはピット中の出土かなど)は不明である。一例にのみ細部加工・剝離が認められ、仕上げの加工に着手したことが知られる。以上のことからこの資料が、遺物包含層（Ａ地点）で粗割り、仕上げ加工された否かについては確言できない。他地点での加工物がこの地点へ廃棄された可能性もある。石器製作のある過程を屋内で行なったことが確実な類例も増加してきている点も考慮し、如上の両様の可能性を指摘するにとどめる。

岩版・石棒・石剣類の出土状況にも特筆すべき事項は観察出来ない。

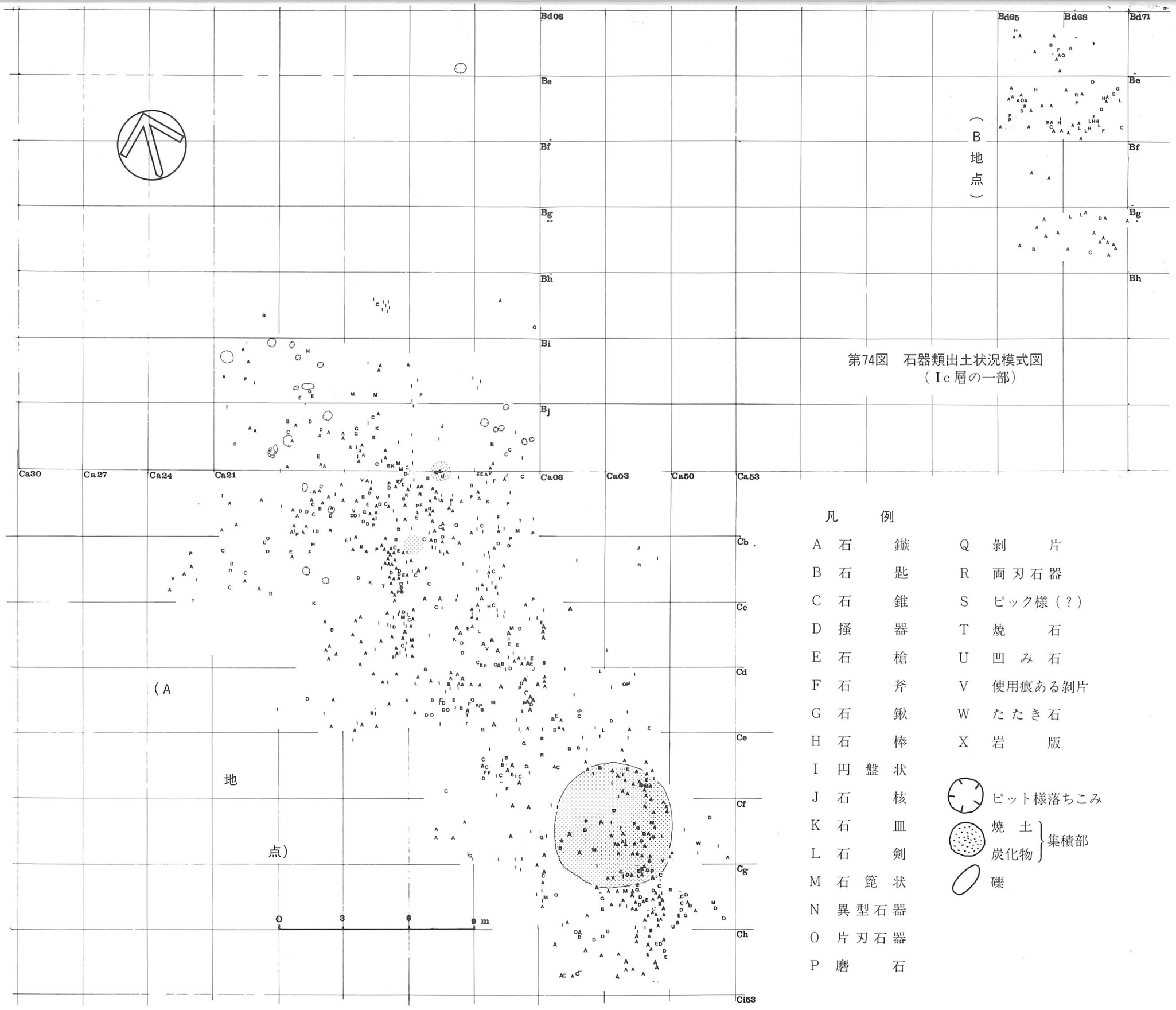
以上の石器類の出土状況は、石器における“亀ヶ岡パターン”[註)]ともいうべきものであろう。ただし亀ヶ岡パターンを示す土器群に共伴する石器のあり方にはいくつかの類型があるらしい。極めて器種組成・量が貧弱な例も知られている。したがってその遺物包含層の性格を十分考慮した上での解釈が施こされなければならない。本遺跡には別にのべたように一種の〝母村〟的集落機能を想定でき、その反映としての組成・量の豊かさと考えた。キャンプサイト的なそれの場合には貧弱になりうる可能性がある。

廃棄の具体相（完全品・破損品・未製品・素材が混在している)も土器と同様に不明である。

註）　鈴木克彦　廃棄論の再構成と課題　考古学ジャーナル　142 1977

（D）石器類概観　石器類については既に先学によって種々の分類が行なわれているが、ここではまず、通常行なわれていると思われる基準にしたがって各種別に大別した。次にそれを想定しうる機能別に整理した（第12表)。最初にこれらの分類基準を簡単に説明する。

(1)　No.1　石器の製作過程に関連すると思われるもの。「素材」としての色彩の強いものと、



第74図　石器類出土状況模式図
（Ic層の一部）

	原石								黒耀岩								槌石							
	A	B	C	D	不明	石敷	表採	計	A	B	C	D	不明	石敷	表採	計	A	B	C	D	不明	石敷	表採	計
不明		2	5		29	10		46					29	1		30					1	1		2
I		15	18			2		35		8	12					20		2	6			2		10
II		16	37					53		5	29					34			4					4
III		2 64	12 102	2	2 2			16 170		1	1 3		1			1 5		2	4					6
計		99	174	2	33	12		320		14	45		30	1		90		4	14		1	3		22

	石槍								万鏃								石鏃							
	A	B	C	D	不明	石敷	表採	計	A	B	C	D	不明	石敷	表採	計	A	B	C	D	不明	石敷	表採	計
不明			13		10	1		24		1	35		34	1		71			4		1			5
I		2	8	2	1	1		14		2	38		5			45			2					2
II		2	21					23	1	26	101		1			128		2	2					4
III		6	5 27		1			6 33		7 36	15 73		3			22 112		4	3 9		2			3 15
計		10	74	2	12	2		100	1	72	262		43	1		379		6	20		3			29

	石鏃								石鏃								石鏃							
	A	B	C	D	不明	石敷	表採	計	A	B	C	D	不明	石敷	表採	計	A	B	C	D	不明	石敷	表採	計
不明		1	4		18	1		24			13		8	1		22		3	7		19			29
I		2	8		2	1		13		3	16		1			20		2	10			1	1	14
II	1	11	26		1			39		3	24		2			29	1	5	14					20
III		1 5	1 20		1 2			3 27		4	3 25		1			3 30		1 4	3 18					4 22
計	1	20	59		24	2		106		10	81		12	1		104	1	15	52		19	1	1	89

	石鏃								万鏃破片								石鏃計							
	A	B	C	D	不明	石敷	表採	計	A	B	C	D	不明	石敷	表採	計	A	B	C	D	不明	石敷	表採	計
不明		2	43		23	2		70			22		44			66		7	128		147	5		287
I		4	17			2		23		8	24		1	1		34		21	115		9	5	1	151
II		7	50	1	1			59		3	56		1			60	3	57	273	1	6			340
III		1 10	12 53		4			13 67		3 11	6 21		1			9 33		13 74	43 219		1 13			57 306
計		24	175	1	28	4		232		25	129		47	1		202	3	172	778	1	176	10	1	1141

	石錐								石匙(横型)								石匙(縦型)							
	A	B	C	D	不明	石敷	表採	計	A	B	C	D	不明	石敷	表採	計	A	B	C	D	不明	石敷	表採	計
不明		3	25		16			44			3					3			1		3			4
I		4	25		1	1		31		1	3					4			3		1			4
II		19	47		1			67		9	11					20		6	5					11
III		2 24	7 48		3			9 75		2 5	4 19		2			6 26		5	3 12		1 2			4 19
計		52	152		21	1		226		17	40		2			59		11	24		7			42

	石匙(不明)								石匙計								掻器							
	A	B	C	D	不明	石敷	表採	計	A	B	C	D	不明	石敷	表採	計	A	B	C	D	不明	石敷	表採	計
不明					3			3			4		6			10		3	10		8	2		23
I			2					2		1	8		1			10		17	47	1		5		70
II										15	16					31		16	63		5			84
III			2					2		2 10	7 33		1 4			10 47		4 24	9 57		4			13 85
計			4		3			7		28	68		12			108		64	186	1	17	7		275

	楕円形掻器								湾入ある掻器								石箆状							
	A	B	C	D	不明	石敷	表採	計	A	B	C	D	不明	石敷	表採	計	A	B	C	D	不明	石敷	表採	計
不明		1	19		8	3		31			1					1			3	1				4
I		18	61		2	6		87		1	10					11		2	4			2		8
II	1	16	84	1	1			103		8	5					13	2	5	10					17
III	1	3 45	4 119		4			7 169	1	1	2		1			5		1 10	4 7		2			5 19
計	2	83	287	1	15	9		397	1	10	18		1			30	2	18	28	1	2	2		53

	使用痕ある剝片								片刃石器								両刃石器							
	A	B	C	D	不明	石敷	表採	計	A	B	C	D	不明	石敷	表採	計	A	B	C	D	不明	石敷	表採	計
不明		1	3		5	2		11			2					2			3			1		4
I	1	13	19	1	1	5		40						1		1		2	1		1			4
II	2	9	41		1			53		3	1	1				5		5	4					9
III		9	1 19		3			1 31		2 7	1 4					3 11		6	1 9					1 15
計	3	32	83	1	10	7		136		12	8	1		1		22		13	18		1	1		33

	石斧								石鍬								石皿							
	A	B	C	D	不明	石敷	表採	計	A	B	C	D	不明	石敷	表採	計	A	B	C	D	不明	石敷	表採	計
不明						1		1			1		2	1		4			1		1	1		3
I										2	1					3		1	5					6
II	1	1	3					5		1	5					6		2	7					9
III		1 5	5 5					6 10		9	6 16		1 1			7 26		2 6	3 17					5 23
計	1	7	13			1		22		12	29		4	1		46		11	33		1	1		46

	凹み石								磨石								石剣							
	A	B	C	D	不明	石敷	表採	計	A	B	C	D	不明	石敷	表採	計	A	B	C	D	不明	石敷	表採	計
不明		1			1	1		3			2		3			5			3			2		5
I									1	3	4					8			4			1		5
II			1					1	1	4	8		1			14		3	5					8
III		1 4	2		1			2 6		1 31	35					1 66		17	2 14					2 31
計		6	3		2	1		12	2	39	49		4			94		20	28			3		51

	石棒								岩版								装飾品							
	A	B	C	D	不明	石敷	表採	計	A	B	C	D	不明	石敷	表採	計	A	B	C	D	不明	石敷	表採	計
不明						1		1			1					1								
I		1	1					2			2					2								
II		1	1					2																
III		4	1 7					1 11			42					42		2	1 3					1 5
計		6	10					17			45					45		2	4					6

	その他石器								円盤状石器								石臼(近・現代)							
	A	B	C	D	不明	石敷	表採	計	A	B	C	D	不明	石敷	表採	計	A	B	C	D	不明	石敷	表採	計
不明						1		1		2	35		2	5		44						2		2
I			1					1		3	6			1		10								
II										7	25		1			33								
III			2 1					2 1		8 33	31 151		8			39 192								
計			4			1		5		53	248		11	6		318						2		2

第11表　石器個数一覧

第12表　石器一覧ならびに区分

No.	機能		従来の名称	要点	
1	製作過程関連	A	a cores（石核）	素材	
			b flakes（剥片）		
			（c obsidians の cores, lumps and flakes）（黒曜岩）		obsidians は産地同定の試料のためとくにとりあげる
		B	hammer stones（槌石）	工具	
2	刺突具		a points（or spear heads）（石槍）	大型	重量・大きさによる区分
			b arrow heads（石鏃）	小型	
3	穿孔具		drills（石錐）		つまみの有・無
4	打割・敲打・掘削具	A	a choppers（片刃石器）	無柄	adze 的
			b chopping tools（両刃石器）		axe 的
		B	a axes（磨製）	有柄	
			b 石篦状石器の大型品（打製石斧？）		
			c 石鍬		
5	削掻彫具	A	a 横型石匙	有柄(?)	
			b 縦型石匙		
		B	a scrapers（削器）	無柄(?)	
			b round scrapers（楕円形掻器）		
			c concaved scrapers（湾入ある掻器）		
			d 石篦状石器の中・小型品		
			e utilized flakes（使用痕ある剥片）		
6	粉砕具	A	a 石皿	台	
		B	a 凹み石		
			b すり石		
7	その他	A	a 石棒 }	信仰関係？	
			b 石剣 }		
			c 岩版		
			d 岩偶		
		B	装身具		
8	不明		rounded stones（円盤状石器）	不明（錘・おもり？）	

「工具」的なそれとの両者を含めた。前者は厳密には石器とはいえないであろうが、遺跡出土の石器類の「組成」を云々する上で必要と考え一応ここに含めた。なおCのobsidiansのflake、chips、lampsをbから分離したのは、その出土の事実の明示が産地同定の為の資料化に必要と思われた故である。

(2)　No.2　刺突具としての機能を想定しうるもの。(a)・(b)の厳密な区別は困難であるが、ここでは形状（大・小）・重量ともに大なるものを便宜的に(a)、それ以外を(b)とし、前者に「槍」的な、後者に「鏃」的な機能を想定した。両者のヴァリエィションのあり方は、共通した様相を呈している。

(3)　No.3　穿孔具と思われるもの。最広義には「刺突具」のカテゴリーに含めるべきであろうが、旋回（回転）運動による「穿孔」作業に供せられたと思われるものとして独立させた。所謂つまみの有無など、形態等によって細分出来る。

(4)　No.4　打割・敲打・削り・掘削具と思われるもの。概ね大型品であり、それ自体の重量

がその機能と密接に関連するものであろう。着柄の有無・その方法・刃部の形成状況・形態などの観点から種々分類出来る。

刃部形状の差異には「オノ」的なものと「マサカリ」的なものの使用法・用途の相違が反映しているのではないかとする見解の一部を肯定すべき事象が観察出来る。

ただしB－aの小型品は先の意味からはその要件を満足させ得ないと考えられ、一種の「ノミ乃至彫刻刀」など彫器的な機能を想定すべきかと思われ、別に区分すべきかとも思われる。その場合は、No.5のBの仲間に含められるべきであろう。しかしここでは形態の類似をとり、便宜的にNo.4に含めておく。逆にNo.5の石箆状石器の大型品は打製「石斧」的な機能をもつとも考えられ、ここに含まれるべきかとも思われる。

(5) No.5　削り・掻き取り・彫具と思われるもの。小刀その他の比較的小型の利器としての機能を想定出来るものである。所謂つまみ（柄）の有無・刃部形状により細分可能である。うちB－bの便宜的にrounb scrapers(形態は正確には楕円形に近いが）と呼んだものは、観点によっては鏃（2－b）の未製品ともとれるものであり、若干逡巡せざるを得ない。しかし、左右相称にならないものが多い点、その孤状をなす両側縁に blunting （刃潰し）その他の製作技法関連とは思われない細破砕痕を有する点を重視し、ここでは本類に一応含めておく。したがって、組成「比率」を云々する際には、一応これを「刺突具」へ含めての処理も必要となってこよう（後掲)。

(6) No.6　広義の粉砕具と思われるもの（現在の所謂スリコギ・乳棒的なものと、擂鉢・乳鉢的なものの両者を含む)。なお凹み石を所謂「発火具」とは見做していない。

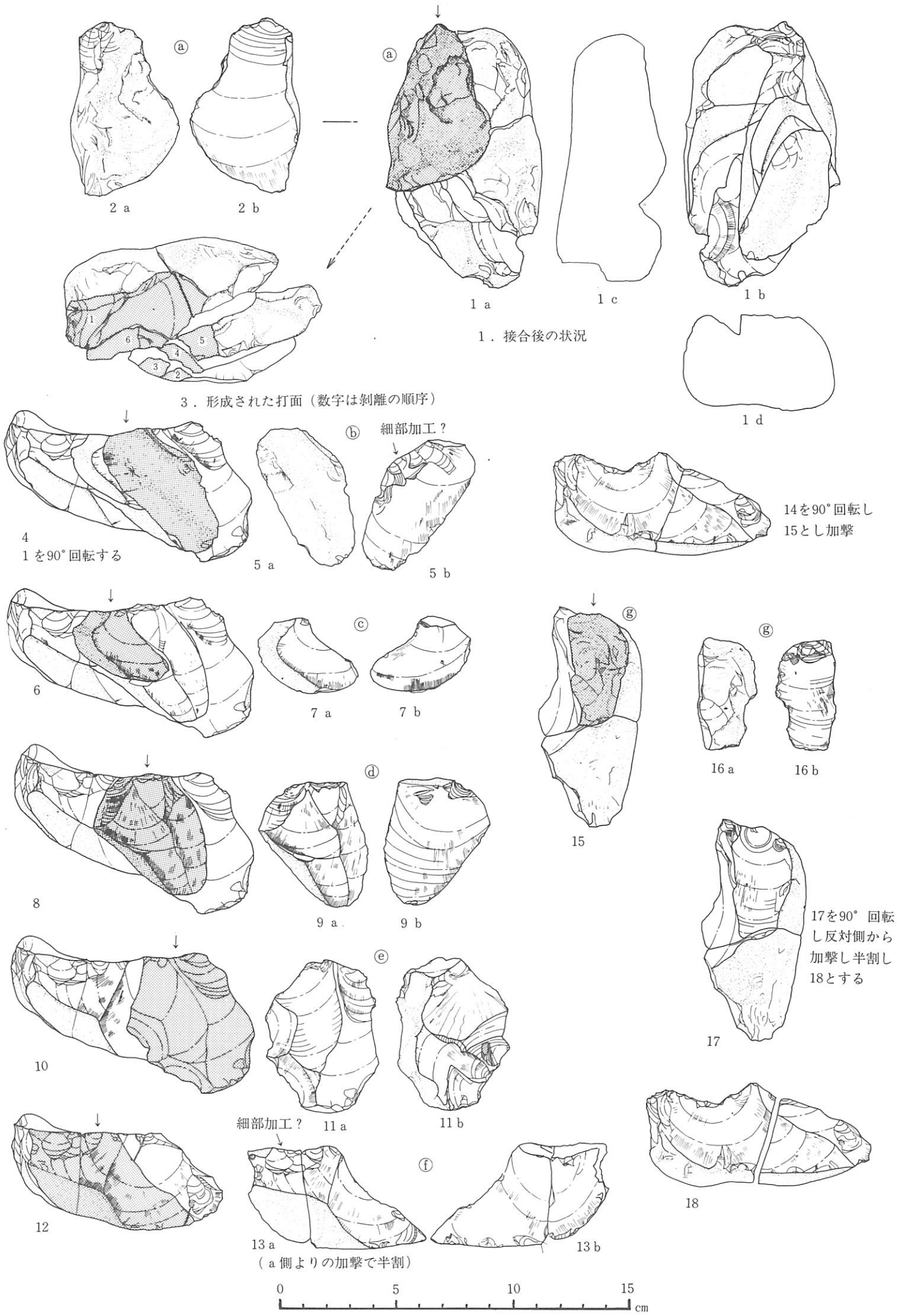
(7) No.7　上記以外のものの一括である。その点区分の原則が異なるのはやむを得ない。それを若干補足すると、(A)信仰に関するといわれるもの、(B)装身具といわれるもの、ということになる。二者の性格規定については、現在行なわれている定説に従がった。

(8) 同様に不明であるが、円盤状をなすものを集めた。

以上の区分にしたがい個別の説明を行なう。

ⓐ **石核**（原石、第75～77図、図版36）　石核乃至母岩（原石）と思われるものは後掲の表類にまとめた。ここでは剝離技法のある程度判明した二例をとりあげ、若干の説明を行なう。

(1) 第75図は剝離過程の復元をほぼ完全になしえた例である。ピット類・台石等の遺構類との



No.	最大長			剥離角
	縦	横	厚さ	
2	7.5	4.7	2.6	110°
5	6.6	3.3	1.1	114°
7	3.4	4.6	0.8	116°
9	5.5	4.2	0.8	122°
11	6.6	5.4	2.2	128°
13	4.6	6.6	1.4	130°
16	4.9	2.5	1.0	72°
17	9.3	4.3	2.6	—

出土地点　Cd12

出土層位　Ⅲ（Ⅰc）

石　　材　フリント質凝灰岩

産 出 地　江刺地方（？）

・数字は剥離の順序

・アルファベットは剥離された剥片

第75図　剥片類接合資料

共存関係は確認出来なかったが、同一地点からの集中出土現象が見られた資料である。晩期前半期のものであろう。

接合した剥片（flakes）・石核（cores）類は計８点からなる（ただし偶発的な破損の結果をも加えると10点にはなるが、意味のある数としては前者であろう）。復元された母岩は長径、11.5×短径6.5×厚さ4.0cm程の長楕円体ともいうべきものとなった。この母岩に対する剥離作業は、基本的には以下のとおりである。即ち(1)調整打面(prepared platform)形成のための表皮（coating）に対する加撃→(2)flakes剥離のための調整打面に対する連続的加撃→(3)調整打面形成のための剥離の加撃点を形成するための小規模・部分的な加撃→(4)調整打面形成のための加撃→(5)偶発的な破損によると思われる剥離作業の中断(?)である。なお、(1)の前にも(3)の如き予備的・小規模な剥離が行なわれた可能性はあろう。生じたflakesは、調整打面をもつもの６、非調整打面をもつもの１となり、他にcore1が残る。

作業(1)とその結果は同図１～３に示した。長径部の一端を母岩の中心に向かって、あたかもそれを縦割りするかのように加撃し、flakes(a、２）を剥離する。aは 2.1cmとかなり部厚であり、単なる flake ではなく、二次的なcoreとしても十分利用可能である。なおこの２の加撃点周辺には、主要剥離面（main flaking surface）の反対側にも細かい剥離面が残存している。したがって先にもふれたような作業(3)の如き予備的な剥離乃至若干の〝打ち損じ〟があった可能性がある。aは長辺7.5cmと長径の⅔弱を占めるにすぎず、それほど狭長な flake とはいえない。

この剥離により長辺7.5×短辺4.7cm程の剥離面、即ち調整打面が形成されたことになる(同3)。３にはアラビア数字でそれ以降の剥離の順序を仮に示しておいた。１と３とは90°回転させた位置関係にある。

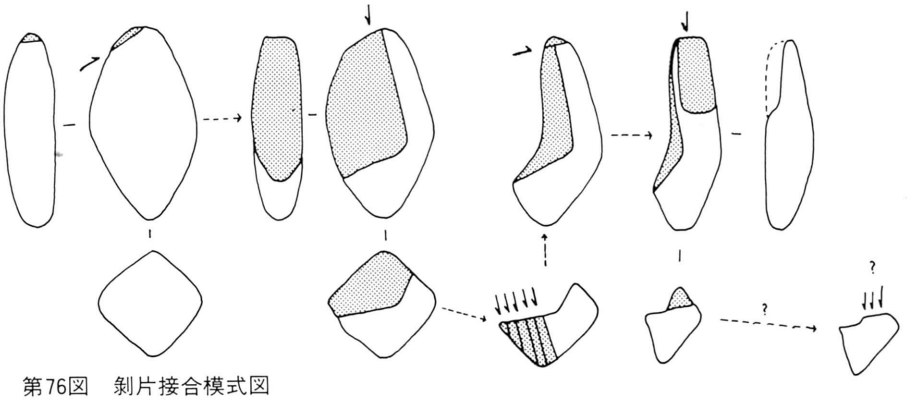
作業(2)とその結果は同図４～14に示した。coreを左側に、flakeを右側に配した。アラビア数字は作業の進行過程を意味する。いずれも作業(1)で形成された調整打面を利用して、同一面・同一方向からの加撃をくり返し、相互に表裏で接合しあう関係にあるflakesをつくり出している。flakesの形状には所謂縦長（同図ｂ５、ｄ９、ｅ11）、同横長（ｃ７、ｆ13）の両者がある。大小・厚さも変化に富み、均一なflakesは生産されていない。各flakesは既述のように相互に接合するものが多いが、ｅ11とｆ13は相互には接合しない。したがって両者の間にはさらに若干の剥離作業・flakesを介在させる必要がある。両者はともにflakes（ａ２）に接合する。

法量計測値他は表に譲るが、剥離角は大略110°～130°の巾におさまっている。

作業(3)は特に図示はしなかったが、同図15の加撃点が予め剥離（加撃は同図14のcoreの左端部から行なわれている）され調整打面が用意されていることから認定したものである。

面を調整打面としようとしたものらしい。ただし、理由は判然としないが、おそらく偶発的な力によりcore（同17・18）が半割したので、それ以上の剥離は中断したものと思われる。

本資料から復元しえた作業内容は以上である。これはつまるところ、予備的な打面形成（母岩の短軸方向への加撃）→それに直交する長軸方向への加撃での打面形成→それを用い、それに直交する短軸方向への連続的加撃・剥離→それに直交し短軸方向への加撃による予備的打面形成→それに直交し長軸方向に一致する加撃による打面形成→（作業中断）ということになる。模式化すると下図のようになろう。



第76図　剥片接合模式図

flakesのうちｂ５とｅ11、とりわけｂ５にはその周縁に細かい剥離痕が見られる。したがって、本資料が検出された地点において、石器製作の第二段階ともいうべき作業（細部加工）も行なわれていた可能性が極めて大きいといえる。ｂ５は現状では掻器乃至削器と見做されるべき特徴を有している。

(2)　第77図は二点のみの接合例である。先と同様に調整打面が形成された後に、それに直交する加撃により剥離されている。若干部厚ではあるが、一応flakesと見ておく。

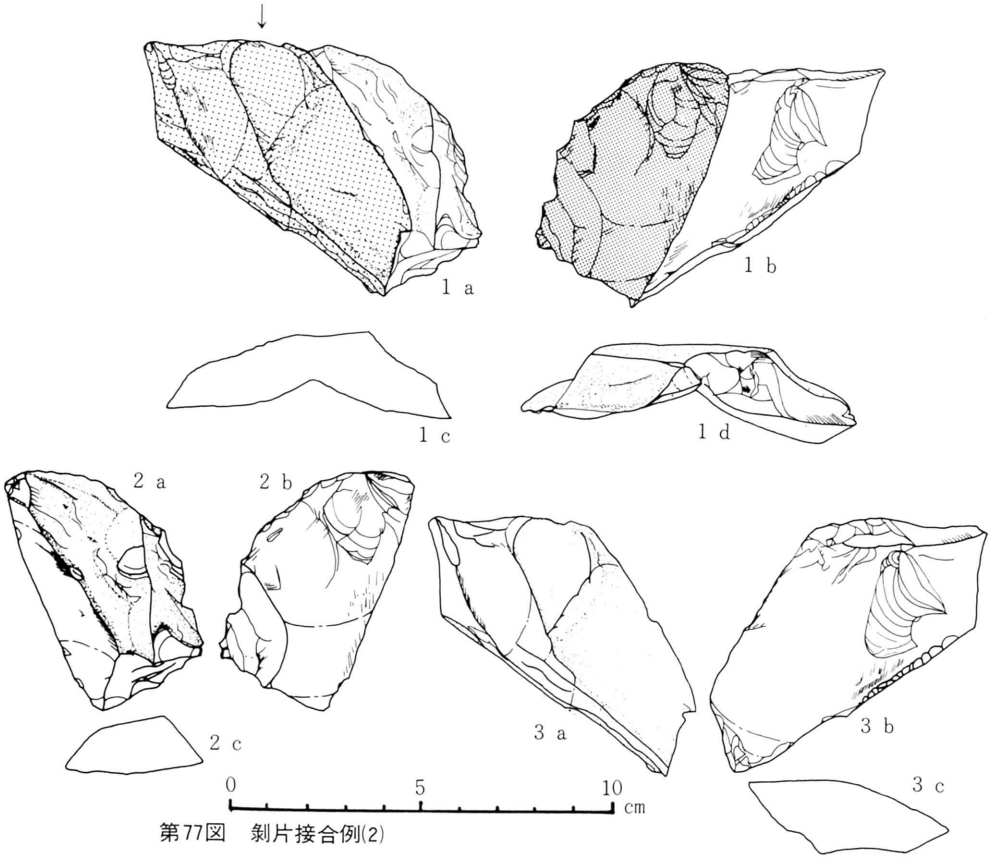
以上のように２例から得られた知見は、調整打面の形成、それを用いての母岩の短軸方向への連続剥離というものになろう。これは石器製作（剥片生産）技法としてはとりたてていうべきものではないであろうが、縄文時代とりわけ晩期の類例としては貴重なものと思われ、その意味では資料としての価値はあろう。岩手県内においても若干の類例が得られつつある。たとえば縄文時代中期～後期初頭たる石鳥谷町高畑遺跡[注1]においても良好な資料が出土している。その詳細にふれる余裕は無いが、打面の移動（回転）が比較的頻繁に行なわれ、その結果として非調整打面・調整打面をもつものが同一coreから生産されるという特徴を有するらしい。なお

この例は竪穴住居跡内のピットからの出土資料である。住居跡内への「剝片貯蔵」の事実はたとえば都南村湯沢遺跡[註2)]においても確認されている。今後は、出土状況の確認を含めて、この種遺物の類例の蓄積に努め、不明な点の多い縄文時代石器製作の実態の一部の解明に資すべきであろう。

材質・数・比率は第13表のとおりである。

註1）　鈴木優子氏の教示による。

註2）　都南村湯沢遺跡（昭和52年度）岩手県理文センター文化財調査報告書第2集　財岩手県埋蔵文化財センター　昭和53年



第77図　剝片接合例(2)

Cd12、Ⅲ（Ⅰc）淡緑色凝灰岩（古生層）

第13表

素　材　名	個　数	比　率	素　材　名	個　数	比　率
チャート	28	9.2	複輝石安山岩	7	2.3
輝緑凝灰岩質チャート	21	6.9	変朽安山岩	2	0.7
粘板岩質チャート	7	2.3	流 紋 岩	36	11.8
安 山 岩	6	2.0	白色細粒凝灰岩	4	1.3
輝石安山岩	3	1.0	珪質細粒凝灰岩	75	24.6

素　　材　　名	個　数	比　率	素　　材　　名	個　数	比　率
凝 灰 岩	3	1.0	砂質粘板岩	1	0.3
フリント質凝灰岩	8	2.6	チャート質粘板岩	3	1.0
流紋岩質凝灰岩	3	1.0	凝灰質粘板岩ホルンフェルス	1	0.3
砂質凝灰岩	2	0.7	珪質粘板岩	2	0.7
泥質珪化凝灰岩	2	0.7	珪 化 木	25	8.2
珪質角礫凝灰岩	1	0.3	珪　　石	6	2.0
珪質泥質凝灰岩	1	0.3	珪　　岩	2	0.7
輝緑凝灰岩	6	2.0	玉　　髄	3	1.0
チャート質輝緑凝灰岩	7	2.3	め の う	2	0.7
鉄質石英	9	3.0	チャート質硬砂岩	1	0.3
硬質泥岩	9	3.0	凝灰質砂岩	1	0.3
凝灰質硬質泥岩	4	1.3	玢　　岩	1	0.3
珪質泥岩	2	0.7	長岩玢分	1	0.3
粘 板 岩	3	1.0	磁 鉄 鉱	1	0.3
粘板岩ホルンフェルス	6	2.0	計	305	100.4

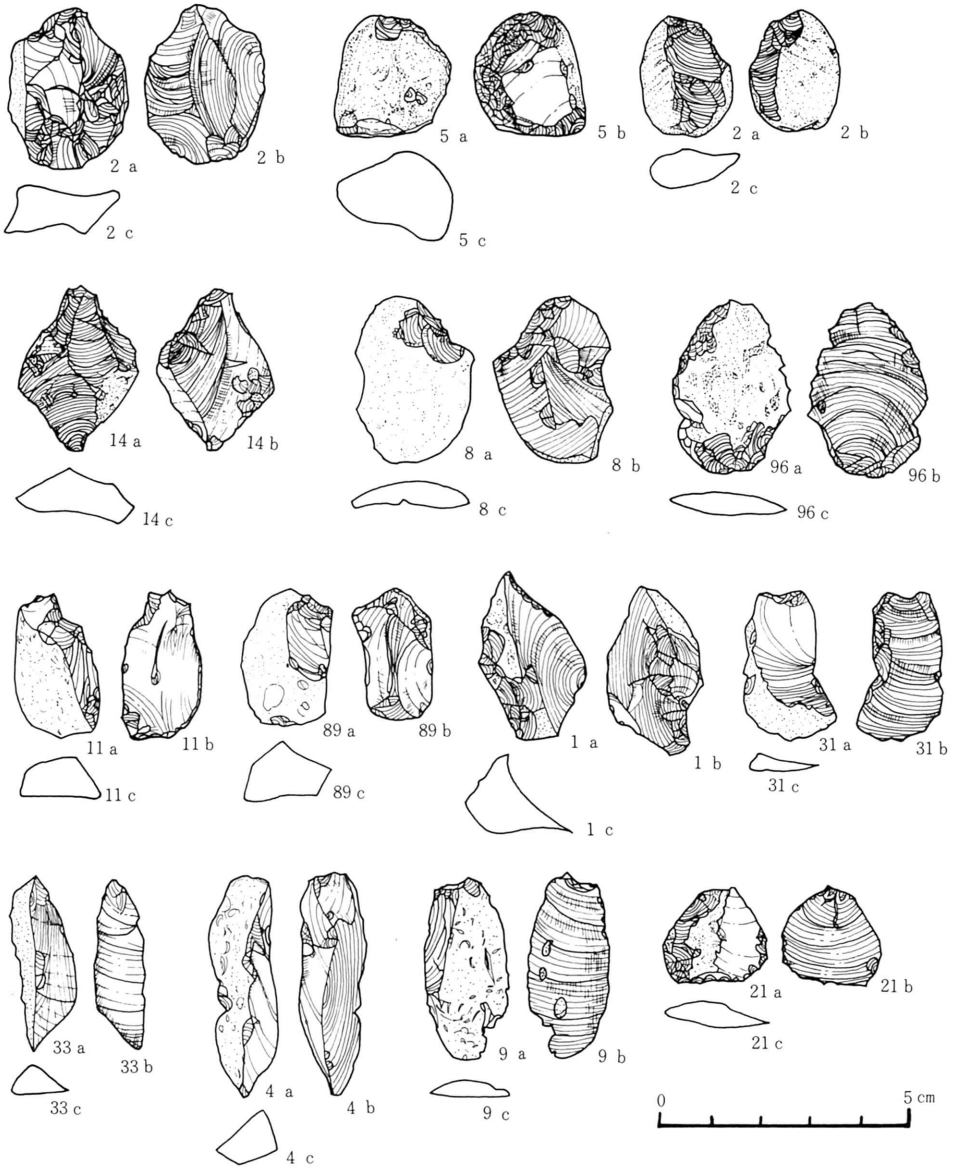
（他に黒耀岩がある）

ⓑ **黒耀岩**（第78図、図版37）　石器化にまではいたっていない素材ではあるが、一定量の資料数を得たので、これについても若干の説明を加えておく。

これにはⓐ塊状をなすもの、ⓑ剝片状をなすものの二大別がある。ⓐにはpebbles乃至lumpsに近い形状のものと、それが半割されたものがある。いずれにしても長径5cm前後の小礫的なものであったろう。剝離痕の見られる例を観察すると、同一の加撃点から両面にむかって加撃されるもの、両面ともにその周縁部から中心方向へ加撃される技法などを知ることが出来る。後者の加撃点は一に限らないので、加撃点の移動を伴なうものであったことが推定出来る。これは復元資料の技法とも矛盾しないし、また縄文時代に存在しえた技法でもある。

ⓑはflakesあるいはchipsと見做されるべきものであろう。ただし極端に小型の例はなく、大部分はflakesと区分されてよいであろう。㋐縦長、㋑横長、㋒その他に形態分類をなしうる。㋐、㋑にはcoatingに加撃し、背面全面がcoatingで、断面形態がカマボコ形のものと、調整打面風のものをもち、断面が三角形乃至台形をなすものとがある。前者は第一次剝離の、後者は二次・三次的剝離の産物である。㋒は若干厚手であり、加撃方向も変化に富む。その点、coreに近いといえるが、縄文時代石器のcoreとしては、やや小型にすぎるものを集めた。細破砕痕の見られるものもあり、石器として用いられたものを含む可能性もある。

以上のように、技法についての若干の情報（調整打面の形成、加撃点の移動など）を伝えてはくれるが、とりたてて顕著なそれを表わしているとは思えない。技法もさることながら、今後はその産地の究明にもむかうべきであろう。ちなみに、高橋文夫氏の教示により実査した産出地の例として、胆沢郡陸中折居駅西方の段丘（崖）礫層（中位段丘の段丘崖近く）がある（後述）。



第78図　黒耀岩片実測図

ⓒ **槌　石**　若干疑問ある例も含む（たとえば、細破砕痕を有しないなど）が、一応hammer stone的な機能を想定しうる形状のものをここに一括した。詳細な説明は省略し、その他は後

表に譲る。先端部を中心とした破細部をもつ。

素材は次のとおりである。

第14表

粘板岩	5	21.7%
凝灰質粘板岩	15	65.2
玲岩	1	4.3
安山岩	1	4.3
片状ホルンフェルス	1	4.3
計	23	99.8%

以上は素材・製作に関すると思われるものである。

次に刺突具と思われるものの説明を行なう。

ⓓ **石槍**（第79図、図版37）　広義の刺突具でかつ鏃よりも大型のものを仮にこう呼んだ。鏃との区別は便宜的で大きさ、とくに重量に求めた。

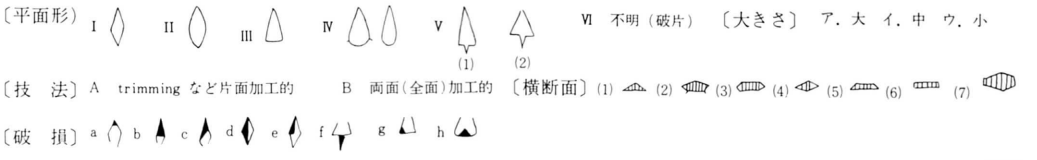
それらについて次の項目にしたがい観察を行なった（第15表）。

(1)　平面形、不明を含めて6類型である。鏃の形態分類に準じ、菱形・柳葉形・三角形・偏桃形・有柄（狭長と短小の二種）などを用意した。

(2)　大きさ、大・中・小の三種が存在する。

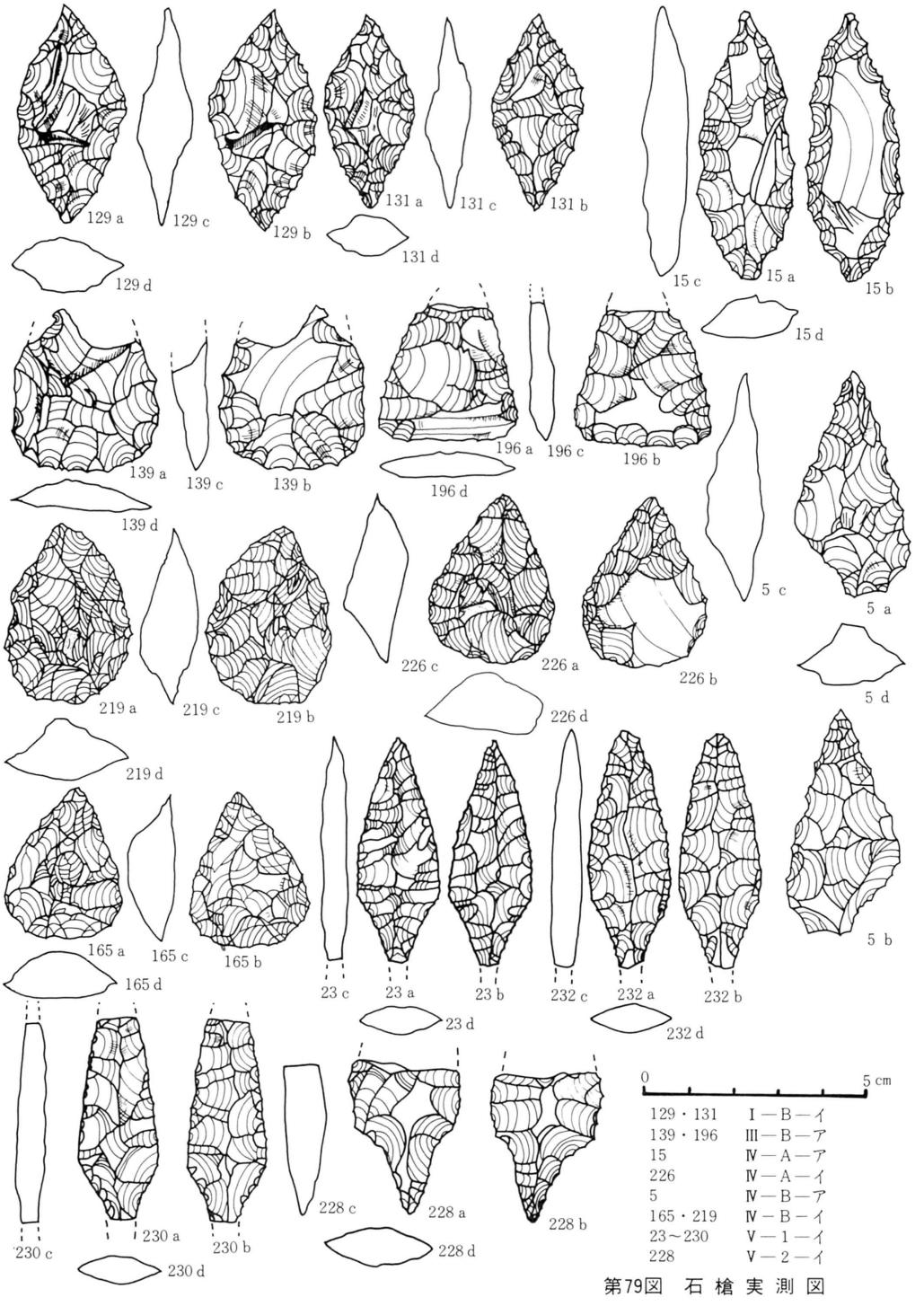
(3)　技法、trimming的なものを含めての片面加工的なもの、両面加工的なもの、の二大別。

第15表



タイプ	断							破								完全	その他
	1	2	3	4	5	6	7	a	b	c	d	e	f	g	h		
I－B－イ		1	1	5				3			1					3	
II－B－ア		1						1									背トリ1
イ		1	1								2						背トリ1、両トリ1
ウ		1		1				2									両トリ1
III－A－ア		1						1							1		両トリ1
イ	2											1			1		
III－B－ア		1	1						1			1					
イ		2		1				1	1					1			片トリ1
IV－A－ア	1	1						2									
イ	1	1	1					1								2	両トリ1
IV－B－ア		1		2				2						1			
イ	2	5		10				14						5	1	1	
V－1－イ		1		3				3					4				片トリ1
2－イ		2		3				1	2				3				片トリ1、両トリ1
3		2		2									4				片トリ1

	I B	II B	III A	III B	IV A	IV B	V B_1	V B_2	V B_3	計	
ア	—	1	1	2	2	3	—	—	1	10	17.9%
イ	7	2	2	3	3	17	4	6	—	44	78.6
ウ	—	2	—	—	—	—	—	—	—	2	3.6
計	7	7	3	5	5	20	4	6	1	56	100.1



129・131	Ⅰ—B—イ
139・196	Ⅲ—B—ア
15	Ⅳ—A—ア
226	Ⅳ—A—イ
5	Ⅳ—B—ア
165・219	Ⅳ—B—イ
23～230	Ⅴ—1—イ
228	Ⅴ—2—イ

第79図　石槍実測図

(4) 横断面形態、7種であるが、両面加工に対応するもの、片面加工のそれに整理される。

(5) 破損状況、完全品を含めて9類型ある。所謂身の部分と、柄関連の部分に二大別出来る。前者は、横断的（斜位を含む）なものと、縦断的なものを含む。完全品による観察の結果は第15表にまとめた。平面形は、Ⅳがもっとも多い。無柄のカテゴリーでまとめればⅢ・Ⅳ同類となり、その比率はさらに増す。有茎と、両端の尖るものは同率で存在する。したがって、三種併存が基本的姿であるとはいえる。

Ⅰ・Ⅱは両面加工のみであり、断面形態もそれに対応した2～4のみからなる。先端部と縦割り的な破損状況のもののみである。

Ⅲは、片面・両面の両者が相ならんで存在する。先端部を含めての身の部分、基底辺に破損が見られるが、前者の例が多い。

Ⅳはもっとも多いが両面加工が圧倒的に多い。先端部を中心とした身の部分の破損が基底辺よりも顕著に多い。

Ⅴは、(1)・(2)の両者がほぼ同比で存在する。いずれも両面加工である。先端部破損が最も多くあるが、柄部もまた多い。

全体的にCは例外的存在で、a、bが、とりわけbが基本型的に存在する。破損が先端部と基底辺（有柄のものでは柄部）の両者に存在することは、柄を伴なった刺突具であったと思われるこの種石器の使用状況を、忠実に反映しているといえよう。

使用素材は次のとおりである。

第16表　槍　材　質

素材名	個数	比率	完全品				
			Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ
泥質チャート	4	6.0				3	
珪質泥岩	5	7.5	1			3	1
黒耀岩	3	4.5					
硬質泥岩	11	16.4	1	1	5	3	2
硬質凝灰質泥岩	6	9.0	2	2	1	2	6
玉髄	10	14.9	2			3	1
フリント質凝灰岩	9	13.4		2	1	2	3
赤色フリント質凝灰岩	10	14.9				3	
輝緑凝灰岩	9	13.4	1			5	1
計	67	100	7	5	7	24	14

ⓔ **石鏃** 刺突具の主体の一たる鏃は、その平面形態で大別した。

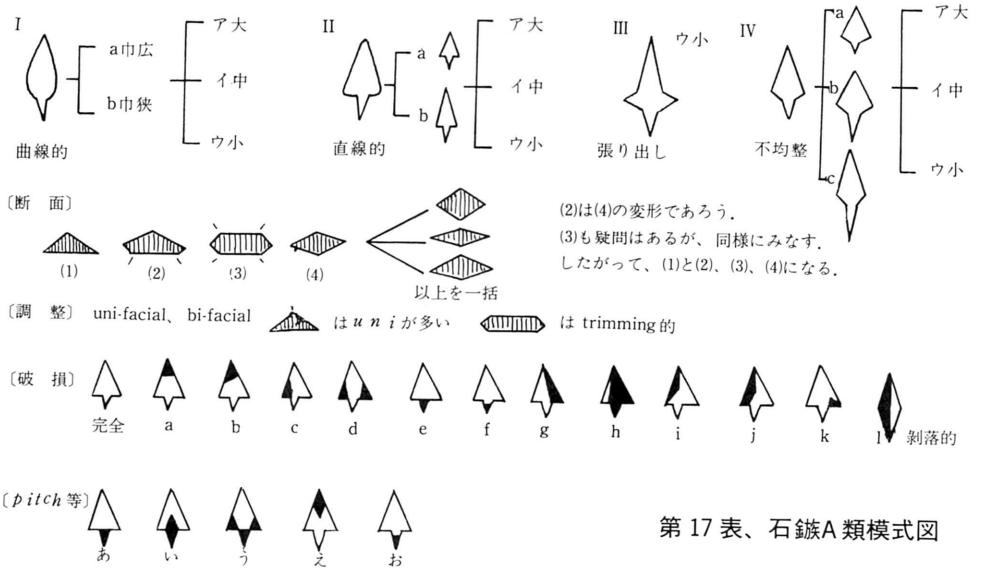
即ち茎乃至それに準ずるものを有するタイプ（所謂有茎と、狭長菱形などの両端の尖るもの二種）、それらをもたないタイプ（所謂抉り入り、二等辺三角形、狭長な偏桃形）の二大別・六サブタイプである。以下そのタイプ別に説明を行なう。各種計測値他は後表以下に示した。

A類 いわゆる有茎鏃である（才80～87図、図版38～40）　この種資料について、第17表

に示したような基準（平面形態・大きさ・横断面形態・調整技法・破損状況・アスファルト等の付着の有無等々）に従がい観察・分類を行なった。なお横断面形態の(2)・(3)・(4)は同一種の変種として一括しうるであろうし、技法との対応関係をみると、当然ながら(1)がuni-facial、それ以外がbi-facialに、そのうち(3)はtrimming的なものに、それぞれ対応していることが多い。その結果は第18表のとおりである。それらを若干説明する。まず、タイプ別の比率を見ると、Ⅰ：Ⅱ：Ⅲ：Ⅳ＝14：47.2：2.1：36.7(%)となり、ⅡとⅣが主体をなし、それ以外が従となっている。しかし、Ⅰ～Ⅲが左右対称で、調整入念であることから一括すると、それらが63.3%、左右不均整で、かなり部厚・調整の粗いもの36.7%となり、2：1の比率に近い。このような精粗の二種の存在の解釈には、粗を未製品と見る観点がありうる。しかし、部厚なものが多い点は単に未製品とのみ見ることを躊躇させるものがある。ここでは、使用対象の相異に起因する形態の差、つまり本質的な差と見なしておく。

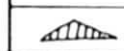
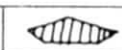
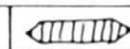
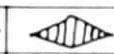
断面形態と調整技法は、(2)～(4)とbi-facialでそれぞれ90%を越え、この種石器の基本形が両面加工で、その結果としての横断面形態が広義の菱形を呈す、というものであることを明白に示している。断面(1)・(3)は、その意味で未製品的なものに対応する形態である可能性も高い。(3)はtrimming的なものの反映であろう。Ⅰ以下のタイプと断面形態の特定の対応関係はとくに指摘出来ない。

破損状況を見ると、完全品：破損品＝15.3：84.7(%)となり、後者がほとんどすべてを占める。破損の原因の多くは使用によるものであろうから、この種石器が実用に供せられる度合・消耗度が非常に高かったことを如実に示している。これは、本包含層を「通常」の日常用具の破損品を多く出土する「通常」の包含層と見なしうる一根拠を示すものとも解しうる。(a)・(b)の先端部



第17表、石鏃A類模式図

第 18 表　石鏃A類集計表

タイプ	断面				調整		破損													pitchなど					その他
					uni facial	bi facial	完全	a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	l	あ	い	う	え	お	
Ⅰ-a-ア		1	1	2		4	1		2			1	1												⊕1.
イ	2	5	3	18	2	26	3	6	6	1		8	14							6					⊕1.uniは△,obsi·1
ウ		2	1	1		4	1					2	1			1									
小計	2	8	5	21	2	34	5	6	8	1		11	16			1				6					
Ⅰ-b-ア		1		6		7	1	4					6											3	
イ		3		4		7		6				3	3												
ウ		2		1		3	2						1											3	
小計		6		11		17	3	10				3	10												
Ⅰ計	②	⑭	⑤	㉜	②	(51)	⑧	⑯	⑧	①		⑭	㉖			①				⑥				③	
Ⅱ-a-ア		1			1			1		1		1													
イ	1	1	2	4	1	7	4	2		3		3	1							1					uniは△
ウ	2	7	2	27	3	35	7	16	2	5		4	18			3				3					uni△1, ⬠2, obsi 2
小計	3	9	4	31	5	42	11	19	2	9		8	19			3				4					
Ⅱ-b-ア		4		10		14	1	8	2	1		3	6			5				3					
イ			1	14		15	1	10		2		2	9												
ウ				5		5	1	2					4												
小計		4	1	29		34	3	20	2	3		5	19			5				3					
Ⅱ-c-ア	1			11		12		1	11	1		1	3			1									
イ		8	1	55		64	1	27	21	10		12	40	2		2	1			7					obsi·1
ウ		4		18		22	3	12	1	2		2	14												obsi·1
小計	1	12	1	84		98	4	40	33	13		15	57	2		3	1			7					
Ⅱ計	③	㉕	⑥	144	⑤	174	⑱	(79)	㊲	㉕		㉘	(95)	②		⑪	①			⑭					
Ⅲ-ウ		3		5		8	3	5					5							1					
Ⅲ計		③		⑤		⑧	③	⑤					⑤							①					
Ⅳ-a-ア	2	4	2	4		12		1	5	6	1		1			2		1							⊕2
イ		3		8		11		4	1	6		2				2		1							
ウ		1	1	2		4		1	2	2			1												
小計	2	8	3	14		27		6	8	14	1	2	2			4		2							
Ⅳ-b-イ				2		2		1					1												
ウ	1	13	5	35		55	17	20	7	8	2		17	1		1	1			1					obsi 1　⊕3
小計	1	13	5	37		57	17	21	7	8	2		18	1		1	1			1					
Ⅳ-c-ア				1		1	1			1			1												
イ	1	5		8		14	1	2	8	5		2	7			1				1					⊕1
ウ	1	11	4	23		40	10	9	3	6		1	21	1		1	1								⊕1
小計	2	16	4	32		55	12	11	11	12		3	29	1		2	1			1					
Ⅳ計	⑤	㊲	⑫	(83)		(139)	㉙	㊳	㉖	㉞	③	⑤	㊾	②		⑦	②	②		②					
総計	⑩	(79)	㉓	264	7	372	58	138	71	60	3	47	170	4		19	3	2		12				3	